

る。厚みは20cm～40cmを測った。

第2層 床土である。7.5Y R5/8明褐色粘質土で、第6地区の全域に堆積がみられる。基本的には約5cmの厚みであるが、部分的に10cm前後みられる地点がある。

第3層 5Y6/3オリーブ黄色+10Y R6/8明黄褐色砂質シルトで、第6地区の全域に堆積がみられる。厚みは10cm～30cmを測った。段の北側の部分でT.P+64m、南側でT.P+64.5mと、上下に約50cmずれた状況を呈している。

第4層 2.5Y5/2明灰黄色砂質シルトで、第6地区では、段の北側（北半部）はその南端部、すなわち段の付近で途切れている。厚みは5cm～20cmを測った。段の南側（南半部）でも南端部付近で途切れている。厚みは約8cmを測った。

第5層 N3/暗灰色粘質土で、南半部、北半部ともに南端部付近で途切れている。厚みは5cm～20cmを測った。

第6層 7.5Y R5/8明褐色土で、第6地区では南半部の北端部付近にごくわずかに堆積がみられる。厚みは約5cmを測った。

第7層 地山である。10Y R5/6黄褐色粘質土で、南半部の一部で礫を多量に含む地域がある。地山は南から北へかなり傾斜しており、標高は南端部でT.P+64.5m、中央部でT.P+63.9m、北端部でT.P+63.4mを測った。したがって第6地区の南端と北端では約1mの比高差がみられる。

地山直上が遺構面となっており、古墳時代前期、古墳時代後期の遺構が検出された。

第7地区

第7地区は第6地区と里道をはさんで南側に隣接する地区である。里道部分は第7地区に含めて調査した。現地表は北端の里道部分が一段低く、その他はほぼ水平である。里道部の地表高はT.P+64.8m、その他はT.P+65.1mを測った。調査以前はみかん畑となっていた。層序は4層に分層できる。

第1層 耕作土である。10Y R3/3暗褐色土で、第7地区のほぼ全域に約15cm～

20cmの厚みを持って堆積している。

第2層 床土である。7.5Y R5/8明褐色粘質土で、第7地区では里道部分をのぞくほぼ全域に約5cmの厚みを持って堆積がみられる。

第3層 5Y6/3オリーブ黄色+10Y R6/8明黄褐色砂質シルトで、第7地区では里道部分をのぞくほぼ全域に堆積がみられる。厚みは約20cmを測った。

第4層 2.5Y5/6明灰黄色砂質シルトで、第7地区では里道部分をのぞくほぼ全域に堆積がみられる。厚みは約10cm～20cmを測った。

第5層 地山である。10Y R5/6黄褐色粘質土であるが、第7地区では礫を含む部分が多い。標高はT.P+64.6m付近にあり、ほぼ水平である。地山直上が遺構面となっており、平安時代、鎌倉時代の遺構を検出した。

第8地区

第8地区は第7地区と農業用水路をはさんで南に隣接する地区で、南は府道春木・岸和田線に接続している。今回の調査区のうち最も南側に位置する地区である。現地表は、T.P+66m～66.2mにあり、調査前はみかん畑となっていた。層序は北半部では5層、南半部では4層に分層できた。

第1層 耕作土である。10Y R3/3暗褐色土で、第8地区の全域に10cm～30cmの厚みを持って堆積がみられる。

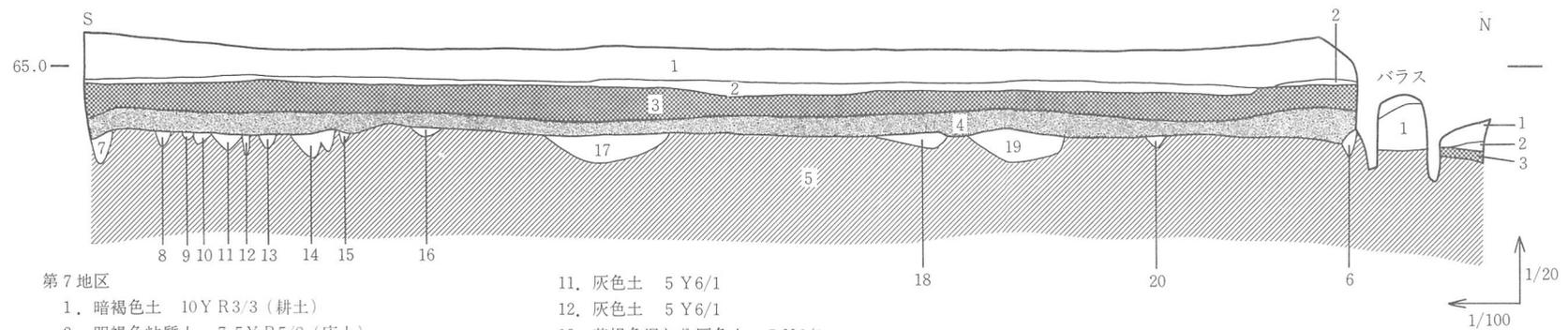
第2層 床土である。7.5Y R5/8明褐色粘質土で、第8地区の中央やや南側から北の地区に堆積がみられる。厚みは約3cmを測った。

第3層 7.5Y6/3オリーブ黄色+10Y R6/8明黄褐色砂質シルトで、第8地区の全域に堆積がみられる。厚みは10cm～30cmを測った。

第4層 2.5Y5/2明灰黄色砂質シルトで、第8地区のほぼ全域に堆積がみられる。厚みは10cm～30cmを測った。

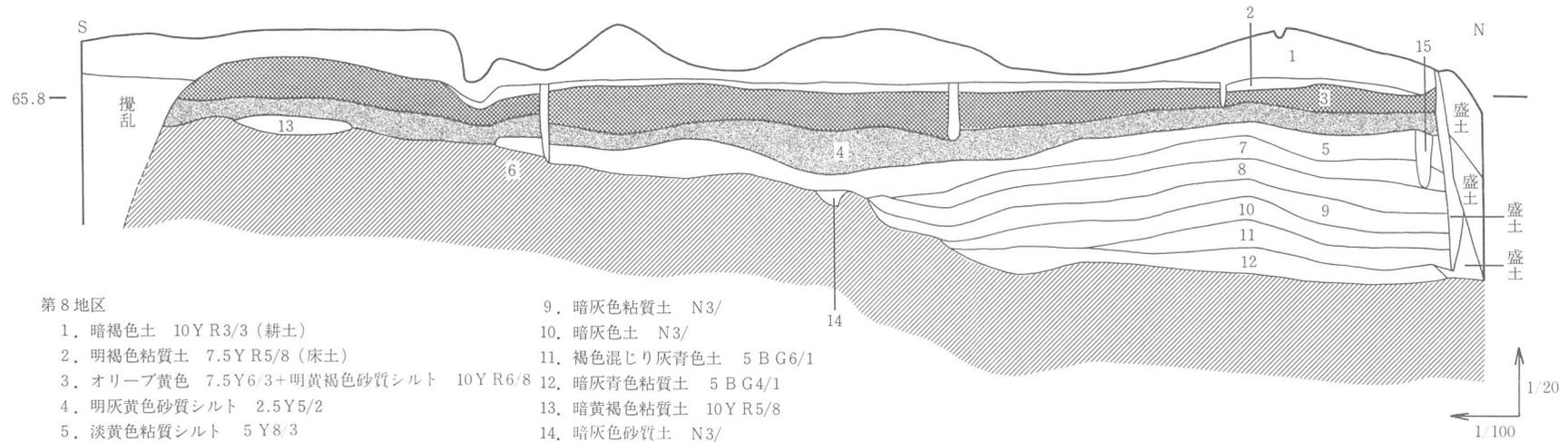
第5層 5Y8/3淡黄色粘質シルトで第8地区の北半部に堆積がみられる。厚みは10cm～20cmを測った。第5層上面で遺構を検出した。鎌倉時代（13世紀前半）に比定できるものである。

第6層 地山である。10Y R5/6黄褐色粘質土で、一部礫を含む地域がみられる。南から北へゆるく傾斜しており、標高は南端部でT.P+65.7m、北端部



第7地区

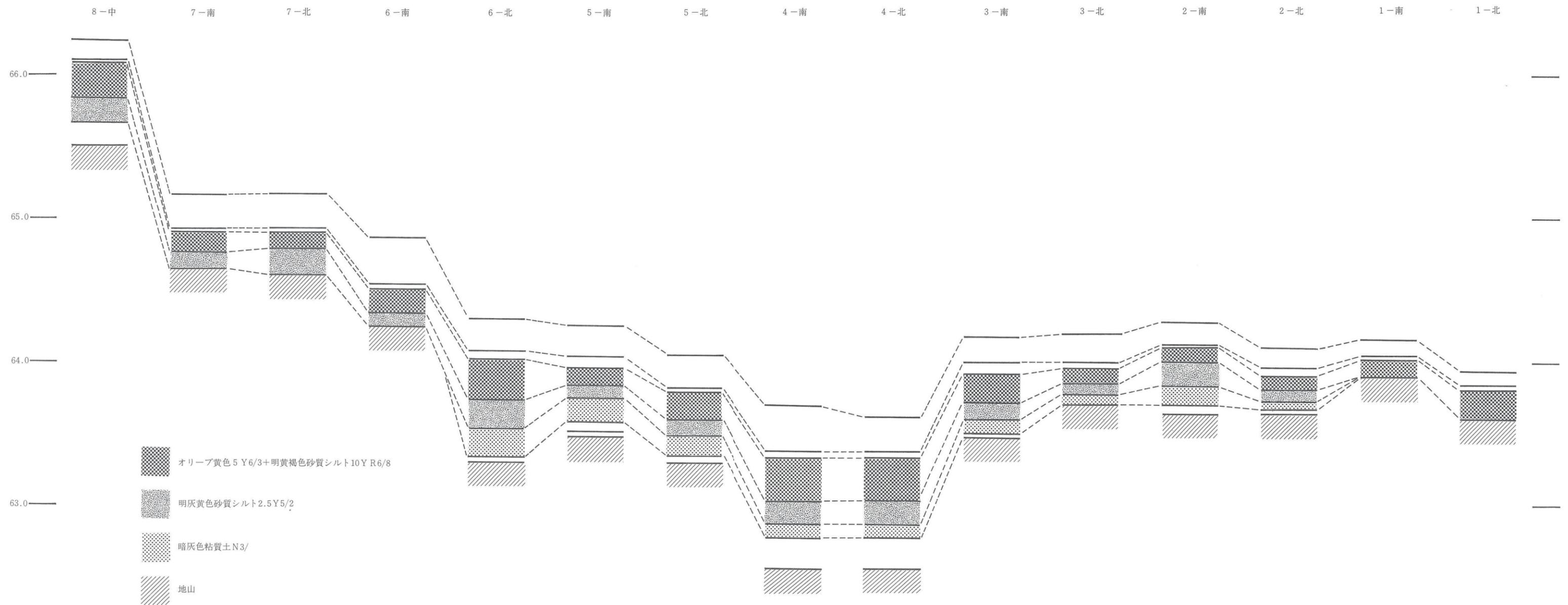
- | | |
|-------------------------------------|--------------------------|
| 1. 暗褐色土 10Y R3/3 (耕土) | 11. 灰色土 5 Y6/1 |
| 2. 明褐色粘質土 7.5Y R5/8 (床土) | 12. 灰色土 5 Y6/1 |
| 3. オリーブ黄色 5 Y6/3+明黄褐色砂質シルト 10Y R6/8 | 13. 黄褐色混じり灰色土 5 Y6/1 |
| 4. 明灰黄色砂質シルト 2.5Y R5/6 | 14. 黄褐色混じり灰色土 5 Y6/1 |
| 5. 黄褐色粘質土 10Y R5/6 (地山) | 15. 灰色土 5 Y6/1 |
| 6. 黄褐色混り灰色土 5 Y6/1 | 16. 灰色土 5 Y6/1 |
| 7. 黄褐色混じり灰色土 5 Y6/1 | 17. 黄褐色混じり暗褐色土 7.5Y R3/3 |
| 8. 灰色土 5 Y6/1 | 18. 黄褐色混じり暗灰色土 N3/ |
| 9. 灰色土 5 Y6/1 | 19. 黄褐色混じり灰色土 5 Y6/1 |
| 10. 灰色土 5 Y6/1 | 20. 黄褐色混じり灰色土 5 Y6/1 |



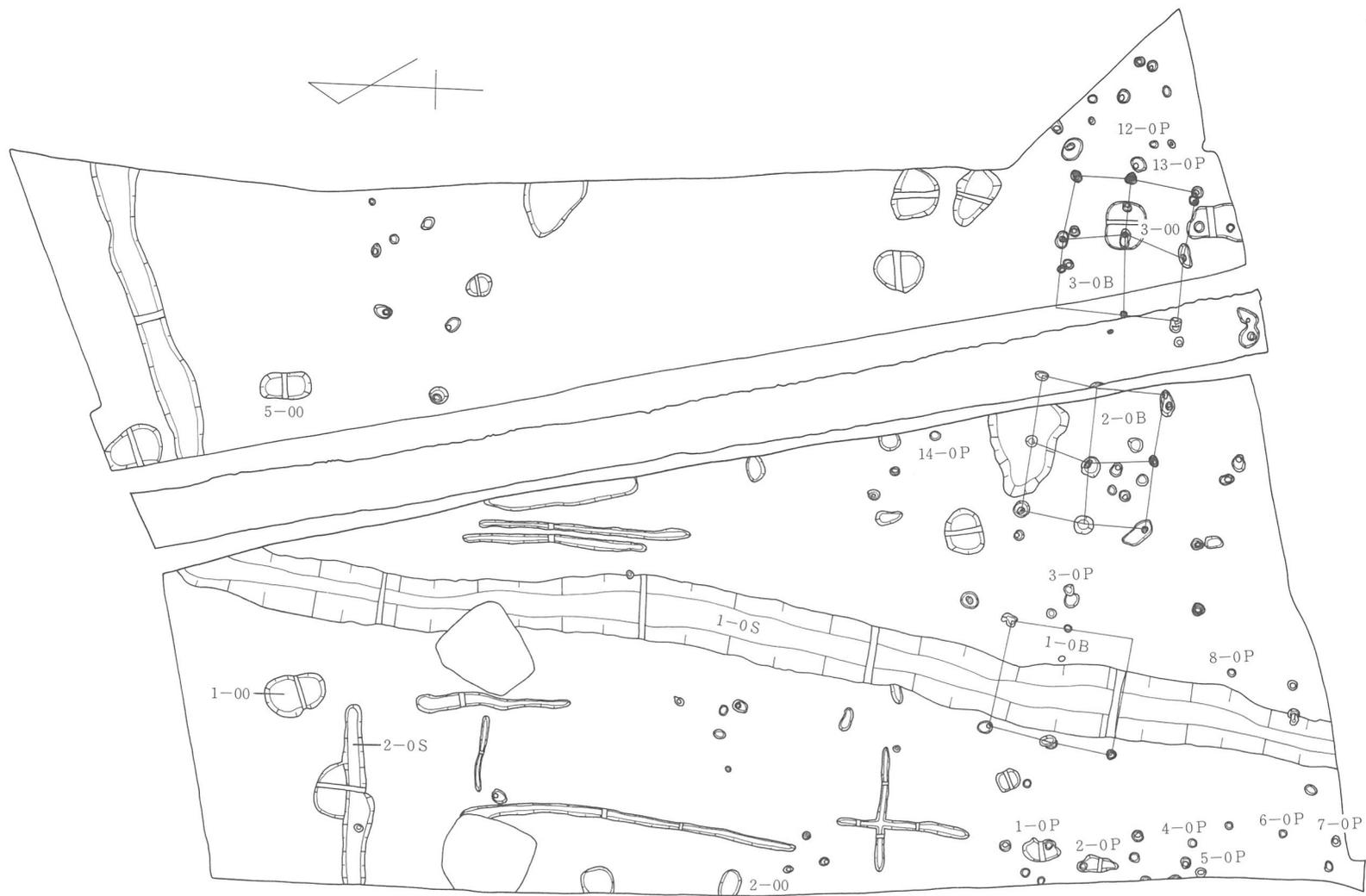
第8地区

- | | |
|--------------------------------------|------------------------|
| 1. 暗褐色土 10Y R3/3 (耕土) | 9. 暗灰色粘質土 N3/ |
| 2. 明褐色粘質土 7.5Y R5/8 (床土) | 10. 暗灰色土 N3/ |
| 3. オリーブ黄色 7.5Y6/3+明黄褐色砂質シルト 10Y R6/8 | 11. 褐色混じり灰青色土 5 B G6/1 |
| 4. 明灰黄色砂質シルト 2.5Y5/2 | 12. 暗灰青色粘質土 5 B G4/1 |
| 5. 淡黄色粘質シルト 5 Y8/3 | 13. 暗黄褐色粘質土 10Y R5/8 |
| 6. 黄褐色粘質土 10Y R5/6 (地山) | 14. 暗灰色砂質土 N3/ |
| 7. 褐色混じり灰黄色土 2.5Y7/2 | 15. 暗灰青色土 5 B G3/1 |
| 8. 褐色混じり暗灰黄色粘質土 2.5Y4/2 | |

第8図 第7地区・第8地区土層断面図



第9図 芝ノ垣外遺跡基本土層柱状図



第10图 第1地区平面图

でT.P+65mを測った。地山直上が遺構面となっており、平安時代末～鎌倉時代初頭（12世紀末～13世紀初頭）の遺構を多数検出した。

第8地区には、複数の遺構面がみとめられた。すなわち第5層直上と地山（第6層）直上である。地山は南から北へゆるく傾斜しており、その斜面上に遺構が存在した。その後第5層が北半部の低い地域に堆積し、フラットな面となった13世紀中頃以降に、この面をベースとする遺構が検出された。第8地区の南半部では第5層が存在せず、地山直上でこれらの2時期の遺構が切り合った状態で検出された。

芝ノ垣外遺跡では、縦長の調査区であったにもかかわらず比較的安定した土層の堆積状況がみとめられた。したがって各調査区の土層間の対比作業もスムーズに進められた。その結果、地山をはじめとしたいくつかの土層について大まかな年代観を与えられる事となった。以下、芝ノ垣外遺跡の全体を通した層序についてふれておきたい。

地山の10Y R5/6黄褐色粘質土は、段丘礫層の影響を所々で受けており、部分的に礫が多く含まれる地域が存在するが、芝ノ垣外遺跡の全域で確認された。標高は南端の第8地区が最も高く（T.P+65.5m）、北へ向かって低くなってゆく。第4地区が最も低い位置にあり（T.P+62.6m）、ここから再び上昇してゆく。第1地区の南端部（T.P+63.9m）まで上昇した後、再び下がる傾向がみられる。すなわち第8地区付近と第1地区付近の2ヶ所に高まりがみられることが判明した。通常では微高地を中心に遺構が分布する場合が多いが、芝ノ垣外遺跡では各時期の遺構が微高地に集中せず、低地にも展開している傾向がみられる特徴がある。

包含層では13世紀の堆積層であるN3/暗灰色粘質土が、第2地区から第6地区北半までの低い地域に堆積し、14世紀から15世紀頃の堆積層と考えられる2.5Y5/2明灰黄色砂質シルトがその上に、第2地区から第8地区までの地域でみとめられた。16世紀から17世紀頃の堆積層と考えられる5Y6/3オリーブ黄色+10Y R6/8明黄褐色砂質シルトは調査区の全域に堆積がみられた。

遺構面は主として地山直上であり、古墳時代前期から鎌倉時代までの遺構が各地で検出されたが、この遺構面は場所によってはかなりの傾斜を持つなど自然に近い状況を呈しており、大規模な整地作業が行われた形跡はみられない。

第8地区では13世紀に堆積したと考えられる土層の上面で遺構面が確認されており、他の地区においてもこれに対応する層の上面で各々水平に近い安定した面がみられ、この時

期に大規模な整地が行われたものと考えられる。

第2節 第1地区

第1項 奈良時代

奈良時代に比定される遺構としては土坑・大溝がある。

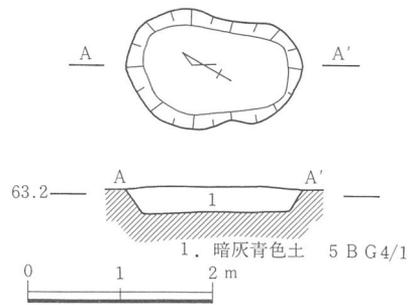
1. 土坑

第1地区では、10基を超える土坑が検出されたが、そのほとんどは遺物が出土せず時期不明のものであった。

その中で、奈良時代に比定される土坑が1基検出された。

1-00 (第11図)

第1地区の北端部付近の、J03LKで検出した土坑である。楕円形状を呈し、長径1.94m、短径1.1mを測った。深さは0.24mである。埋土は1層で、5BG4/1暗灰青色土である。内部から須恵器・土師器が少量出土した。

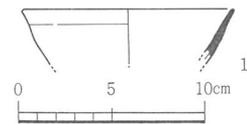


第11図 1-00平面図・断面図

1-00出土遺物 (第12図1)

1-00からは少量の遺物が出土した。そのうち図示し得たのは1点である。

1は須恵器の杯である。口縁部のみの破片で、復元口径11.4cmを測った。



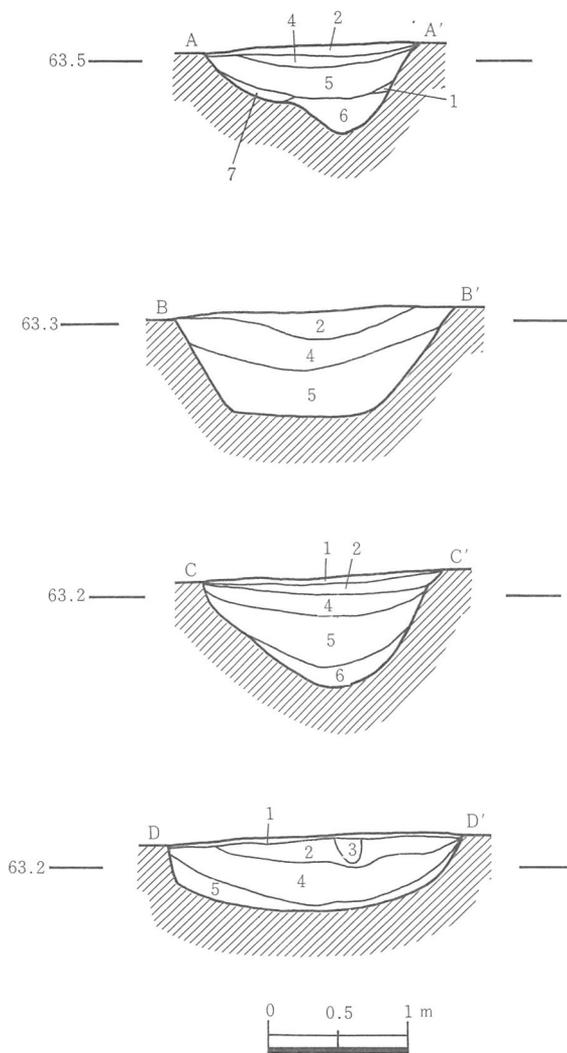
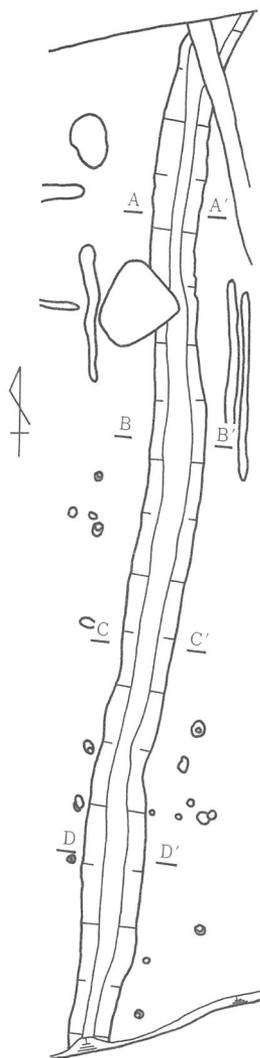
第12図 1-00出土遺物

2. 溝

第1地区では、奈良時代に比定できる溝が1条検出された。

1-0S (第13図, 図版2, 3)

第1地区の西半部の、J03KL~J03TKにまたがる地区を、ほぼ南北方向にゆるく蛇行しつつ走る大溝である。南から北へ流れる。幅1.5m~2.3m、深さ0.8m~1.2mを測った。V字形に近い逆台形状の断面を呈している。埋土は3層から5層に分層できるが、7.5YR4/3褐色を基調とする砂質シルトの下層と、5YR3/1黒褐色を基調とする粘質土



1. 明赤褐色粘質土 5 Y R 5/8
2. 赤褐色粘質土 5 Y R 4/8
3. 黒褐色粘質土 5 Y R 3/1(平安ビット)
4. 黒褐色粘質土礫混じり 5 Y R 3/1
5. 明褐色砂質シルト 7.5 Y R 5/6
6. 褐色砂質シルト 7.5 Y R 4/3
7. 褐色砂質シルト 5 Y R 4/4

第13図 1-O S平面図・断面図

の上層に大別される。埋土内からは須恵器・土師器・製塩土器などが多量に出土した。これらの遺物はすべて上層から出土している。この大溝は埋まり始めてから完全に埋没するまでの間に、中程まで埋まった段階で一度溝ざらえを行っている。その後完全に埋まる時に須恵器・土師器などをこぶし大の礫と共に一括投棄している。したがって出土遺物の示す時期は大溝が埋まった時期であり、少なくとも溝ざらえ以後のものといえる。大溝が掘削された時期については、下層から遺物がまったく出土していないので不明であるが、大溝の規模などから比較的長期間機能していたものと推定できる。

1-O-S 出土遺物 (第14図2～第23図87)

須恵器・土師器・製塩土器が多量に出土した。そのうち図示し得たのは86点である。

2～6は須恵器の杯蓋で、縁部が屈曲せず彎曲気味に端部に至るもの(2, 3)と、縁部が屈曲するもの(4～6)がある。7～23, 25～29は須恵器の杯である。平坦な底部と外上方にまっすぐのびる口縁部で、底部外面周縁付近に貼付高台を付すもの(11～23, 25, 26)と貼付高台を付さないもの(7～10)がある。貼付高台を付すものは杯蓋と一対になる。

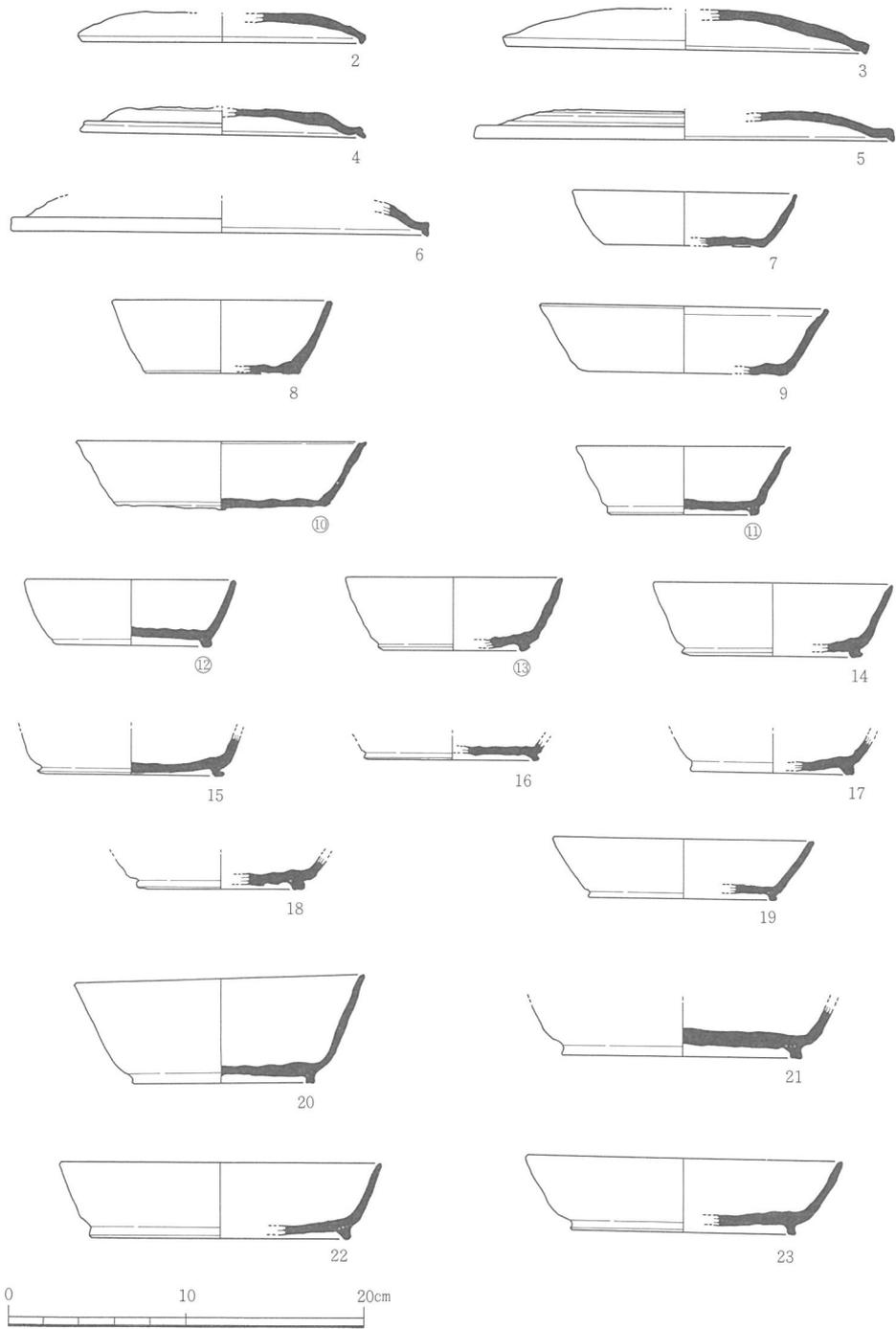
24, 30は須恵器の皿である。そのうち24は平坦な底部と直立気味に立ち上る口縁部からなり、底部外面周縁に貼付高台を付すもので、上記の杯に類似する形態である。30は底部のみの破片のため全容はわからないが、平坦な底部と思われ、貼付高台が底部外面の中心付近に付く。口縁部は短く外上方に立ち上るものと思われる。

31～37は須恵器の甕である。体部のほとんどを欠損しているものが多いが、いずれも卵形を呈するものと思われ、口縁部が外上方に直線的に立ち上るもの(31, 32)、外反するもの(33, 34)、短く直立するもの(35, 37)などがある。

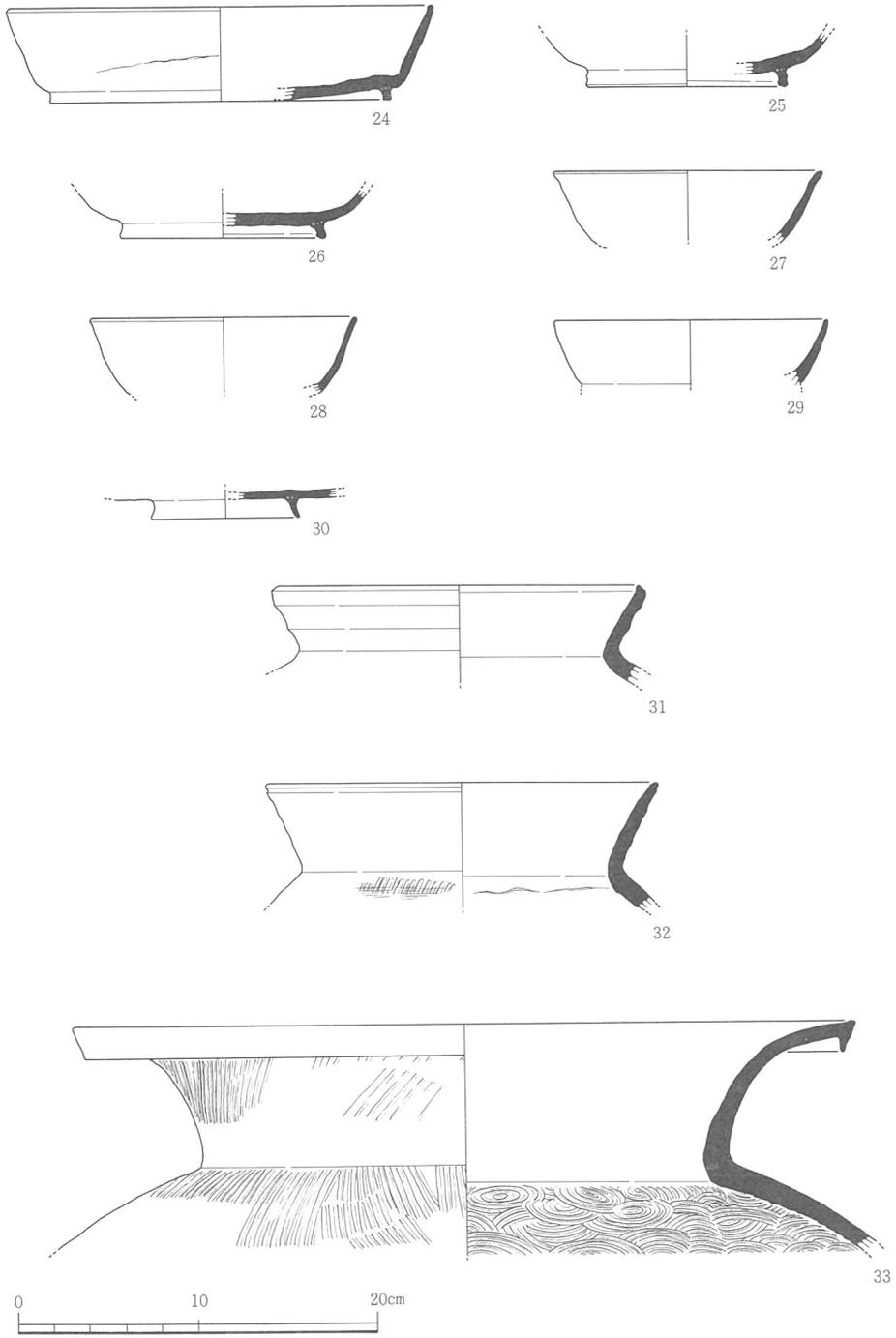
38～46は須恵器の壺で、そのうち38は口縁部が短く直立気味でわずかに外反するもの、39は長頸壺で卵形の体部と外上方に立ち上る口縁部からなる。40は頸部以上を欠損しているが、39と同様の形態と思われる。42は頸部及び口縁部の破片である。細長筒形のもので、口縁端部で外方に短く屈曲する。いわゆる水瓶の口縁部と思われる。44は短頸壺である。肩の張ったイチジク形の体部と直立する短い口縁部で、底部外面に貼付高台を付すものである。46は平底の底部で、体部上半以上を欠損しているが、卵形の体部と思われる。

47は須恵器の横瓶である。横に長い俵形の体部の上面中央に、外反する短い口縁部を付けたものと思われる。

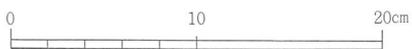
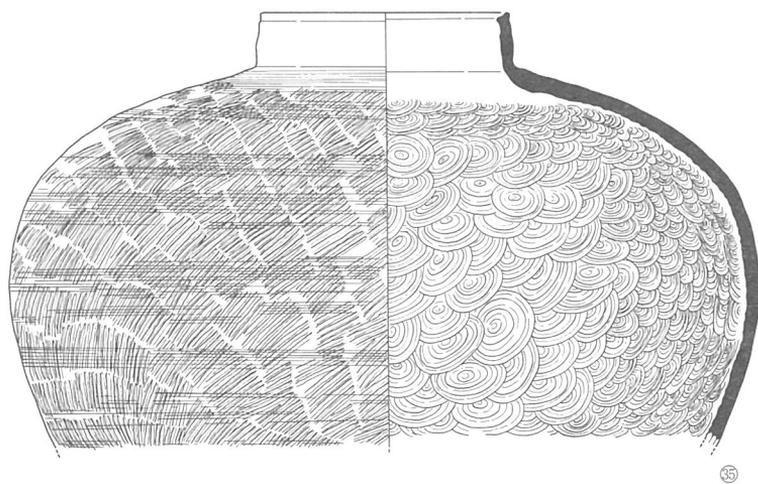
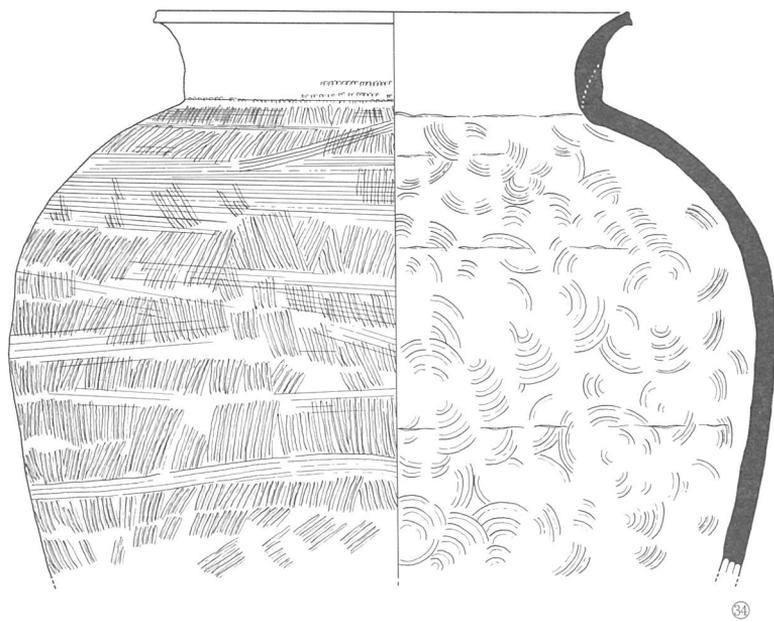
48～50は須恵器の鉢である。上位で肩の張る体部に、短く直立気味に外反する口縁部を



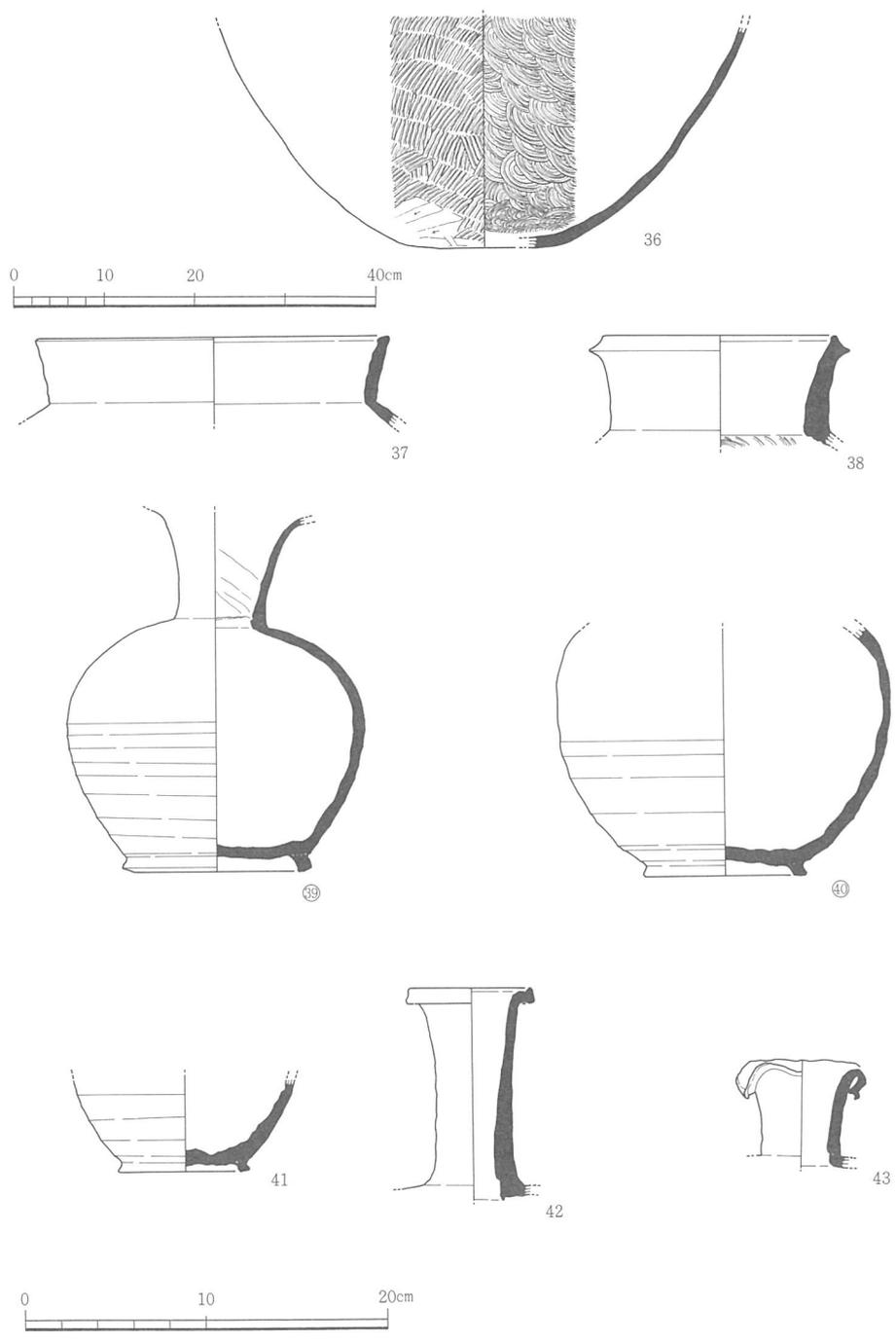
第14図 1-O S出土遺物(1)



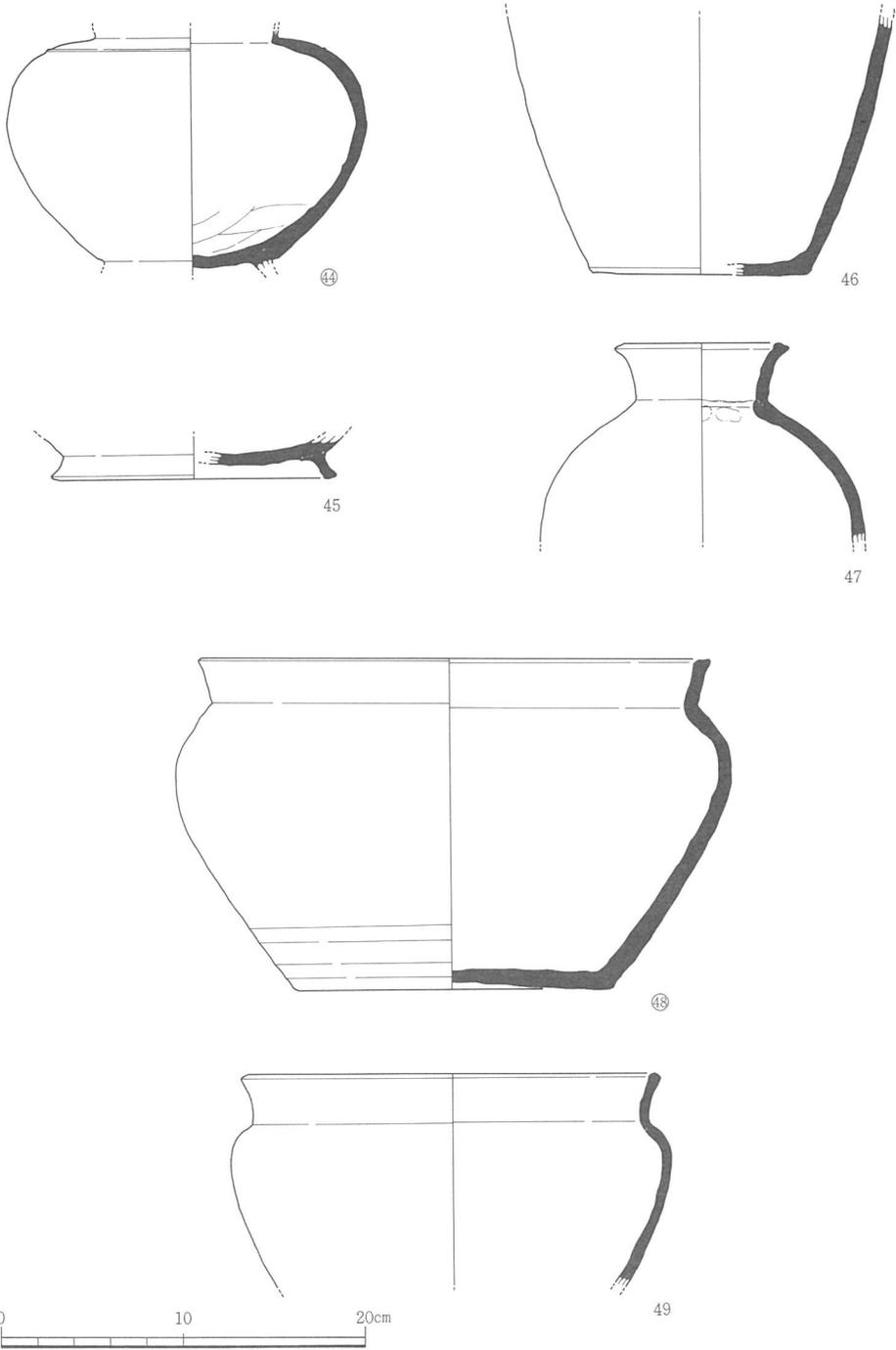
第15図 1-O S 出土遺物(2)



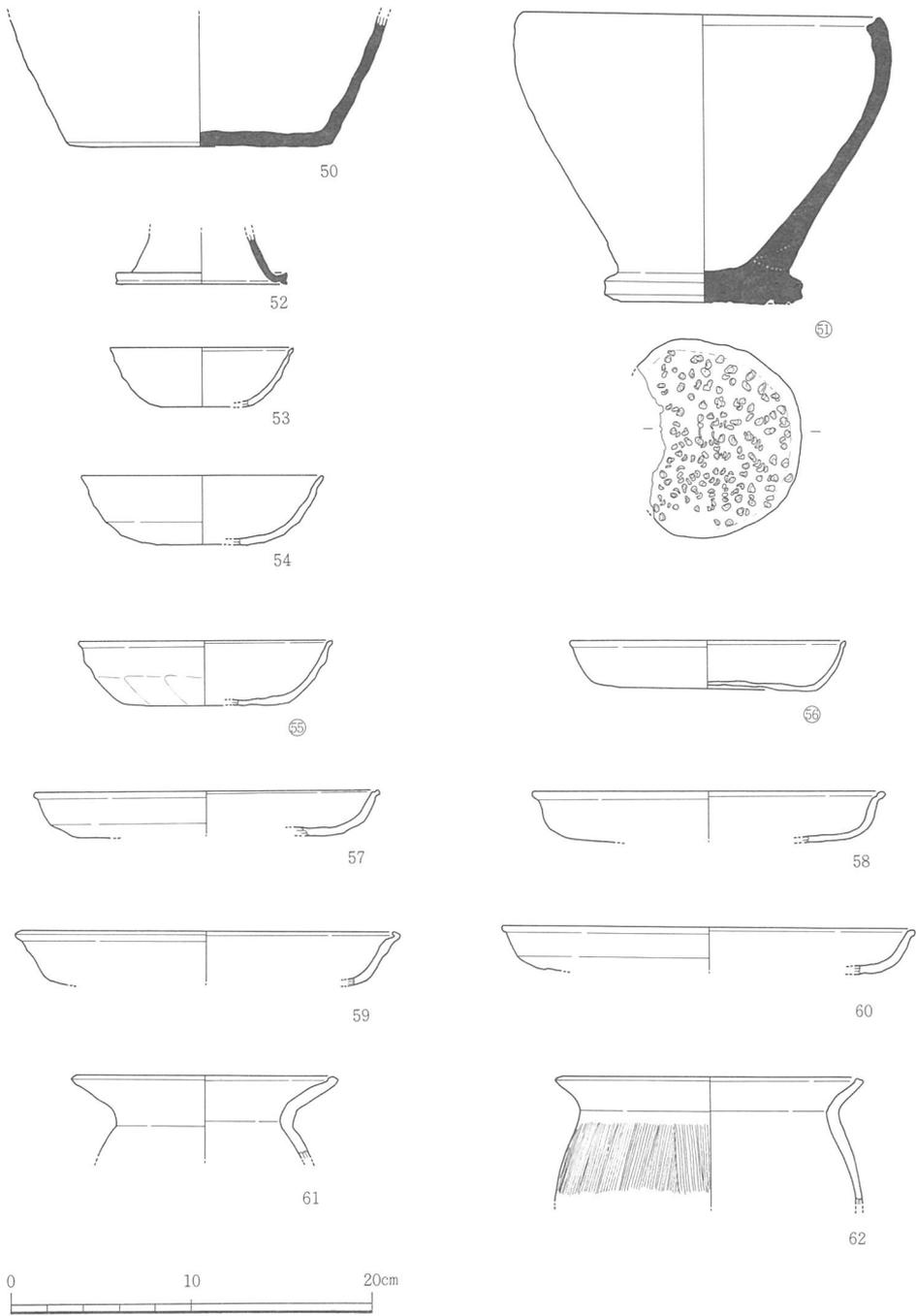
第16図 1-O S出土遺物(3)



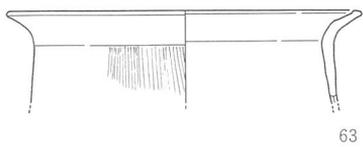
第17図 1-O S出土遺物(4)



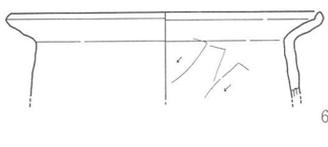
第18図 1-O S 出土遺物(5)



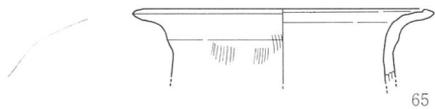
第19図 1-O S出土遺物(6)



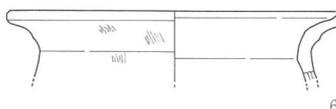
63



64



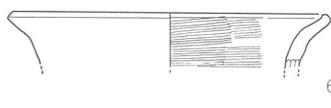
65



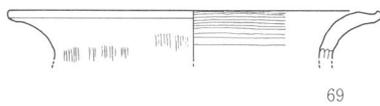
66



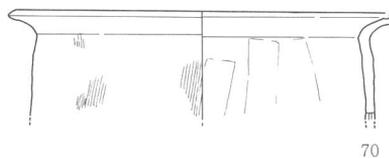
67



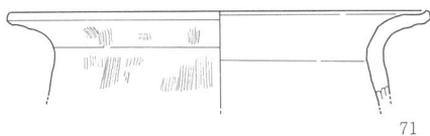
68



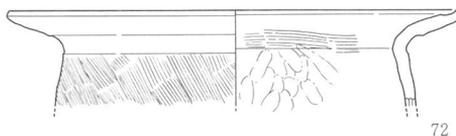
69



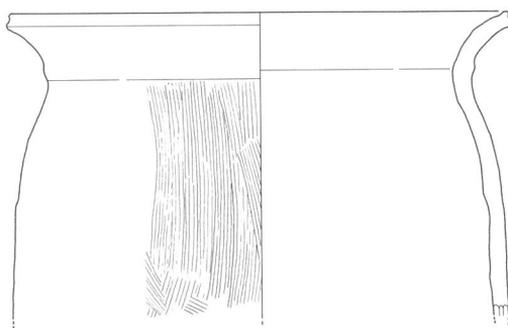
70



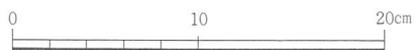
71



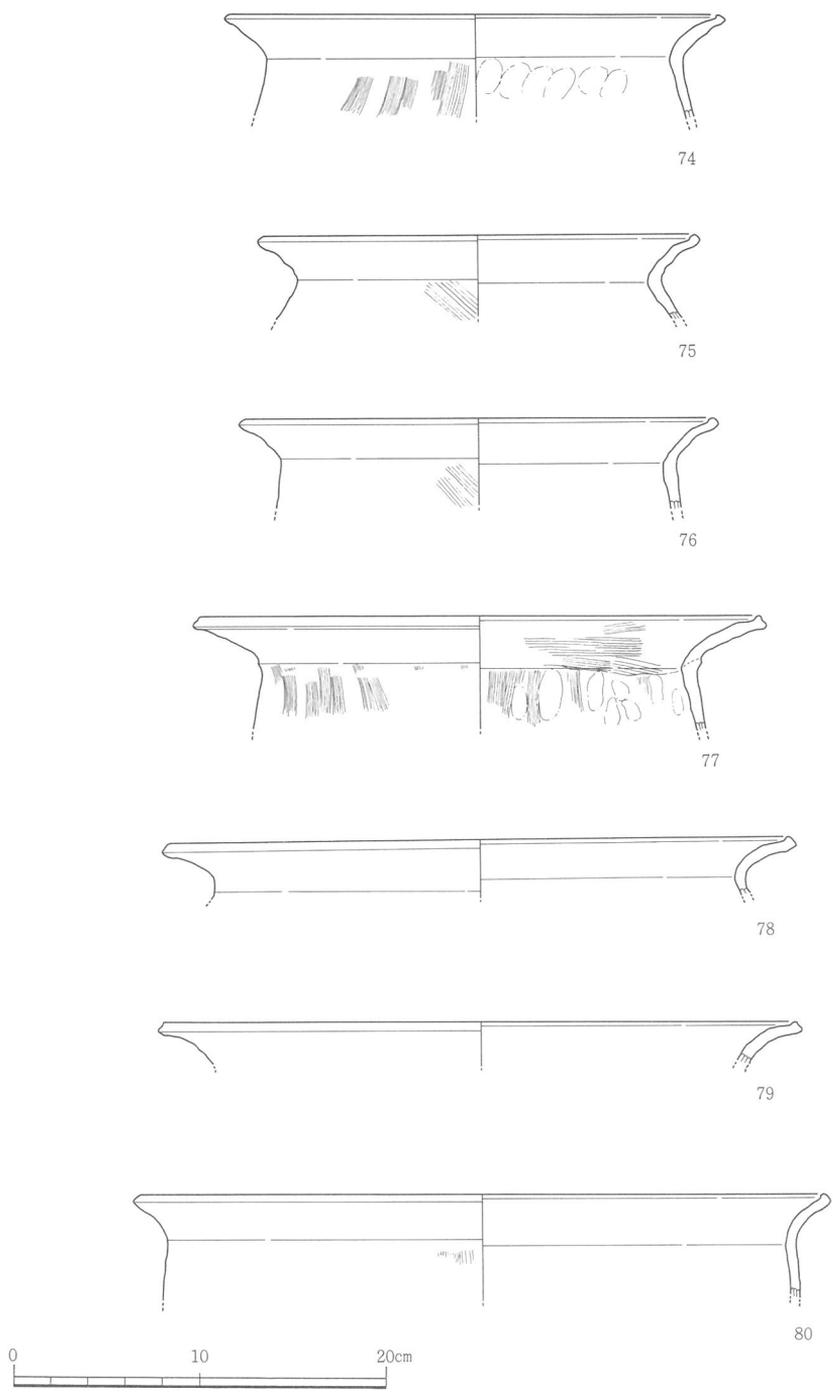
72



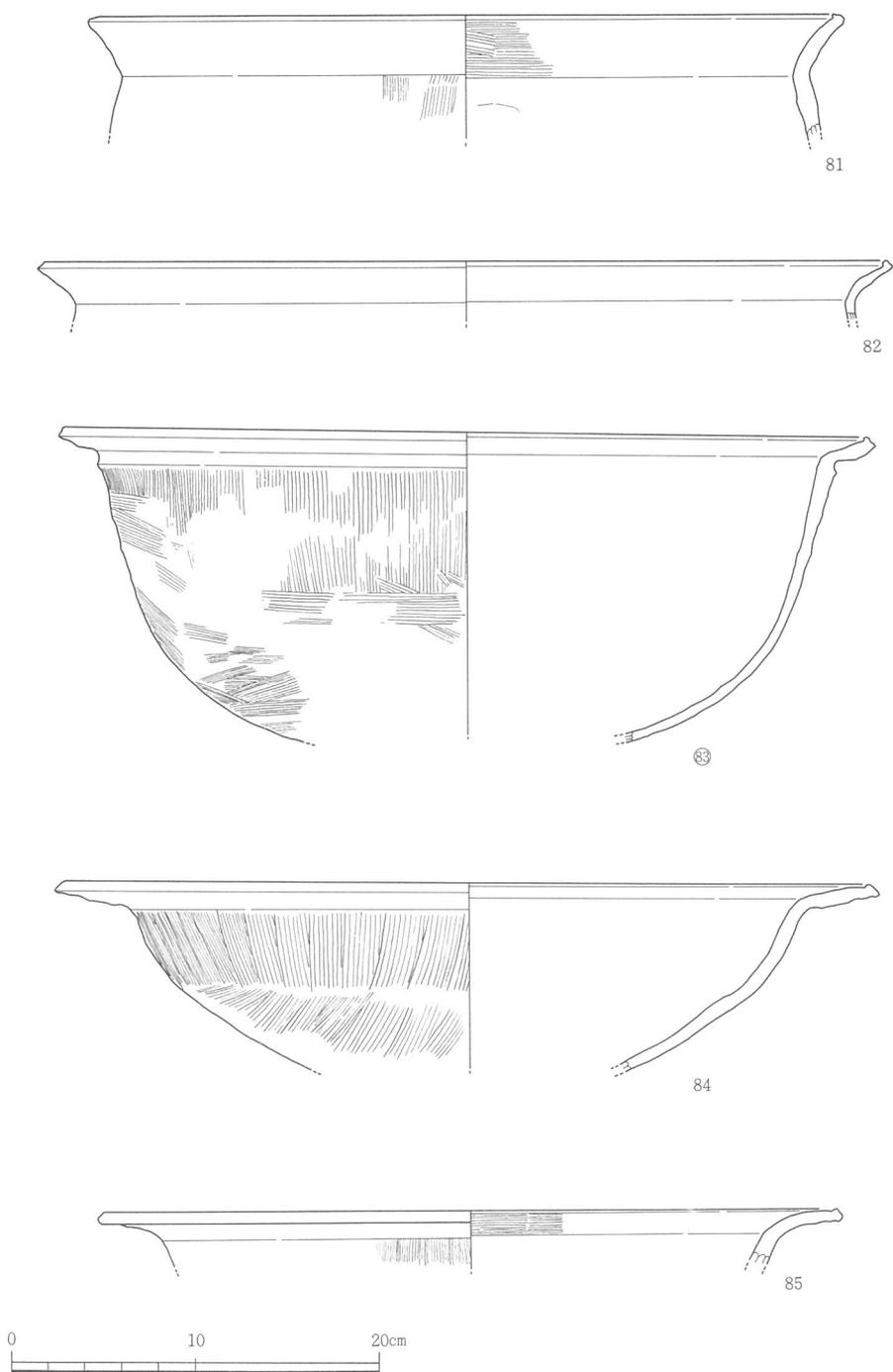
73



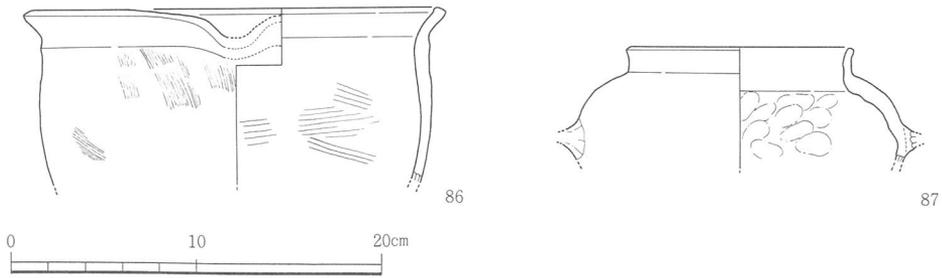
第20図 1-O S 出土遺物(7)



第21图 1-O S出土遺物(8)



第22図 1-O S出土遺物(9)



第23図 1-O-S出土遺物(10)

付けたものである。

51は須恵器の練鉢である。円盤状を呈する底部で、体部は外上方にのび、口縁部は短く内弯する。底部外面を先の尖った器具で突き刺している。貫通している孔はない。

53～55は土師器の杯である。いずれも小さな平底ないしは丸底の底部で、口縁の立ち上りが外上方にのびる。

56～60は土師器の皿である。平底の底部で、口縁部が外弯しつつ低く外上方へ立ち上るもの(56)、口縁端部を外側へつまみ出した後内側へ曲げ込むもの(57, 58, 60)、口縁の立ち上りが外弯しつつ外上方へ低く立ち上った後、短く外反して終るもの(59)などがある。内面に左下りの斜状暗文を施すもの(59)がある。

61～82は土師器の甕である。図示し得たものの大部分が口縁部のみの破片であるため、全体の形状はつかめないが、口縁部の形状から判断して、球形に近い体部のものと頸部でややすぼまる長手丸底のものにと分類できるようである。

83～86は土師器の鍋である。半球形に近い体部と、外方あるいは外上方に低く短く立ち上る口縁部からなるもので、復元口径40cm内外の大型のもの(83～85)と、復元口径21.8cmと比較的小型で、片口状の口縁部を呈するもの(86)がある。

87は土師器の壺である。口縁の立ち上りが短く直立する。体部外面中位に把手を2ヶ所付すものである。

第2項 平安時代

平安時代に比定される遺構としては掘立柱建物・土坑・溝・ピットなどがある。

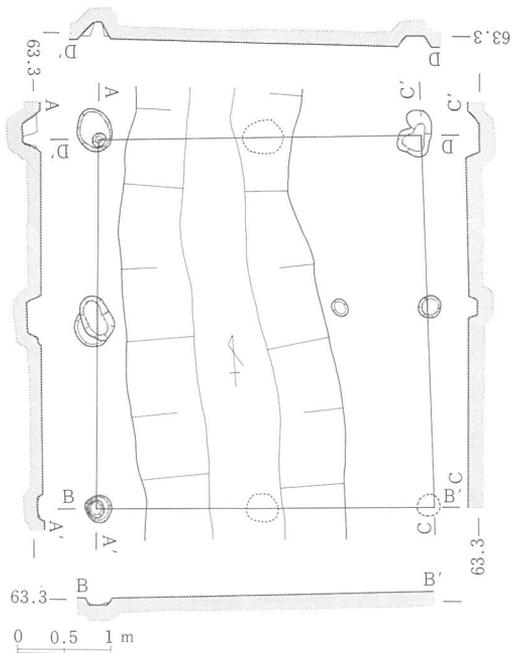
1. 掘立柱建物

第1地区では、平安時代に比定される掘立柱建物が3棟検出された。これらの掘立柱建

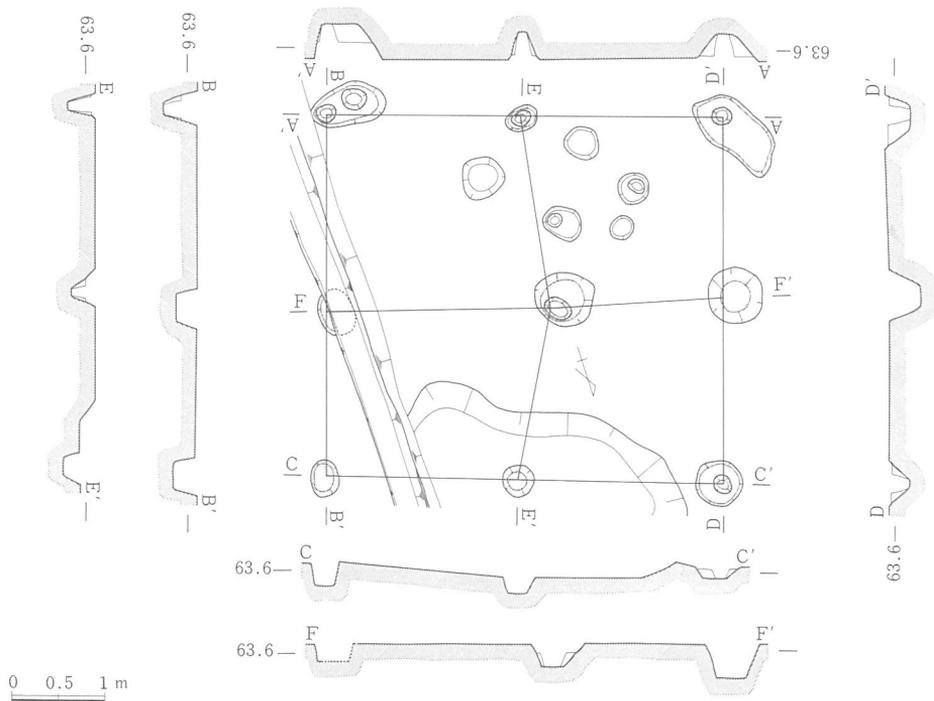
物は総柱で倉庫と思われ、3棟がほぼ等間隔でならんだ状態で検出された。

1-OB (第24図, 図版4)

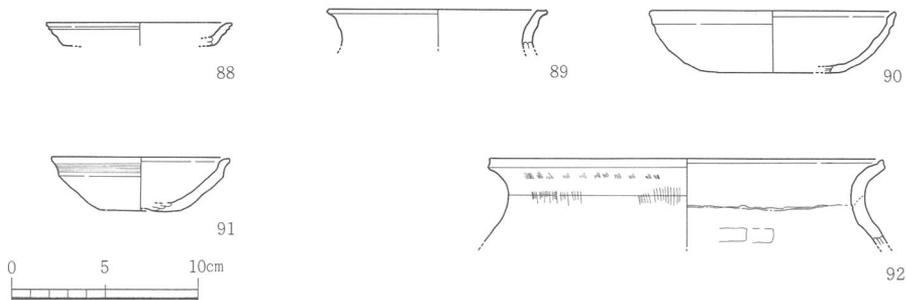
第1地区の南端部付近の, J03RK・RL・SLにまたがる地区で検出された。3棟の掘立柱建物のうち最も西側に位置する。奈良時代の大溝1-Osと切り合った状態で検出された。大溝と切り合い関係にある柱穴は2ヶ所あると思われるが, おたがいの埋土の色調が似かよっていたため平面的には区別できなかったが, 大溝の土層観察用にもうけた畔の部分で1ヶ所断面で確認でき, したがって1-OBは2間×2間の規模を持つものと考えられ, 又, 後述する他の掘立柱建物とのかねあいからみて, 束柱を持つ総柱の建物となる



第24図 1-OB平面図・断面図



第25図 2-OB平面図・断面図



第26図 2-OB出土遺物

可能性が高い。主軸はN-5°-Eを示す。南東コーナー部分の柱穴は検出できなかった。桁行間2間×梁間2間で、実数値は北桁行間3.5m（中間の柱穴は未確認），南桁行間3.5m（推定），西梁間3.9m，東梁間3.8m（推定）を測った。柱穴は径0.2m～0.4mの円形ないしは不整形円形状を呈する。柱穴内から遺物は出土しなかった。

2-OB（第25図，図版5）

1-OBの東側の，J03RM・RN・SM・SNにまたがる地区で，梁を並べた状態で検出された2間×2間の掘立柱建物である。平面プランの中央やや西寄り東柱の柱穴が検出されており，総柱の掘立柱建物で倉庫と考えられる。主軸はN-5°-Eを示す。桁行間2間×梁間2間で，実数値は北桁行間4.3m，南桁行間4m，西梁間4m，東梁間4mを測った。東柱は各棟持柱の中央やや西寄りの位置にある。柱穴は径20cm～50cmの円形ないしは楕円形状を呈する。柱穴内から土師器・黒色土器の破片がごく少量出土した。

2-OB出土遺物（第26図88～92）

掘立柱建物2-OBを構成する柱穴からは土師器・黒色土器などが少量出土した。そのうち図示し得たのは5点である。

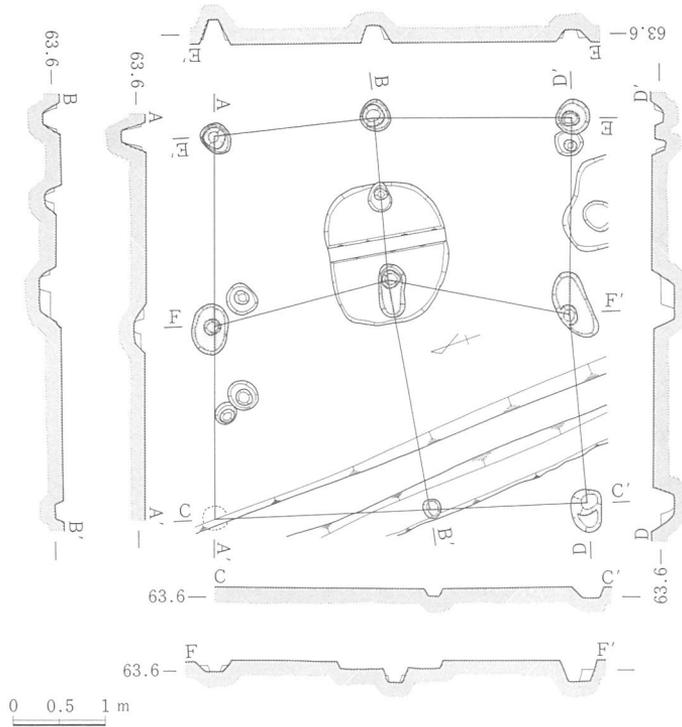
88は土師器の小皿である。口縁部のみの小片である。

89，92は土師器の甕である。ともに口縁部のみの破片で，口縁部の立ち上りが短く外反して終る。

90，91は土師器の杯である。ともに小さな平底の底部から，体部が外上方に丸みを持って立ち上る。口縁部は短く，端部を軽く外側へつまみ出す。

3-OB（第27図，図版6）

2-OBの東側の，J03RN・RO・SN・SOにまたがる地区で，梁を並べた状態で検出された2間×2間の掘立柱建物である。平面プランの中央やや東寄り東柱の柱穴が



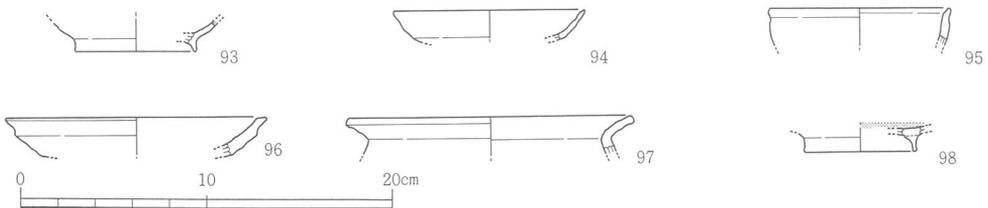
第27図 3-OB平面図・断面図

検出されており、総柱の掘立柱建物で倉庫と考えられる。主軸はN-5°-Eを示す。棟持柱のうち北西コーナー部は未調査区域に当たり検出できなかった。桁行間2間×梁間2間で、実数値は北桁行間4m（推定）、南桁行間4.1m、西梁間3.9m（推定）、東梁間3.8mを測った。東柱は各棟持柱の中央やや東寄りの位置にある。柱穴は径0.2m~0.6mの円形ないしは楕円形状を呈する。柱穴内から土師器・黒色土器などが少量出土した。

3-OB出土遺物（第28図93~98）

掘立柱建物3-OBを構成する柱穴からは土師器・黒色土器などが少量出土した。そのうち図示し得たのは6点である。

93は土師器の椀で、底部のみの小片である。外面周縁付近に断面三角形の低い貼付高台を付している。



第28図 3-OB出土遺物

94, 95は土師器の小皿で、ともに口縁部のみの小片である。94は口縁の立ち上がりが内湾しつつ外上方へ低く立ち上り、95は短く直立する。

96は土師器の皿で、口縁部のみの小片である。全体的に丸みを持つものと思われ、口縁端部を軽く外側へつまみ出している。

97は土師器の甕で、口縁部のみの小片である。

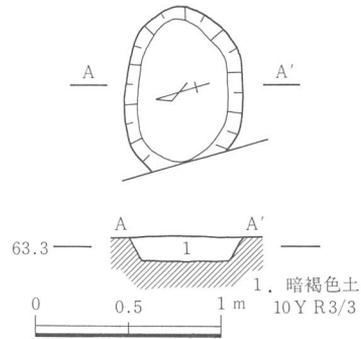
98は黒色土器A類の碗で、底部のみの小片である。

2. 土坑

第1地区では、平安時代に比定される土坑が4基検出された。

2-00 (第29図)

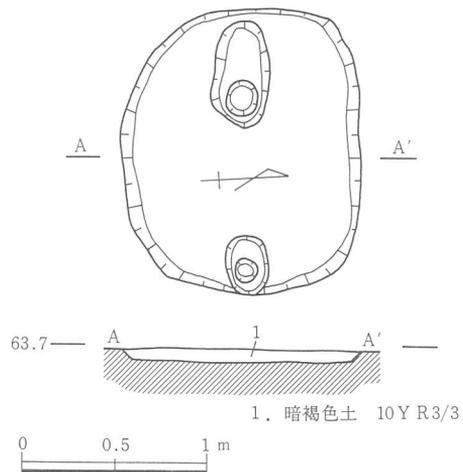
第1地区の中央部西端付近の、J 03O J・P Jにまたがる地区で検出した土坑である。楕円形状を呈し、長径0.82m、短径0.68m、深さ0.13mを測った。埋土は1層で、10 Y R 3/3暗褐色土である。内部から土師器・黒色土器などがごく少量出土したが、図示し得るものはなかった。



第29図 2-00平面図・断面図

3-00 (第30図)

第1地区の南東端部の、J 03R Oで検出した土坑である。3-0Bと切り合い関係にある。楕円形状を呈し、長径1.44m、短径1.28m、深さ0.23mを測った。埋土は1層で、10 Y R 3/3暗褐色土である。内部から土師器・黒色土器などが少量出土した。



第30図 3-00平面図・断面図

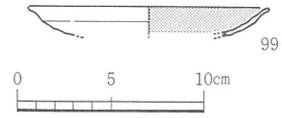
3-00出土遺物 (第31図99)

3-00からは土師器・黒色土器などが少量出土した。そのうち図示し得たのは1点である。

99は黒色土器A類の皿で、口縁部のみの小片である。口縁の立ち上がりが比較的 lowく、内湾しつつ外上方へのびる。

4-00 (第32図)

第1地区の南東端部の、J03S0で検出した土坑である。遺構の南半は調査区南壁外にのびている。不定形状を呈し、長径1.48m以上、短径0.96m、深さ0.16mを測った。埋土は1層で、10Y R3/3暗褐色土である。内部から須恵器・土師器・黒色土器・磁器などが比較的まとまった量出土した。



第31図 3-00出土遺物

4-00出土遺物 (第33図100~105)

4-00からは須恵器・土師器・黒色土器・磁器などが比較的まとまった量出土した。そのうち図示し得たのは6点である。

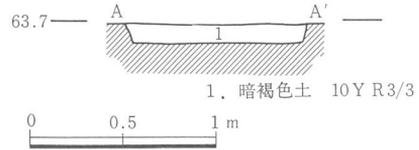
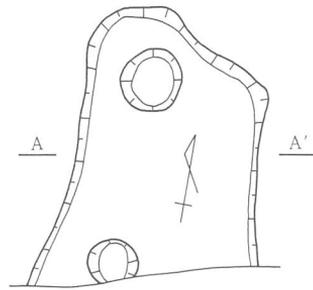
100は土師器の皿で、口縁部のみ的小片である。口縁の立ち上りが外上方へ低くまっすぐのびる。

101は土師器の甕で、口縁部及び体部上半の破片である。

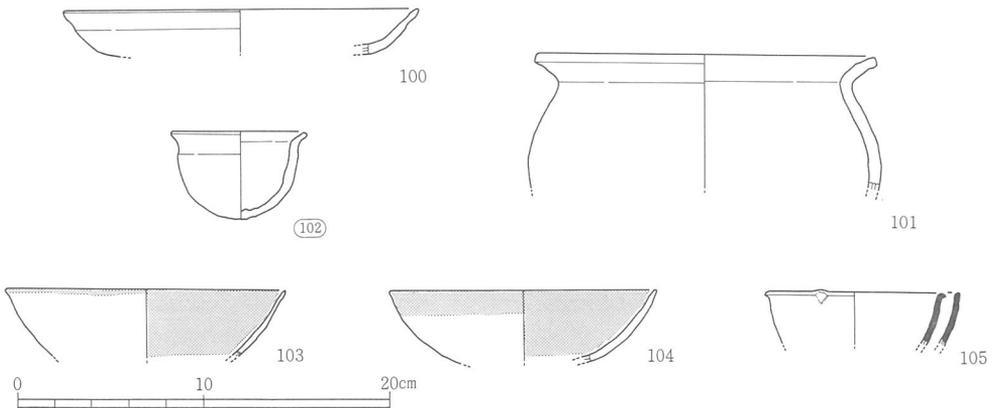
102は土師器のミニチュア甕である。半球形の体部で、口縁の立ち上りが短く外上方へのびる。

103, 104は黒色土器A類の碗である。ともに口縁部のみ破片である。

105は緑釉陶器で、碗の破片と思われる。口縁部のみ破片である。



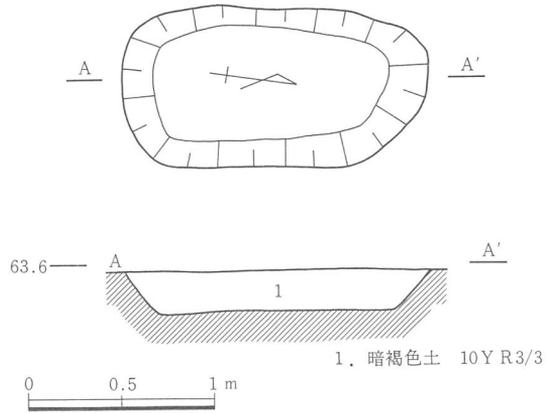
第32図 4-00平面図・断面図



第33図 4-00出土遺物

5-00 (第34図)

第1地区の北半部の、J03LMで検出した土坑である。楕円形状を呈し、長径1.62m、短径0.82m、深さ0.23mを測った。埋土は1層で、10YR3/3暗褐色土である。内部から土師器がごく少量出土したが、図示し得るものはなかった。



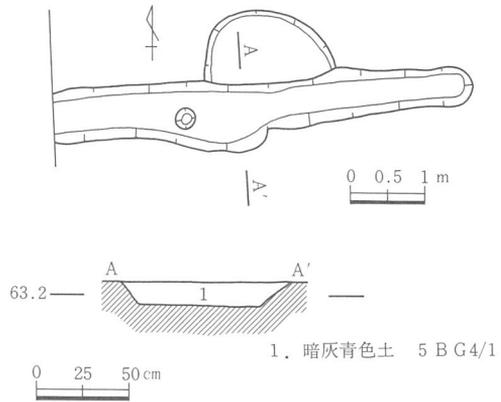
第34図 5-00平面図・断面図

3. 溝

第1地区では、平安時代に比定される溝が1条検出された。

2-OS (第35図)

第1地区の北西部の、J03LJ・LK・MJ・MKにまたがる地区で検出した溝である。東西方向に走り、東端部は途切れているが、西側は調査区西壁外へのびている。検出長は約6mで、幅0.6m~0.94m、深さ0.23mを測った。逆台形状の断面を呈する。埋土は1層で、5BG4/1暗灰青色土である。内部から土師器・黒色土器が少量出土した。



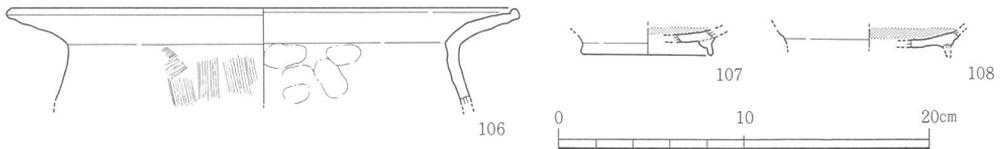
第35図 2-OS平面図・断面図

2-OS出土遺物 (第36図106~108)

2-OSからは土師器・黒色土器などが少量出土した。そのうち図示し得たのは3点である。

106は土師器の甕で、口縁部及び体部上端の破片である。口縁の立ち上りが低く外方にまっすぐのび、端部を内側に曲げ込んでいる。

107, 108は黒色土器A類の椀で、ともに底部のみの小片である。底部外面に貼付高台を



第36図 2-OS出土遺物

付している。

4. ピット

第1地区では、80を越すピットが検出されたが、その大部分は遺物が出土せず時期比定が困難なものであった。その中で平安時代に比定できるピットが14ヶ所確認できた。

1-O P (第37図)

第1地区の南西半部の、J 03R Jで検出したピットである。掘方は不整楕円形状を呈し、長径1.04m、短径0.64mを測った。柱痕は径0.2mの不整円形で、深さ0.1mを測った。内部から土師器・黒色土器がごく少量出土した。

1-O P 出土遺物 (第38図109~111)

1-O Pからは土師器・黒色土器などがごく少量出土した。

109は土師器の椀で、口縁部のみの小片である。

110は土師質の土錘である。長さ3.7cm、最大幅1.3cmと小型のもので、中位がふくらんだ円柱状を呈している。径3mmの孔を穿っている。

111は黒色土器A類の椀で、底部のみの小片である。外面に貼付高台を付している。

2-O P (第37図)

第1地区の南西半部の、J 03R Jで検出したピットである。掘方は不整楕円形状を呈し、長径1.3m、短径0.4mを測った。柱痕は径0.2mの円形で、深さ0.2mを測った。内部から土師器・黒色土器がごく少量出土したが、図示し得るものはなかった。

3-O P (第37図)

第1地区の南西半部の、J 03R Lで検出したピットである。掘方は円形状を呈し、径0.3m、深さ0.24mを測った。柱痕は確認できなかった。内部から土師器がごく少量出土したが、図示し得るものはなかった。

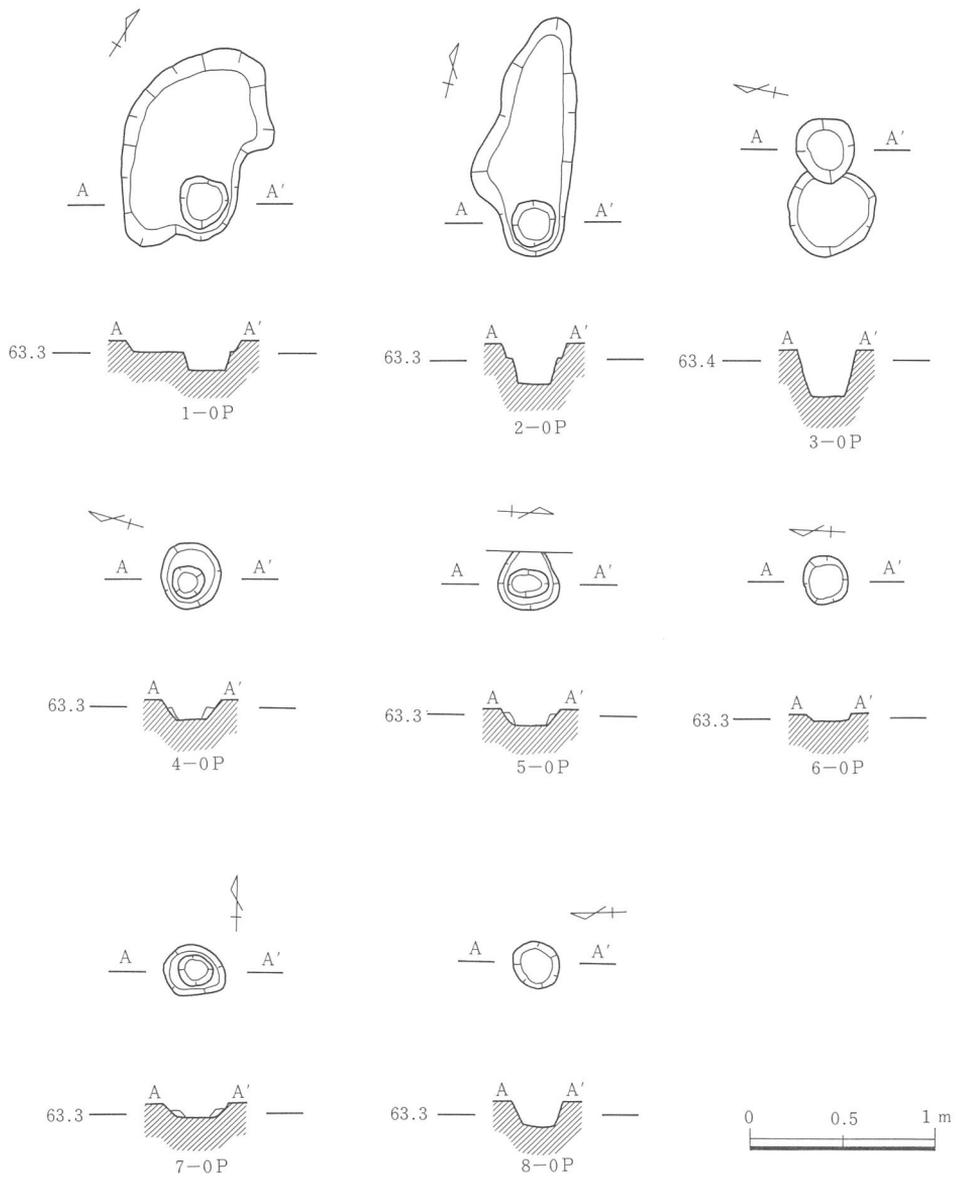
4-O P (第37図)

第1地区の南西半部の、J 03S Jで検出したピットである。掘方は円形状を呈し、径0.35mを測った。柱痕は径0.2mの円形で、深さ0.1mを測った。内部から土師器がごく少量出土した。

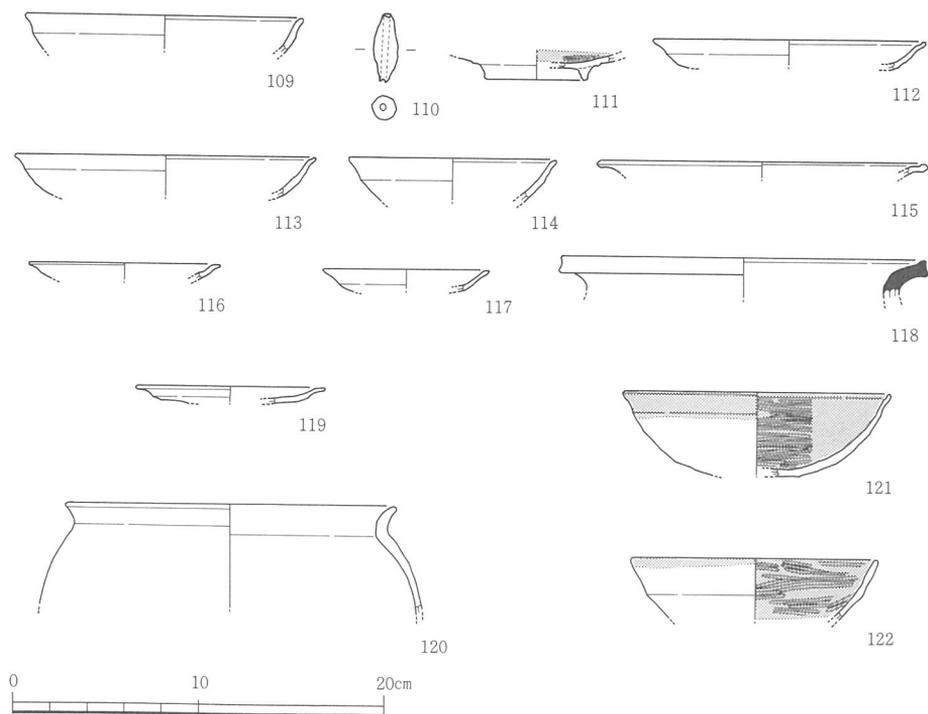
4-O P 出土遺物 (第38図112, 113)

4-O Pからは土師器がごく少量出土した。そのうち図示し得たのは2点である。

112, 113は土師器の皿で、ともに口縁部のみの小片である。口縁の立ち上りが低く外上方へのびる。



第37図 第1地区平安時代ピット平面図・断面図



第38図 第1地区平安時代ピット出土遺物

5-O P (第37図)

第1地区の南西半部の、J 03 S Jで検出したピットである。掘方は不整円形状を呈し、径0.34mを測った。柱痕は長径0.2m、短径0.12mの楕円形で、深さ0.08mを測った。内部から土師器がごく少量出土した。

5-O P 出土遺物 (第38図114)

5-O Pからは土師器がごく少量出土した。そのうち図示し得たのは1点である。114は土師器の杯で、口縁部のみの小片である。全体的に丸みを持つ形状を呈する。

6-O P (第37図)

第1地区の南西端部の、J 03 T Jで検出したピットである。掘方は円形状を呈し、径0.26m、深さ0.03mを測った。柱痕は確認できなかった。内部から土師器がごく少量出土した。

6-O P 出土遺物 (第38図115)

6-O Pからは土師器がごく少量出土した。そのうち図示し得たのは1点である。115は土師器の甕と思われる。口縁端部付近のみのごく小片である。

7-O P (第37図)

第1地区の南西端部の、J03TJで検出したピットである。掘方は不整円形状を呈し、径0.33m、深さ0.07mを測った。柱痕は確認できなかった。内部から土師器がごく少量出土した。

7-OP出土遺物（第38図116）

7-OPからは土師器がごく少量出土した。そのうち図示し得たのは1点である。

116は土師器の小皿で、口縁部のみの小片である。

8-OP（第37図）

第1地区の南西半部の、J03SLで検出したピットである。掘方は円形状を呈し、径0.34m、深さ0.13mを測った。柱痕は確認できなかった。内部から土師器・黒色土器がごく少量出土したが、図示し得るものはなかった。

12-OP

第1地区の南東端部の、J03SPで検出したピットである。掘方は円形状を呈し、径0.26m、深さ0.04mを測った。柱痕は確認できなかった。内部から土師器がごく少量出土した。

12-OP出土遺物（第38図117）

12-OPからは土師器がごく少量出土した。そのうち図示し得たのは1点である。

117は土師器の小皿で、口縁部のみの小片である。

13-OP

第1地区の南東半部の、J03ROで検出したピットである。楕円形状を呈し、長径0.5m、短径0.42mを測った。深さは0.23mである。内部から須恵器・土師器・黒色土器がごく少量出土した。

13-OP出土遺物（第38図118）

13-OPからは須恵器・土師器・黒色土器などがごく少量出土した。そのうち図示し得たのは1点である。

118は須恵器の甕で、口縁部のみの小片である。

14-OP

第1地区の南半部の、J03QMで検出したピットである。掘方は円形状を呈し、径0.35m、深さ0.06mを測った。柱痕は確認できなかった。内部から土師器・黒色土器などが少量出土した。

14-OP出土遺物（第38図119～122）



第39图 第2地区平面图

14-OPからは土師器・黒色土器などが少量出土した。そのうち図示し得たのは4点である。

119は土師器の小皿である。比較的平らな底部から、口縁部が短く外方にのびる。

120は土師器の甕である。口縁部及び体部上半の破片で、口縁の立ち上りが短く低い。

121, 122は黒色土器A類の碗である。内面にヘラミガキが顕著に残る。

第3節 第2地区

第1項 奈良時代

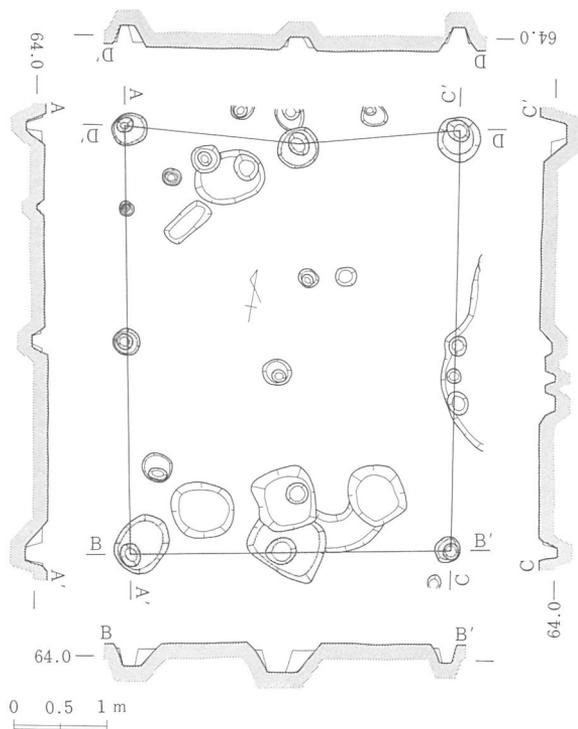
奈良時代に比定される遺構としては掘立柱建物・土坑・大溝・溝・ピットなどがある。

1. 掘立柱建物

第2地区では、200ヶ所以上のピットが検出されたが、その中で奈良時代に比定される掘立柱建物が5棟確認された。

4-OB (第40図, 図版8)

第2地区の中央部やや西寄りの、J08CM・DMにまたがる地区で検出された2間×2間の掘立柱建物である。主軸はN-7°-Wを示す。桁行間2間×梁間2間で、実数値は西桁行間4.5m, 東桁行間4.5m, 北梁間3.7m, 南梁間3.5mを測った。柱穴は径0.3m~0.7mの円形・楕円形・四角形状などを呈する。柱穴内から須恵器・土師器などが少量出土したが、図示し得るものはなかった。



第40図 4-OB平面図・断面図

5-O B (第41図)

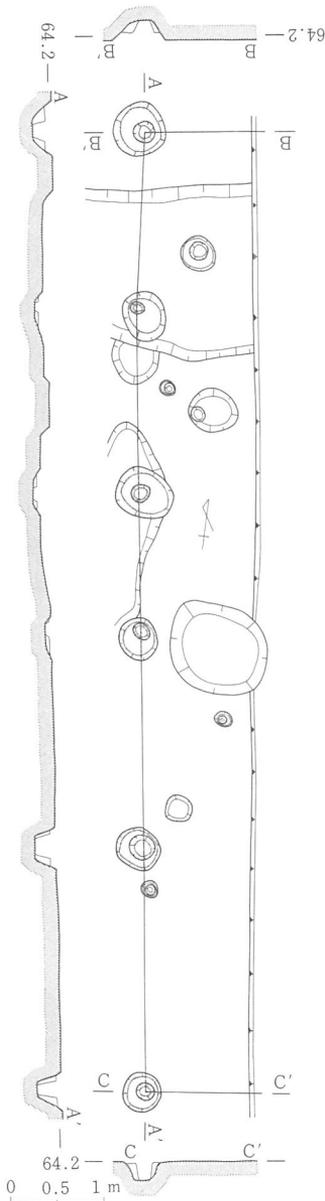
第2地区の中央部東端付近の、J 08B P・C P・D Pにまたがる地区で検出された掘立柱建物である。平面プランの大部分は調査区外にあり、確認できたのは西側の柱列のみであった。主軸はN-6°-Wを示す。5間の規模で、実数値は11.4mを測った。柱穴は径

0.4m~0.7mの円形状を呈する。内部から須恵器・土師器などが少量出土した。

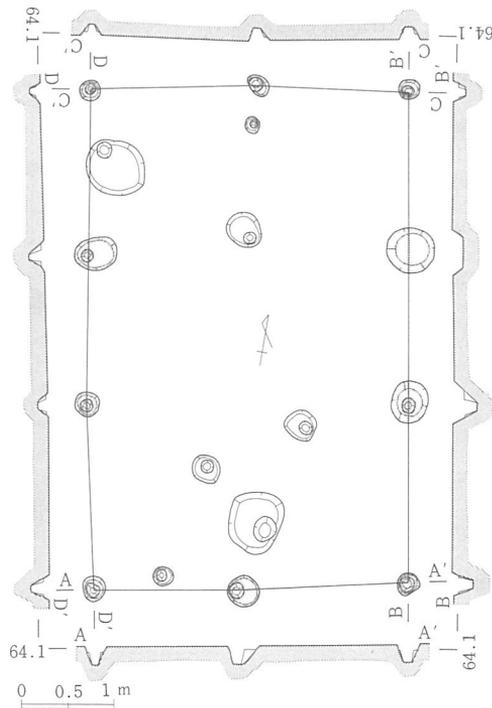
この掘立柱建物は、他の同時期の掘立柱建物が最大で一辺5.4mほどであるのに対して一辺11.4mと大規模で柱穴も大きい。したがって、この5-O Bが奈良時代の集落の中核をなす建物と思われる。しかしながら、平面プランの大部分が調査区外にあるため、全体の規模・形状等は不明である。

5-O B 出土遺物 (第106図566, 567)

掘立柱建物5-O Bを構成するピットからは須恵器・土師器が少量出土した。そのうち図示し得たのは2点で



第41図 5-O B 平面図・断面図



第42図 6-O B 平面図・断面図

ある。

566は須恵器の杯で、底部のみの破片である。底部外面周縁付近に貼付高台を付す。

567は土師器の甕で、口縁部のみの破片である。口縁の立ち上りは低く短い。

6-OB (第42図, 図版9)

第2地区の中央部やや西寄りの、J08EM・FM・EN・FNにまたがる地区で検出された2間×3間の掘立柱建物である。4-OBと梁をならべて並列する位置関係にある。主軸はN-7°-Wを示す。桁行間3間×梁間2間で、実数値は西桁行間5.4m, 東桁行間5.3m, 北梁間3.4m, 南梁間3.3mを測った。柱穴は

径0.2m~0.5mの円形ないしは楕円形状を呈する。内部から須恵器・土師器が少量出土したが、図示し得るものはなかった。

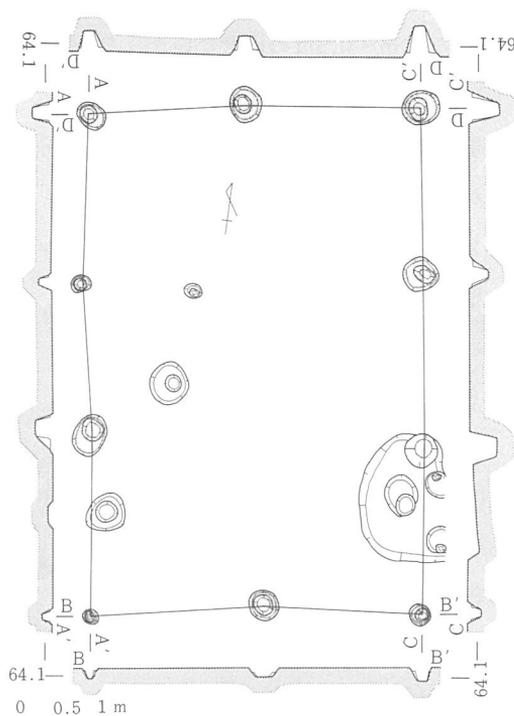
7-OB (第43図, 図版9)

第2地区の南半部の、J08GN・GO・HN・HO・IOにまたがる地区で検出された2間×3間の掘立柱建物である。主軸はN-8°-Wを示す。桁行間3間×梁間2間で、実数値は西桁行間

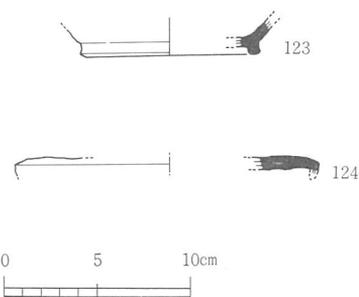
5.3m, 東桁行間5.4m, 北梁間3.4m, 南梁間3.6mを測った。柱穴は径0.2m~0.4mの円形状を呈する。内部から須恵器・土師器が少量出土した。

8-OB (第45図, 図版10)

第2地区の南半部の、J08IN・IO・JN・JO・KNにまたがる地区で検出された2間×2間の掘立柱建物である。7-OBと梁をならべて並列する位置関係にある。主軸はN-8°-Wを示す。桁行間2間×梁間2間で、実数値は西桁行間4.5m, 東桁行間5m, 北梁間4.5m, 南梁間4mを測った。ややいびつな四角形状の平面プランを持つ。柱



第43図 7-OB平面図・断面図



第44図 7-OB出土遺物

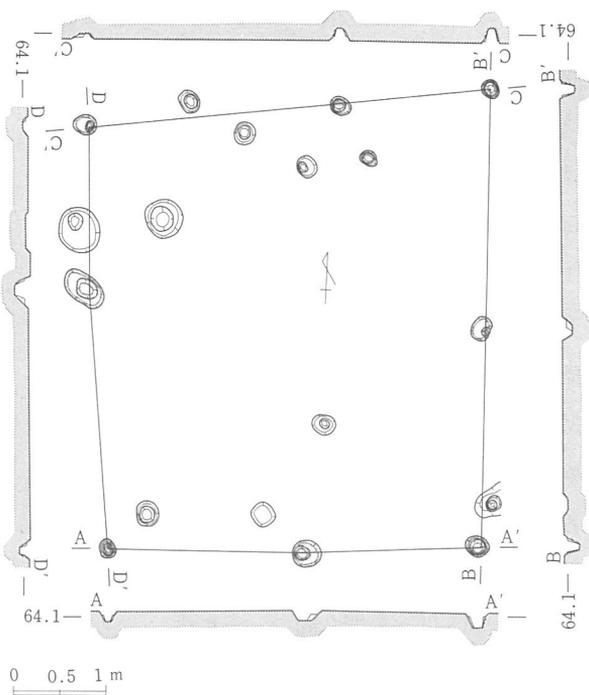
穴は径0.2m～0.5mの円形ないしは楕円形状を呈する。内部から須恵器・土師器が少量出土したが図示し得るものはなかった。

2. 土坑

第2地区では、奈良時代に比定される土坑が7基検出された。

6-〇〇 (第46図)

第2地区の中央部東端付近の、J08AP・B〇・BPにまたがる地区で検出された土坑である。楕円形状を呈し、長径2.2m、短径1.7m、深さ0.1mを測った。埋土は1層で、5YR3/1黒褐色土である。埋土内にはこぶし



第45図 8-〇B平面図・断面図

大の礫を多く含んでいる。内部から須恵器・土師器が少量出土した。

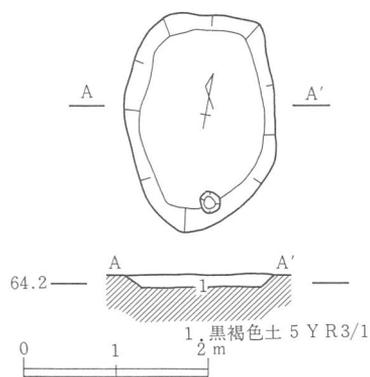
6-〇〇出土遺物 (第47図125)

6-〇〇からは須恵器・土師器が少量出土した。そのうち図示し得たのは1点である。

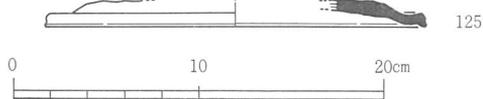
125は須恵器の杯蓋で、頂部周縁及び縁部の破片である。平らな頂部で、縁部は屈曲する。

7-〇〇 (第48図, 図版13)

第2地区の中央部やや東寄りの、J08CN・DNにまたがる地区で検出した土坑である。楕円形状を呈し、長径1.45m、短径0.8m、深さ0.6mを測った。埋土は4層に分層でき、上より5YR4/2灰褐色粘質土、7.5YR5/2褐色混じり灰褐色粘質土、2.5Y5/6灰色混じり



第46図 6-〇〇平面図・断面図



第47図 6-〇〇出土遺物

黄褐色土， N6/灰色砂である。内部から須恵器・土師器が少量出土した。

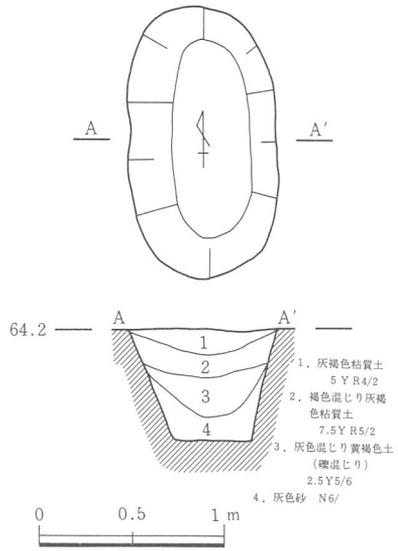
7-〇〇出土遺物（第49図126～129）

7-〇〇からは須恵器・土師器が少量出土した。そのうち図示し得たのは4点である。

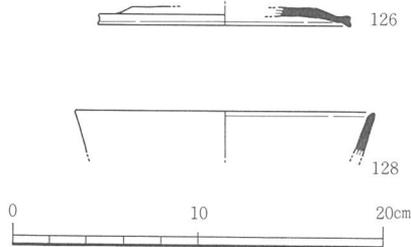
126は須恵器の杯蓋で，頂部周縁及び縁部のみ破片である。平らな頂部で，縁部は屈曲する。

127，128は須恵器の杯で，口縁部のみ破片である。杯蓋126と一対となるものと思われる。

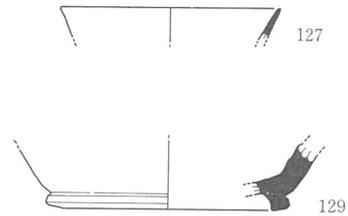
129は須恵器の壺で，底部周縁のみ破片である。底部外面周縁に貼付高台を付す。



第48図 7-〇〇平面図・断面図



第49図 7-〇〇出土遺物



8-〇〇（第50図）

第2地区の中央部やや東寄りの，J 08DNで検出した土坑である。不整楕円形状を呈し，長径0.9m，短径0.8m，深さ0.1mを測った。埋土は1層で，5 Y R 3/1黒褐色土である。内部から須恵器・土師器がごく少量出土した。

8-〇〇出土遺物（第51図130）

8-〇〇からは須恵器・土師器がごく少量出土した。そのうち図示し得たのは1点である。

130は須恵器の杯で，口縁部のみ破片である。口縁の立ち上りが外上方にのび，端部付近でゆるく外反して終る。

9-00 (第52図)

第2地区の中央部の、J08FN・FO・GN・G
Oにまたがる地区で検出した土坑である。不定形状
を呈し、長径4.3m、短径2.7m、深さ0.42mを測っ
た。埋土は3層に分層でき、上より7.5YR3/3暗褐
色土、2.5Y3/1黄褐色混じり黒褐色土、2.5Y5/6黄
褐色土である。内部から須恵器・土師器が比較的ま
とまった量出土した。

9-00出土遺物 (第53図131~第54図150)

9-00からは須恵器・土師器が比較的まとま
った量出土した。そのうち図示し得たのは20点である。

131~135は須恵器の杯蓋である。すべて頂部周縁
及び縁部のみの破片である。平らな頂部で、縁部は
屈曲する。

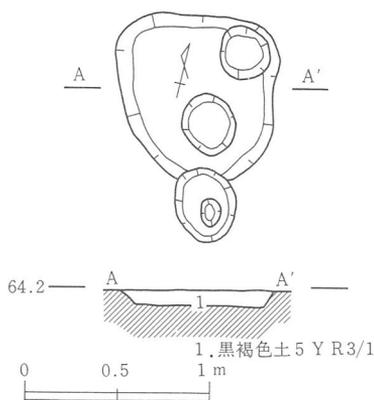
136~142は須恵器の杯である。そのうち136は平らな底部とまっすぐ外上方にのびる口
縁部からなるもので、高台を持たないタイプである。

137~139は基本的には136と同じ形態で、底部外面周縁付近に貼付高台を付したもので
ある。

143, 144は須恵器の壺と思
われる。ともに底部周縁及び
体部下半のみの破片で、全体
の形状はわからない。底部外
面周縁に貼付高台を付してい
る。

145は須恵器の鉢である。
口縁部及び体部上半のみの破
片である。内湾しつつ立ち上
る口縁部で、いわゆる鉄鉢形
を呈するものと思われる。

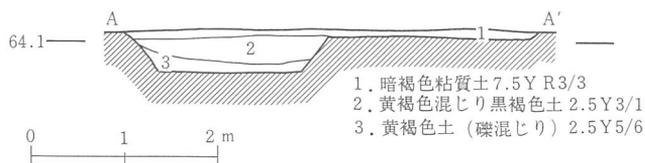
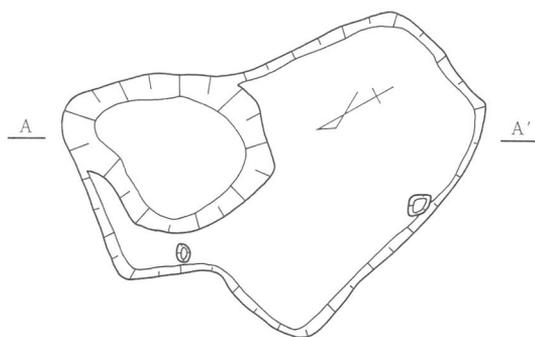
146は須恵器の高杯で、脚



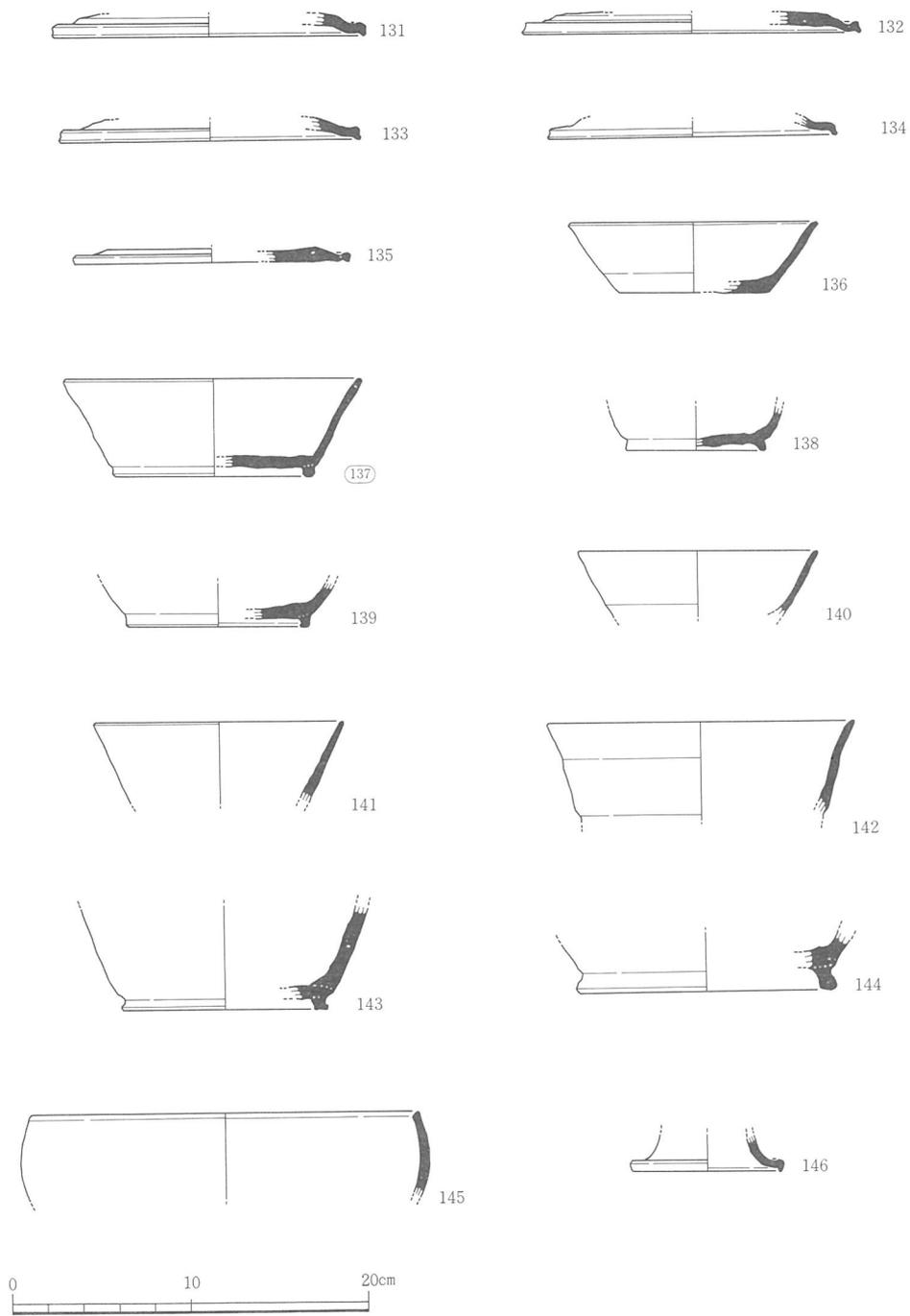
第50図 8-00平面図・断面図



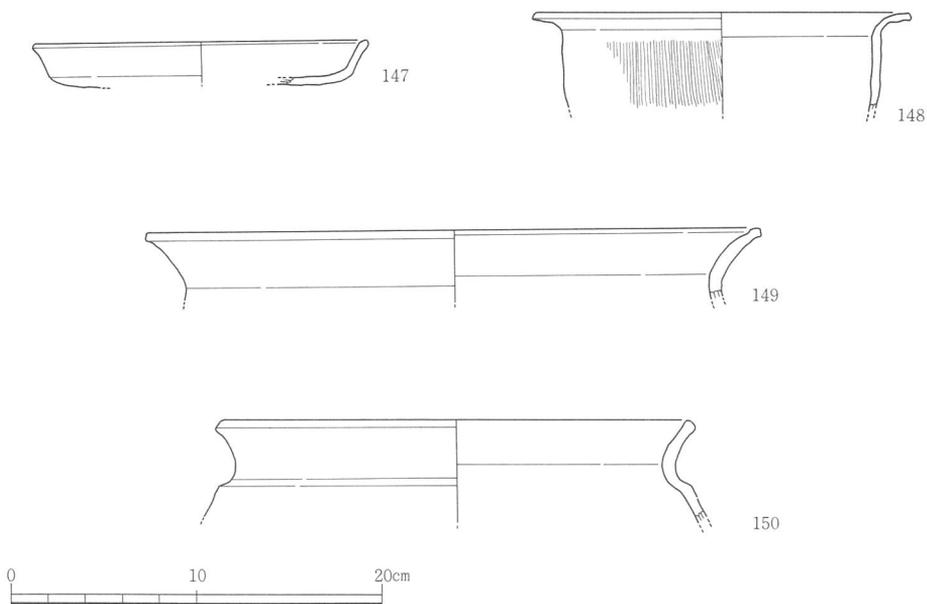
第51図 8-00出土遺物



第52図 9-00平面図・断面図



第53图 9-〇〇出土遺物(1)



第54図 9-〇〇出土遺物(2)

底部付近の破片である。ラッパ状に開く脚柱部で、口縁部が短く外反する。

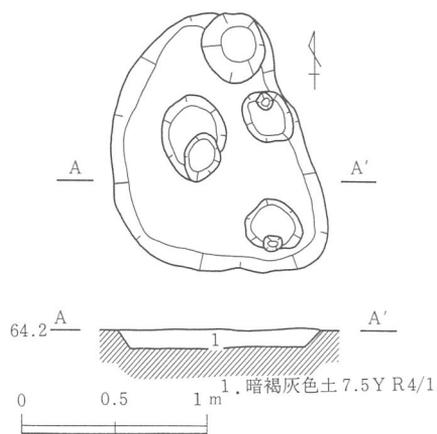
147は土師器の皿である。平らな底部で、口縁の立ち上りが低く外上方に開く。

148~150は土師器の甕である。そのうち148は長手丸底の体部と思われ、口縁の立ち上りが外方へ短く開く。

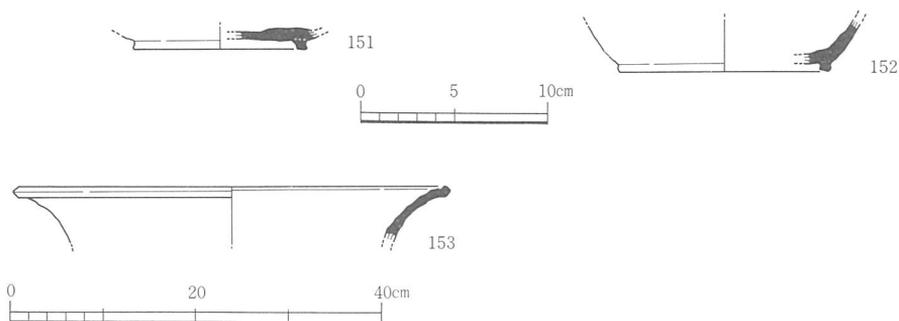
149, 150は球形に近い体部と思われ、口縁の立ち上りが短く外反しつつ外上方へ開く。

10-〇〇 (第55図)

第2地区の南半部の、J08H〇で検出した土坑である。不定形状を呈し、長径1.44m、短径0.95m、深さ0.12mを測った。埋土は1層で、7.5Y R4/1暗褐灰色土である。内部から須恵器・土師器が少量出土した。



第55図 10-〇〇平面図・断面図



第56図 10-〇〇出土遺物

10-〇〇出土遺物（第56図151～153）

10-〇〇からは須恵器・土師器などが少量出土した。そのうち図示し得たのは3点である。

151, 152は須恵器の杯である。ともに底部周縁付近の破片で、外面周縁付近に貼付高台を付す。

153は須恵器の壺で、口縁部のみの破片である。口縁の立ち上りが外反しつつ外上方へ開く。

11-〇〇（第57図，図版13）

第2地区の中央部東端の、J 08C P・C Qにまたがる地区で検出した土坑である。楕円形状を呈し、長径1.18m，短径1 m，深さ0.16mを測った。埋土は1層で、5 Y R 3/1黒褐色土である。内部から須恵器・土師器が比較的まとまった量出土した。

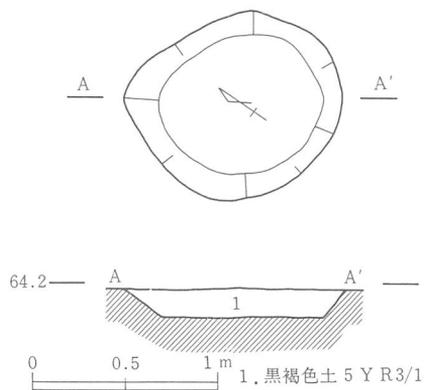
11-〇〇出土遺物（第58図154～160）

11-〇〇からは須恵器・土師器などが比較的まとまった量出土した。そのうち図示し得たのは7点であった。

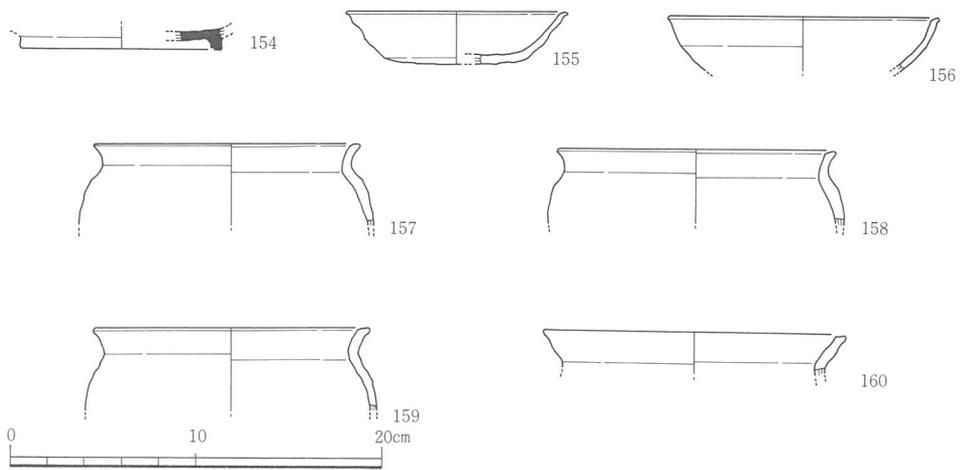
154は須恵器の杯で、底部周縁付近の破片である。外面周縁に貼付高台を付す。

155, 156は土師器の杯である。そのうち155は比較的平らな底部で、口縁の立ち上りがまっすぐ外上方へ開く。口縁端部を軽く外側へつまみ出す。

157～160は土師器の甕である。すべて口縁部及び体部上半のみの破片である。球形に近い体



第57図 11-〇〇平面図・断面図



第58図 11-〇〇出土遺物

部で、口縁の立ち上りが短く、外反して終る。口縁端部の内側に面を持つものである。

12-〇〇 (第59図)

第2地区の中央部の、J 08DM・DNまたがる地区で検出した土坑である。不整楕円形状を呈し、長径2.1m、短径0.8m、深さ0.08mを測った。埋土は1層で、7.5YR4/1暗褐灰色土である。内部から須恵器・土師器が少量出土したが、図示し得るものはなかった。

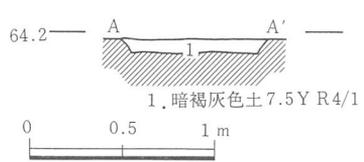
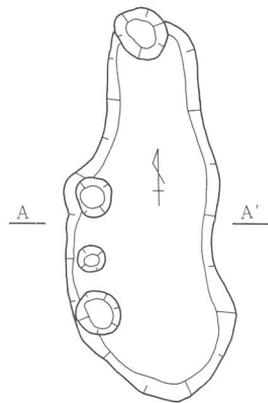
3. 溝

第2地区では、奈良時代に比定される溝が5条検出された。

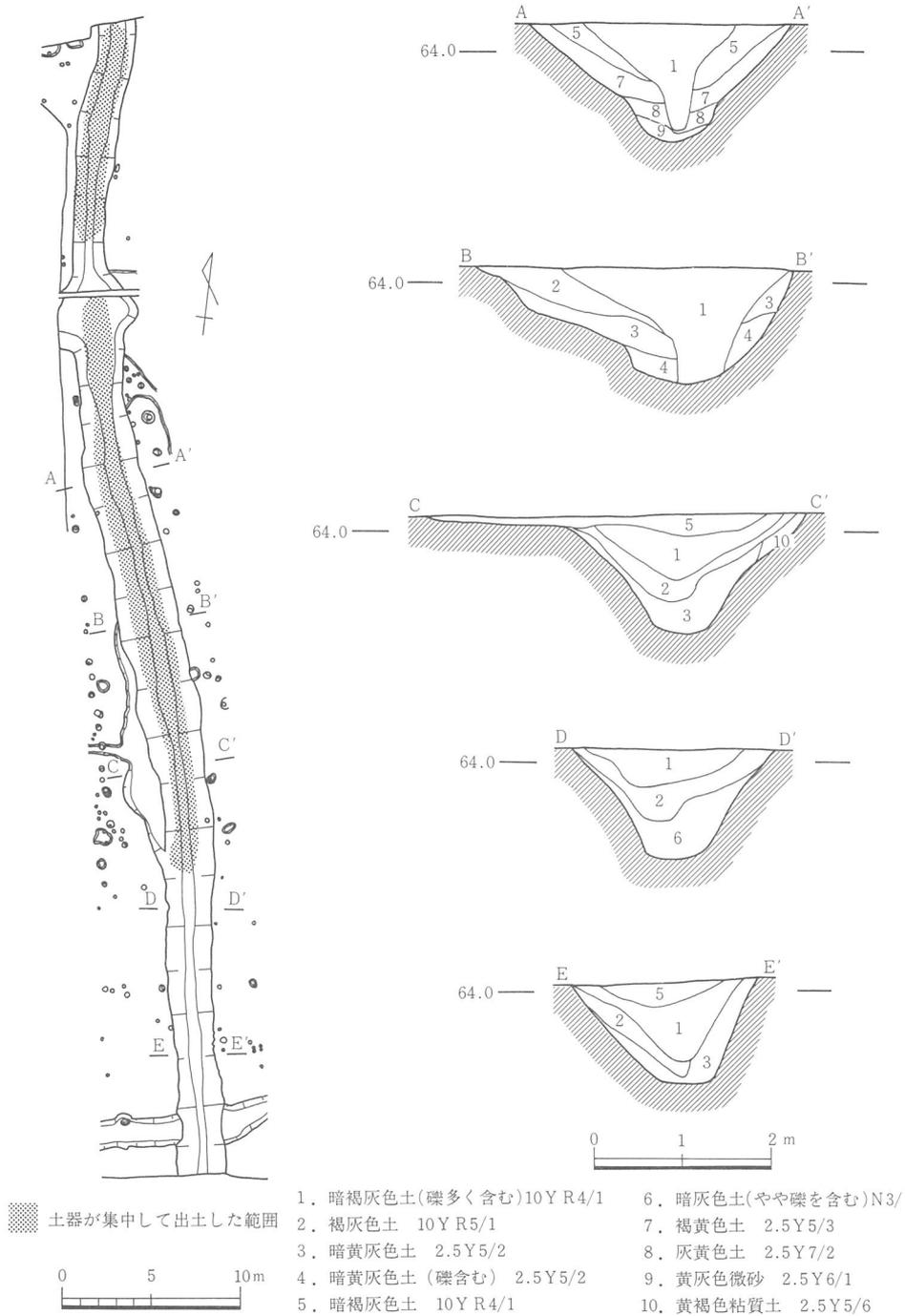
1-〇S (第60図, 図版10~12)

第1地区で検出された1-〇Sの続きである。第2地区の西半部の、J 08VK~J 13MM・MNにまたがる地区を、南北方向にゆるく蛇行しつつ走る大溝である。南から北へ流れる。幅2m~3.5m、深さ1.5m~1.8mを測った。V字形に近い逆台形状の断面を呈している。

埋土は所によって3層から5層に分層できるが、2.5Y7/2灰黄色あるいは2.5Y6/1黄灰色を基調とする下層と、10YR4/1暗褐灰色を基調とする上層に大別される。埋土内からは須恵器・土師器・製塩土器などが多量に出土した。その総数はコンテナ80箱を超え



第59図 12-〇〇平面図・断面図



第60図 1-O S平面図・断面図

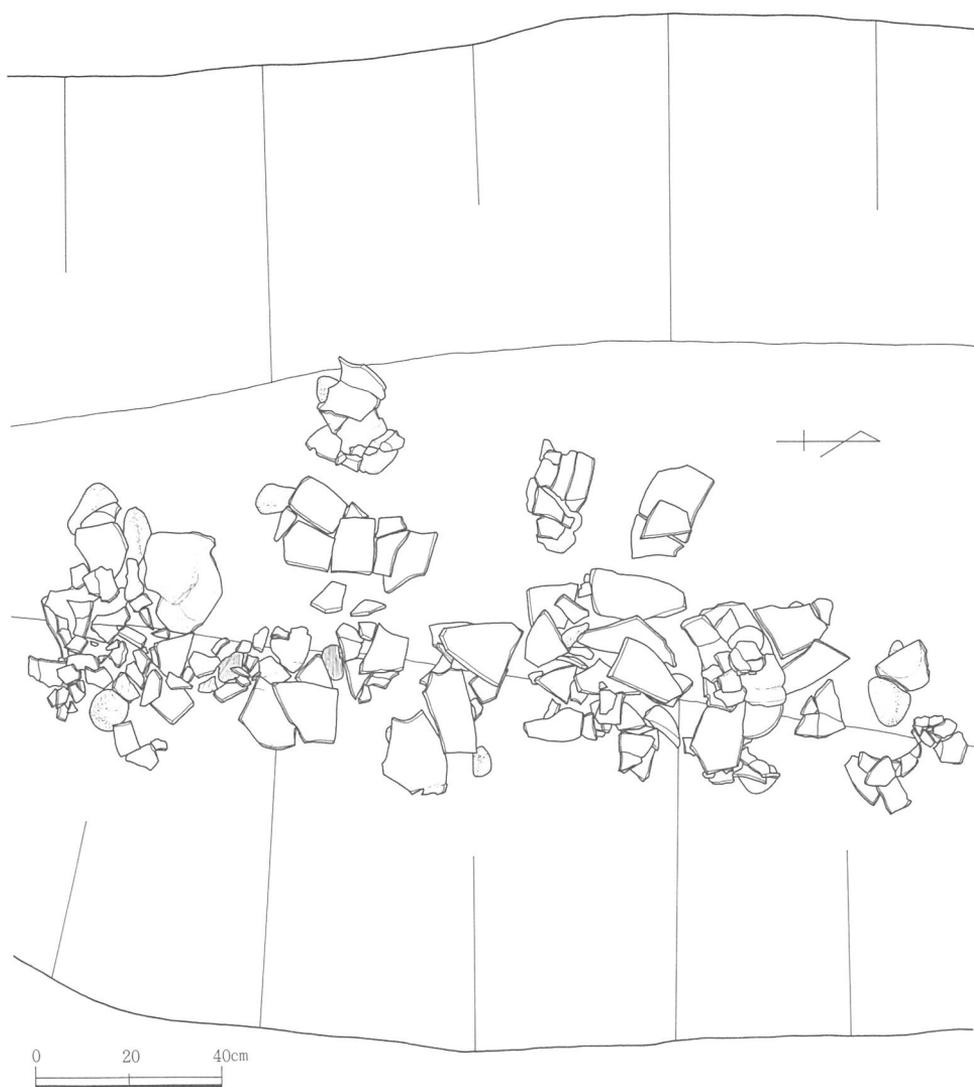


第61図 1-O S遺物出土状況(1)

るものである。これらの遺物はすべて上層から出土している。また、土器が集中して出土した部分が中央部から北半部にかけての地域で見られ、これは大溝の東側にひろがる奈良時代の集落の範囲とほぼ一致している。

1-O S出土遺物（第63図161～第100図538）

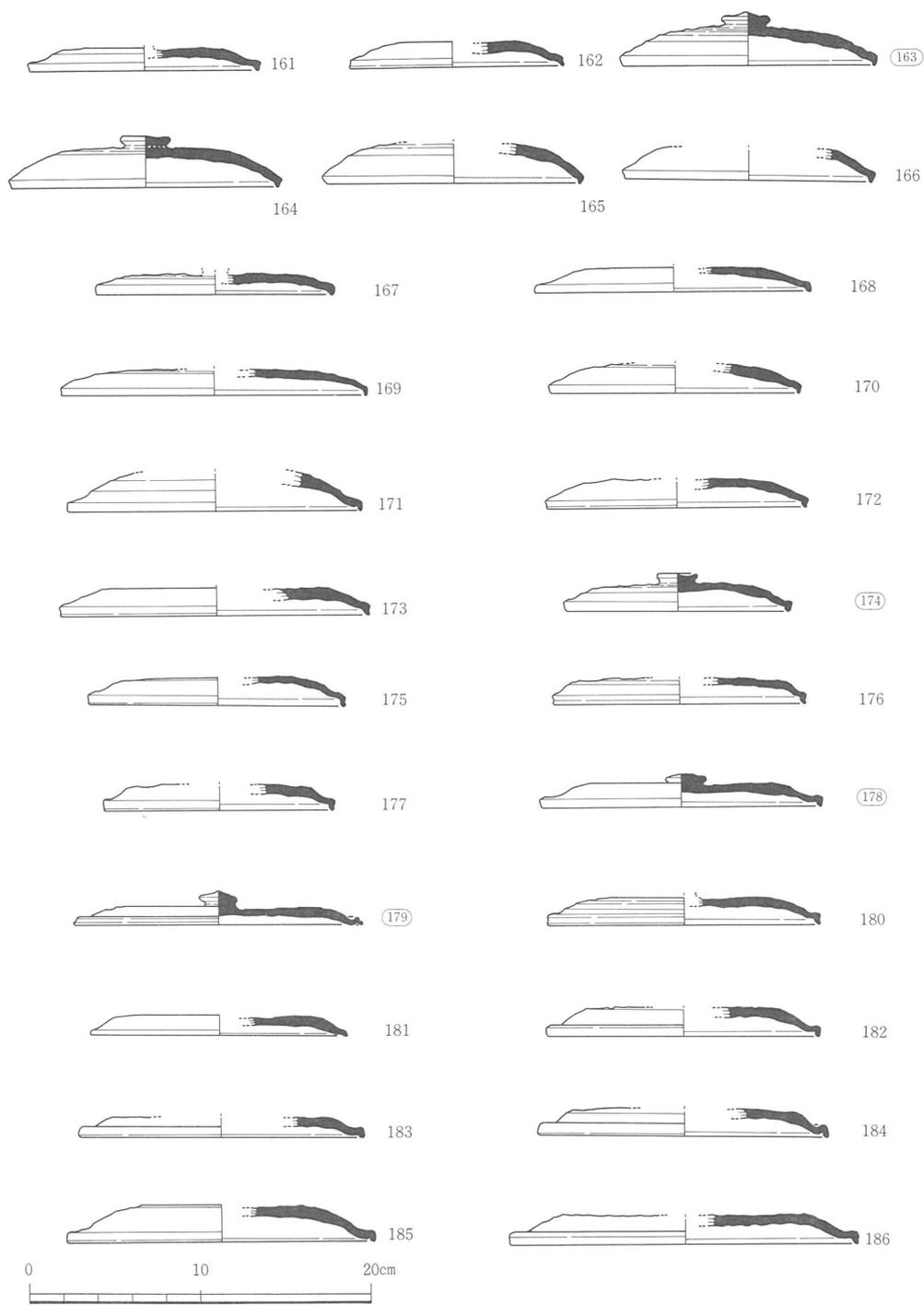
大溝1-O Sのうち、第2地区で検出された範囲内からは須恵器・土師器・製塩土器・石製品などが多量に出土した。整理の段階では図化し得るものは概ね図化しているが、ここではその中から抽出した378点を掲載した。



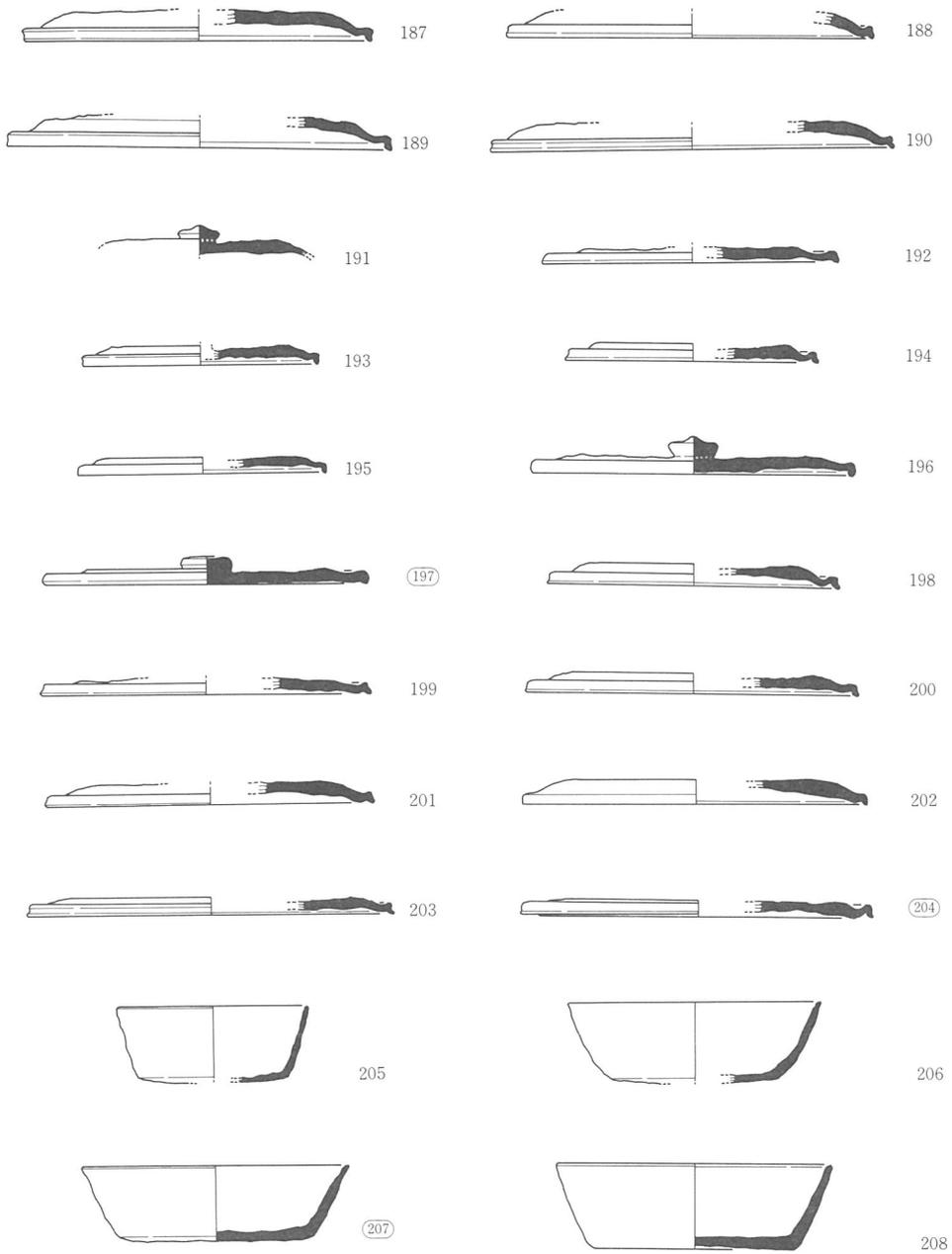
第62図 1-O S遺物出土状況(2)

161～204は須恵器の杯蓋である。頂部が丸く笠形状を呈し、縁部は屈曲せず彎曲気味に端部に至るタイプ(163～166)と、平らな頂部で、縁部が屈曲して端部に至るタイプ(161, 162, 167～204)がある。どちらのタイプにも頂部中央に擬宝珠様つまみが付されている。これらのつまみは低く、ふくらみが消え扁平で、その中央部がわずかに凸形をなすものが主流をなす。

205～270, 272～278は須恵器の杯である。そのうち205～216は平坦な底部で、口縁の立ち上りがまっすぐ外上方にのびるもので、高台を持たないタイプである。



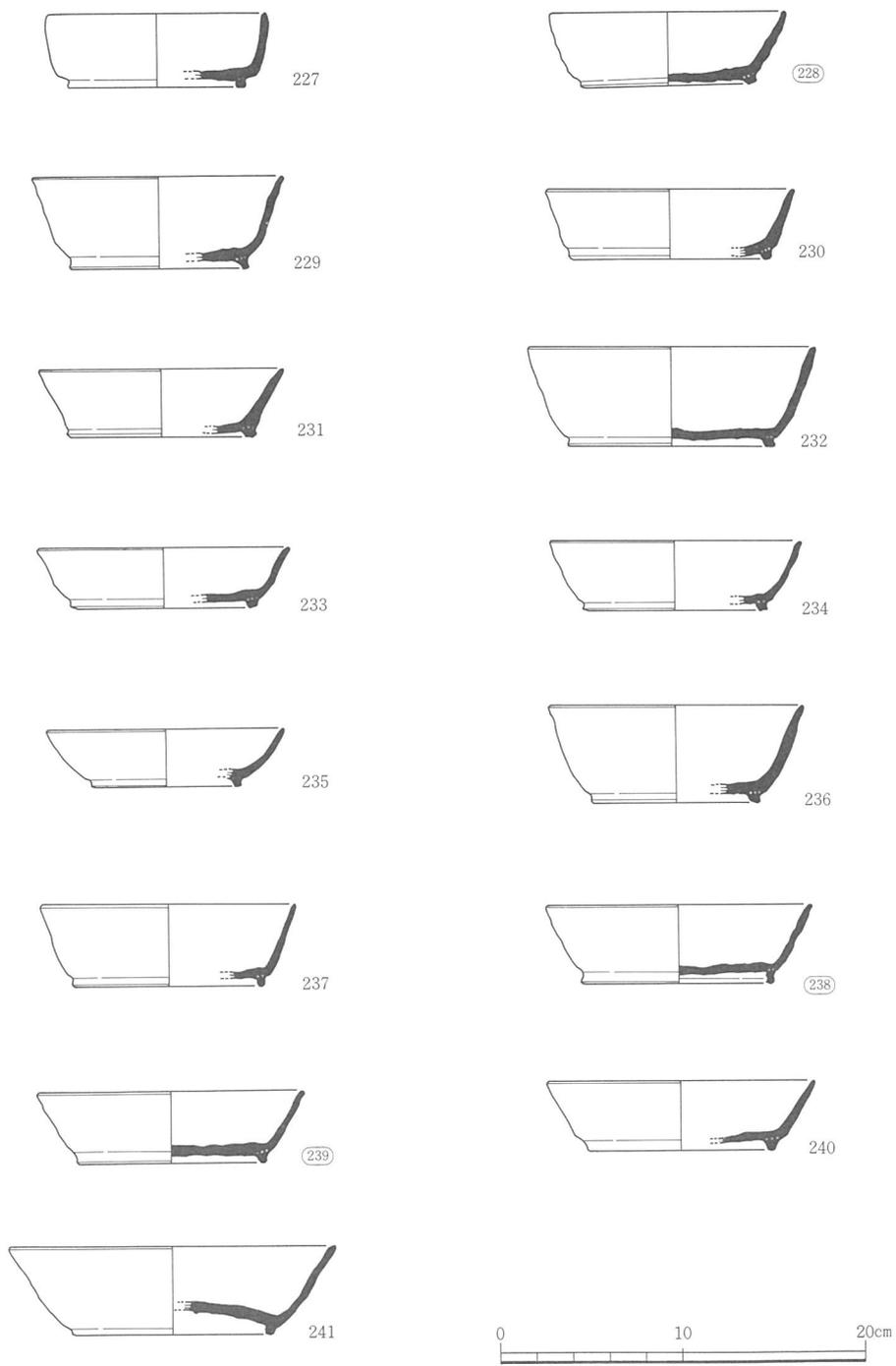
第63圖 1-O S出土遺物(1)



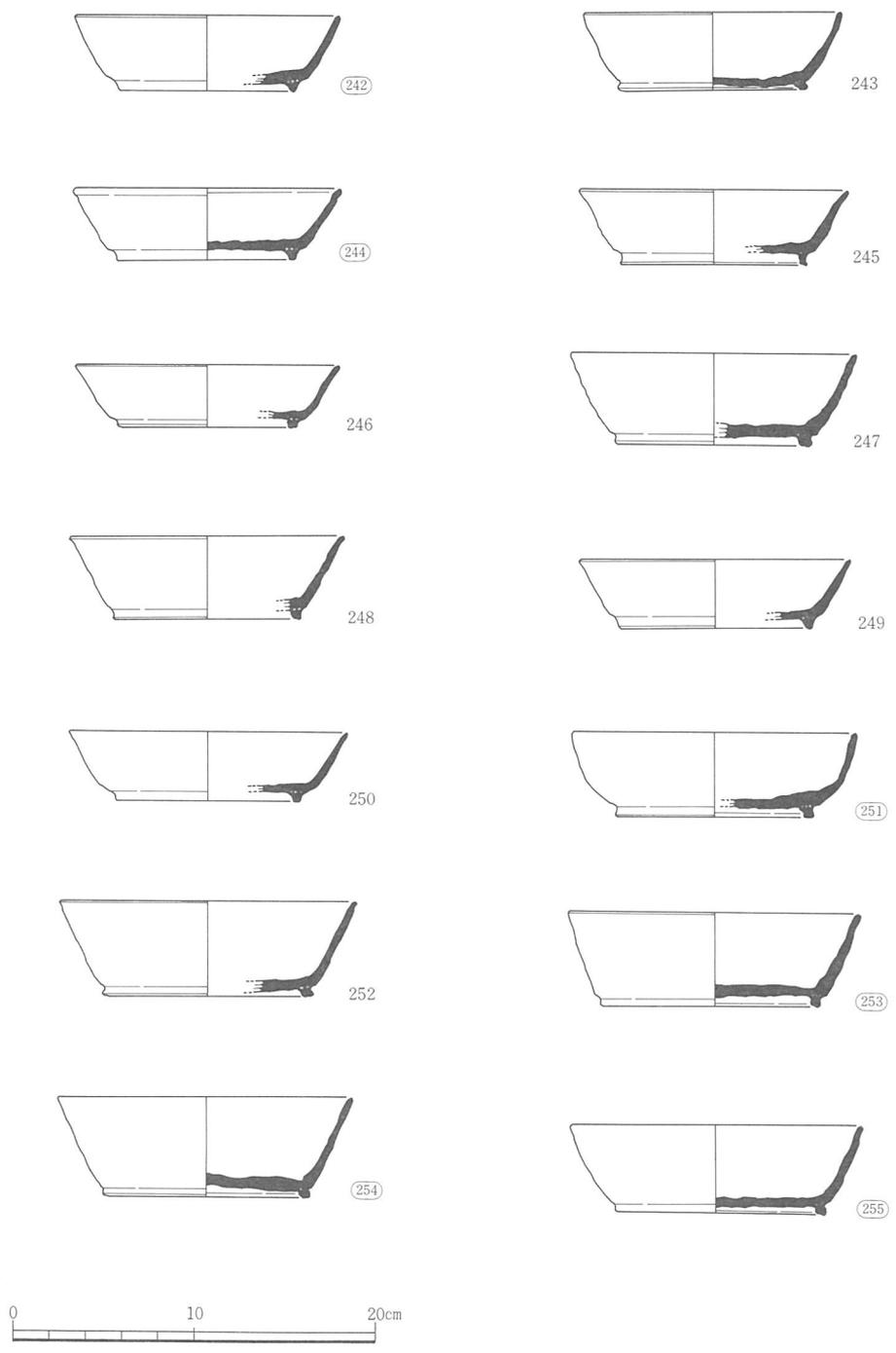
第64図 1-O S出土遺物(2)



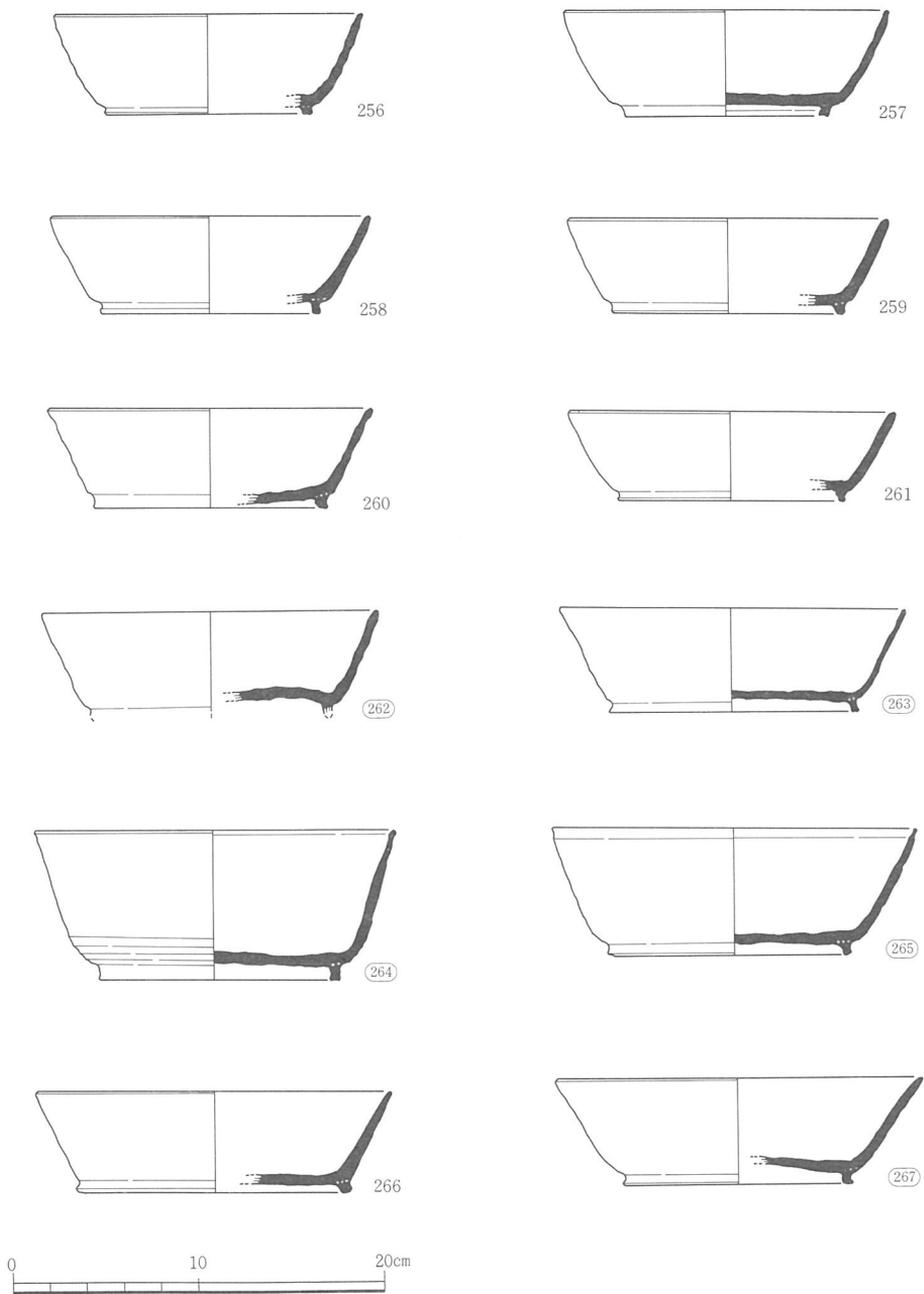
第65図 1-O S出土遺物(3)



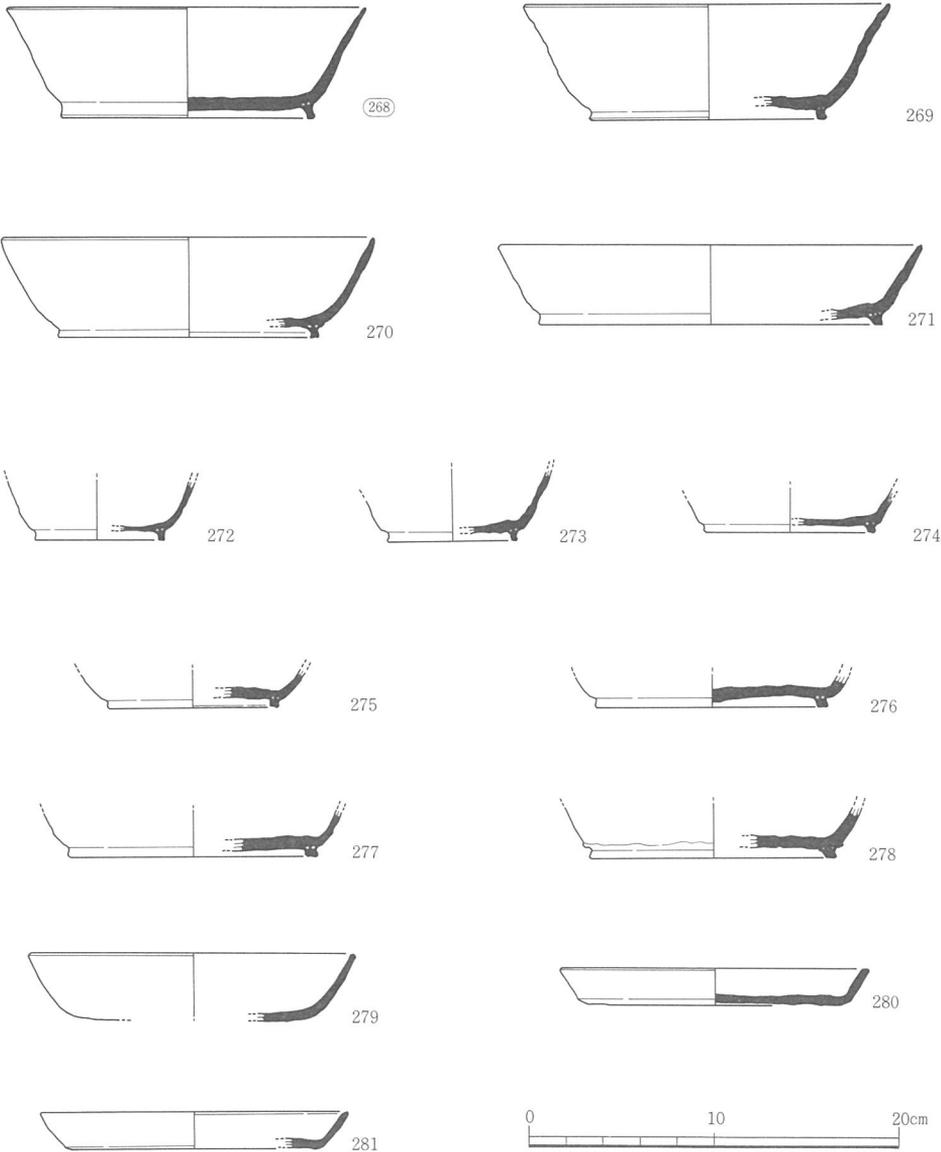
第66図 1-O S出土遺物(4)



第67図 1-O S出土遺物(5)



第68図 1-O S出土遺物(6)



第69図 1-O S 出土遺物(7)

224～270, 272～278は平坦な底部で、口縁の立ち上りが直立気味、あるいは外上方にまっすぐのびるもので、底部外面周縁に貼付高台を付すタイプである。このタイプの杯が杯蓋と一対になる。

271, 279～281は須恵器の皿である。そのうち271は平坦な底部で、口縁の立ち上りがまっすぐ外上方にのびる。底部外面周縁に貼付高台を付す。

279は平らな底部で、口縁の立ち上りがわずかに丸みを持ち、その後まっすぐ外上方へのびるものである。

280, 281は広く平坦な底部で、口縁の立ち上りが短く外上方に開くものである。

282～287は須恵器の甕である。そのうち282, 283, 285は卵形の体部で、口縁の立ち上りが外反しつつ外上方にのび、端部が外側へ短く屈曲するものである。

284, 286, 287は卵形の体部で、口縁の立ち上りがまっすぐ外上方にのび、端部上端面をなすものである。

これらの甕は、口径（復元口径を含む）35cm以上の大型のもの（282～284）と、口径30cm前後の中型のもの（285～287）とにわけられ、中でも284は復元口径53.2cmときわだって大きい。

288は須恵器の皿蓋である。頂部だけの破片であるが、丸く笠形を呈した頂部で、縁部は屈曲せず彎曲気味に端部に至るものと思われる。頂部中央に高い擬宝珠つまみを付す。

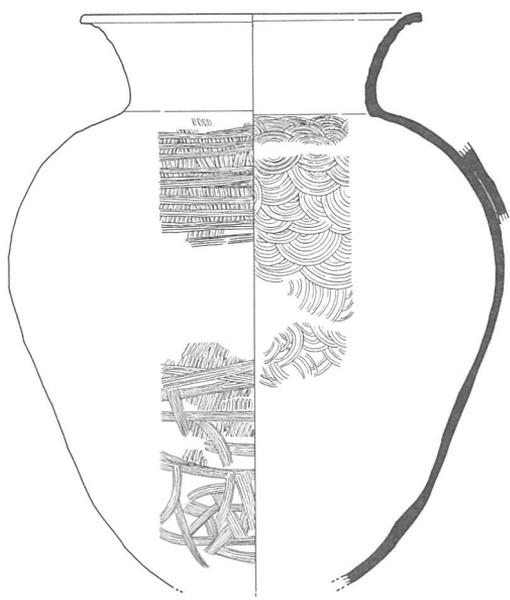
289, 290は須恵器の壺蓋である。平坦な頂部で、縁部は直角に屈折する。289は口径12.1cmと比較的小型で、頂部中央に擬宝珠様のつまみが付してある。290は復元口径21.4cmと大型である。

291～312は須恵器の壺である。そのうち291, 292は短頸壺で、体部上半の張りが丸みを持つものである。口縁の立ち上りがごく短く、直立する。底部外面周縁付近に貼付高台を付している。

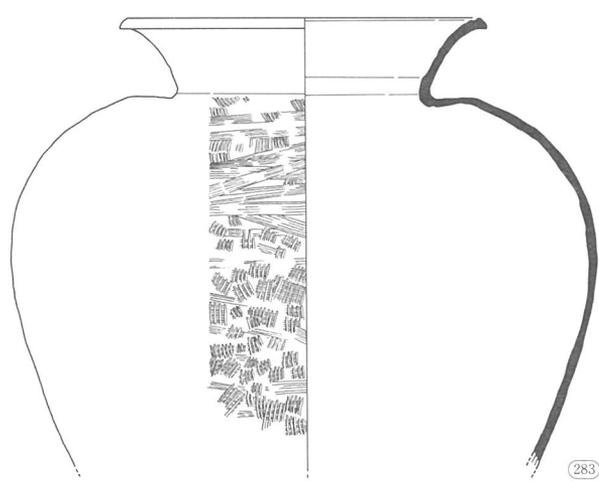
293もやはり須恵器の短頸壺である。大型で、口縁の立ち上りが短く、直立する。体部は上半のみが残存するが、肩の張ったイチジク形の体部と思われる。

294～298は須恵器の広口壺である。体部は肩部が稜角をなすもので、頸部から口縁部にかけては大きく外反しつつ外上方に立ち上る。294～297には底部外面周縁付近に貼付高台を付している。

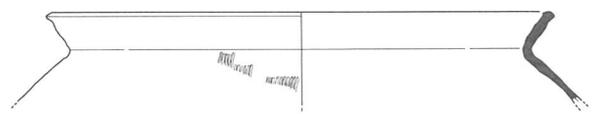
299は須恵器の壺で、広口壺の口縁部である。口縁の立ち上りが外反しつつ外上方へのび、端部で軽く外方へ屈曲する。



282



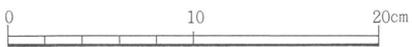
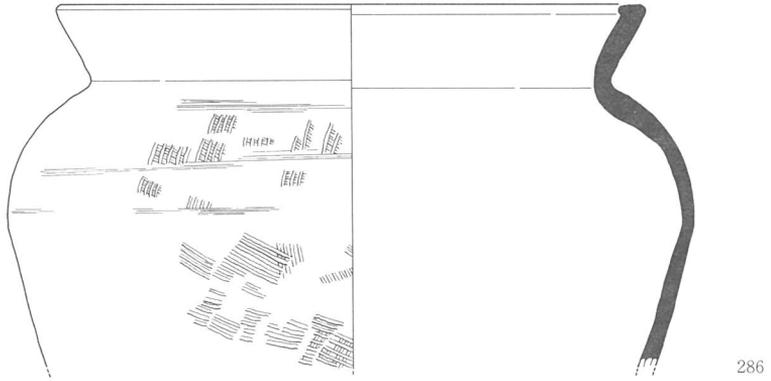
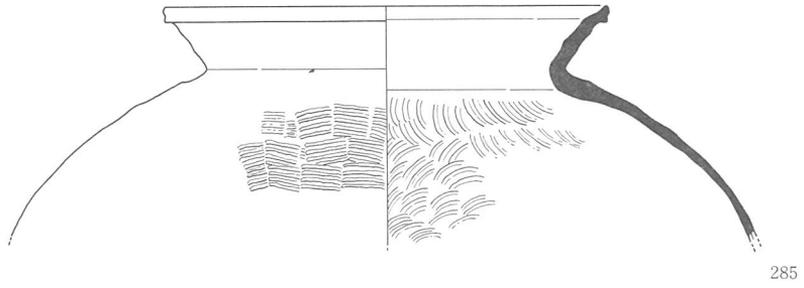
283



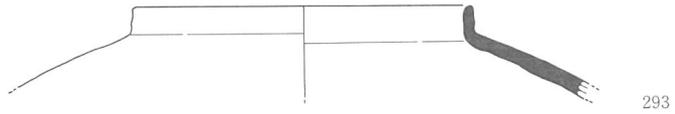
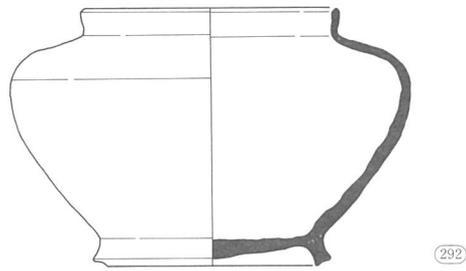
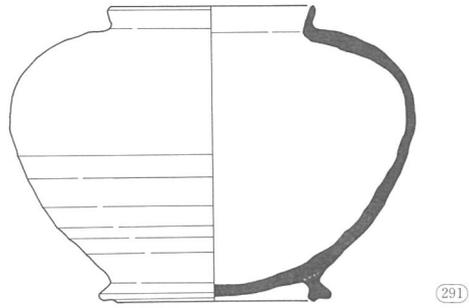
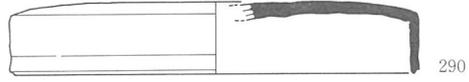
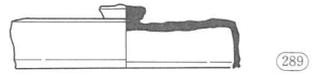
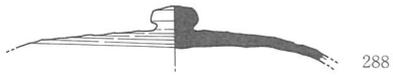
284



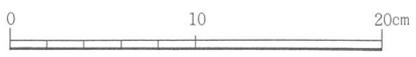
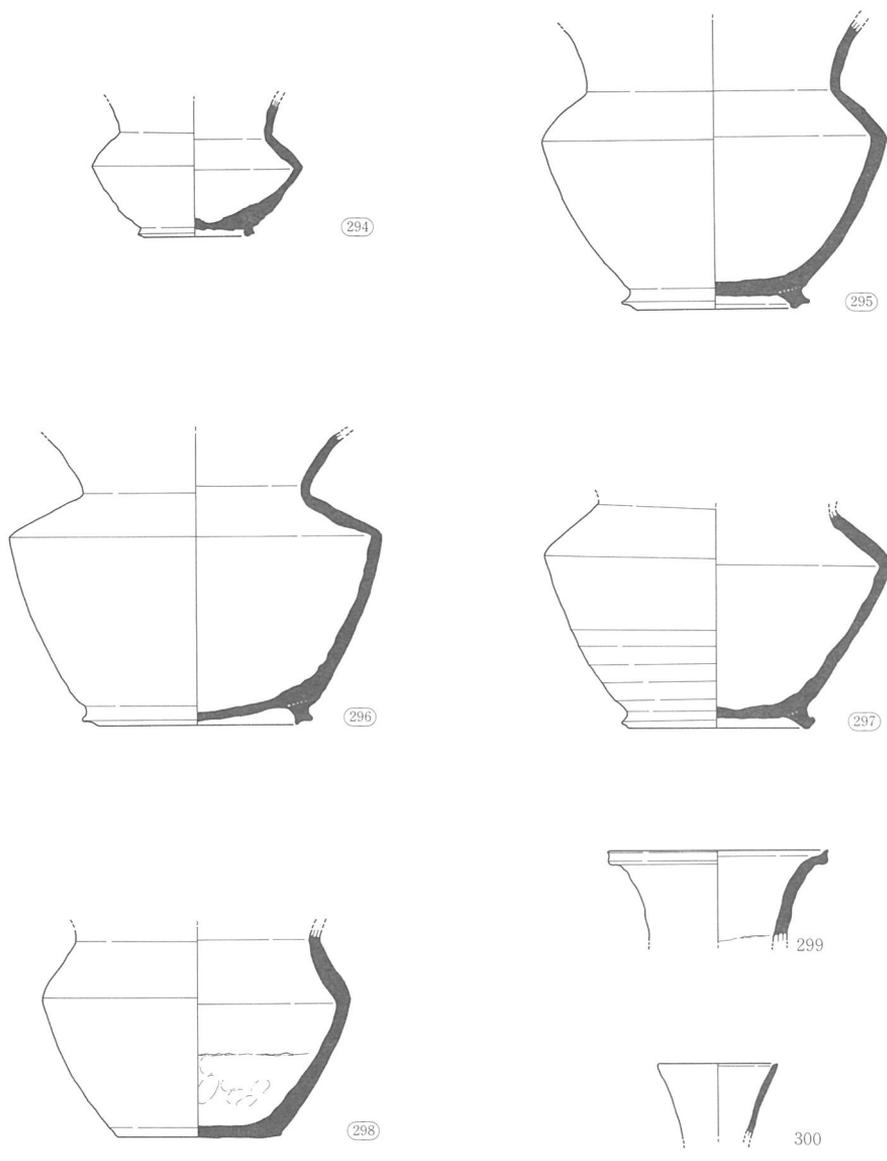
第70図 1-O S 出土遺物(8)



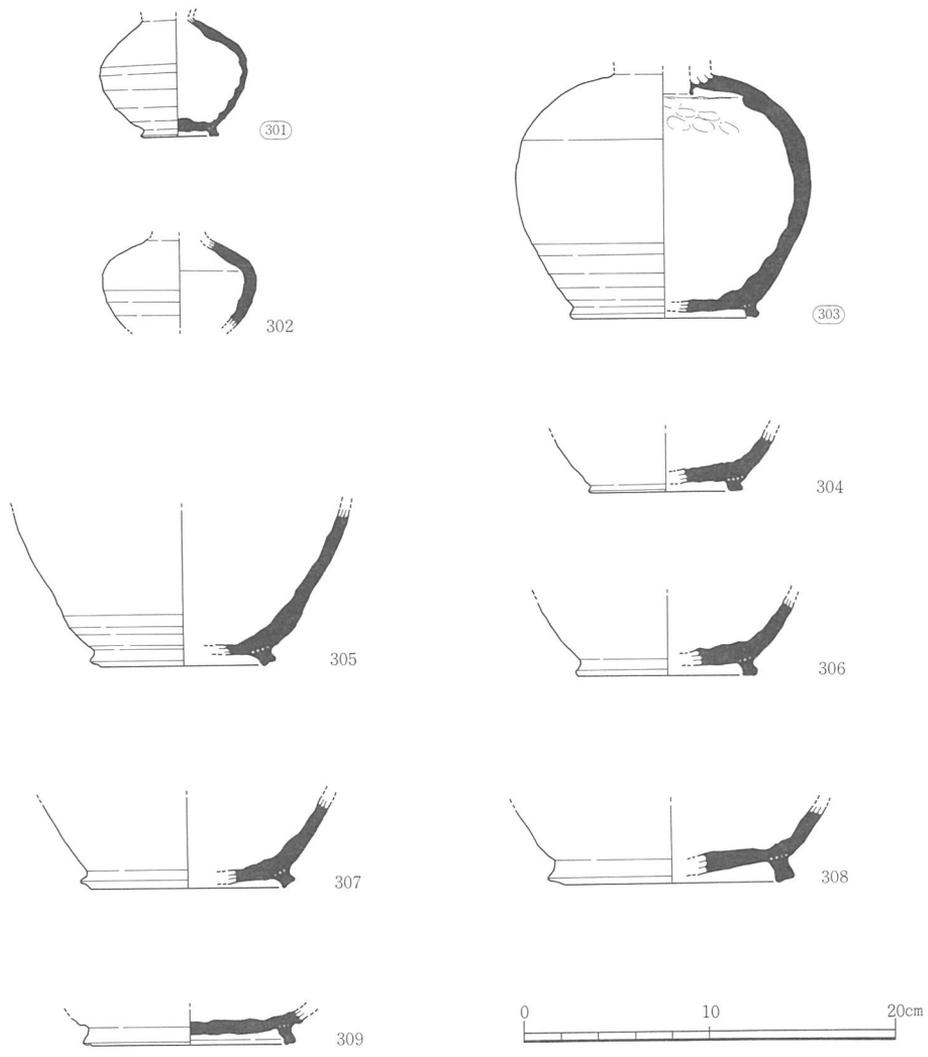
第71図 1-O S出土遺物(9)



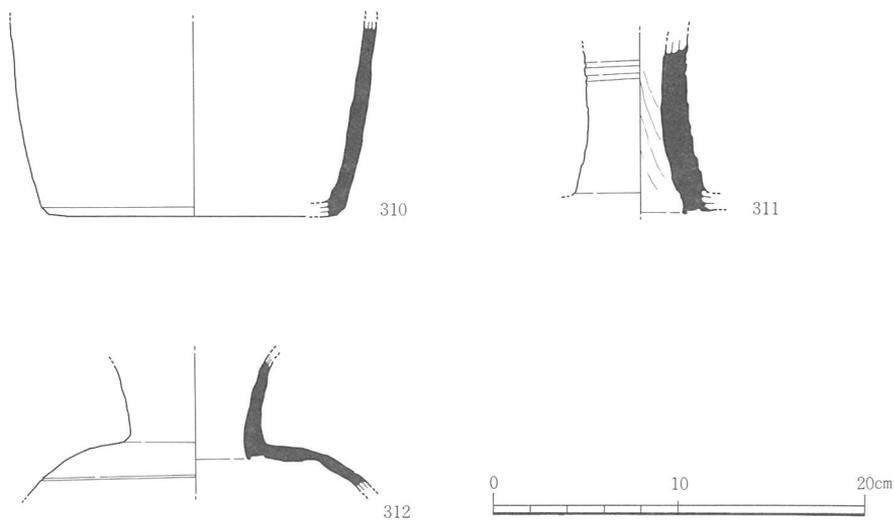
第72図 1-O S 出土遺物(10)



第73図 1-O S 出土遺物(11)



第74図 1-O S 出土遺物(12)



第75図 1-O S出土遺物(13)

300はやはり須恵器の壺で、長頸壺の口縁部と思われる。口縁の立ち上りが比較的まっすぐ外上方へのびる。

301～303は須恵器の長頸壺である。体部は卵形を呈し、口縁部は外反しつつ外上方にのびるものと思われる。底部外面周縁付近に貼付高台を付す。

304～310は須恵器の壺で、底部及び体部下半の破片である。そのうち304～309には底部外面周縁付近に貼付高台を付す。

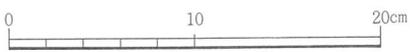
310は体部下半のみの破片であるが、平らな底部と思われる。体部はまっすぐ上方にのび、いわゆる長胴形を呈する。

311は須恵器の水瓶の頸部と思われる。外面に沈線を巡らせている。

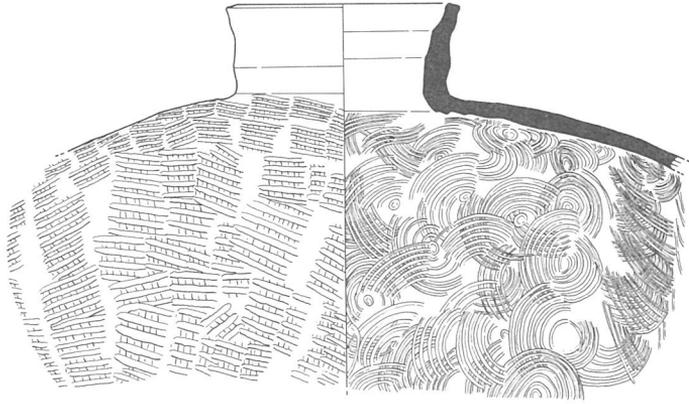
312は体部上半及び頸部のみの破片で、須恵器の壺と思われる。底部の大きい筒形の、いわゆる徳利形態を呈するものと思われ、頸部は直立気味で、口縁部は外反するものと思われる。

313、314は須恵器の横瓶である。そのうち313は横に長い俵形の体部で、上面中央に外反する口縁部を付けたものである。

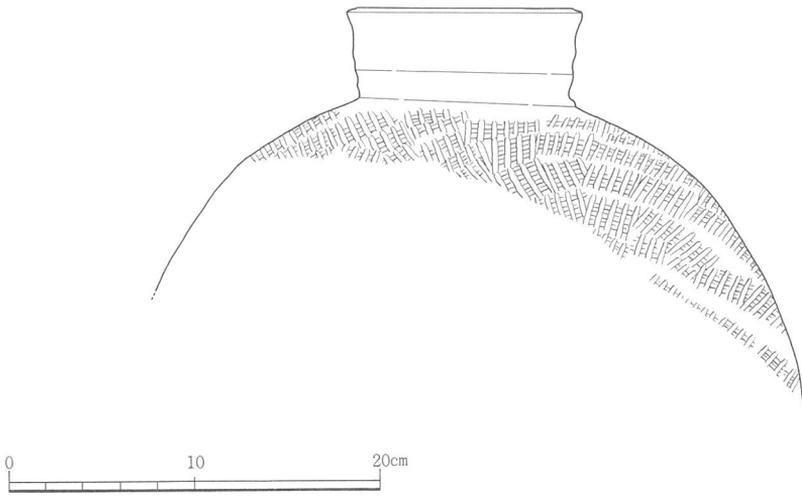
314は大型の横瓶である。体部の形状は313とほぼ同様と思われる。体部上面中央に口縁部を付ける。口縁の立ち上りは直立気味である。



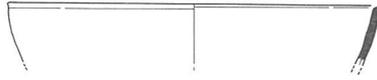
第76図 1-O S出土遺物(14)



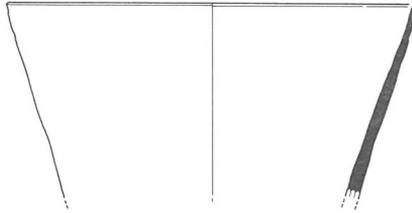
314



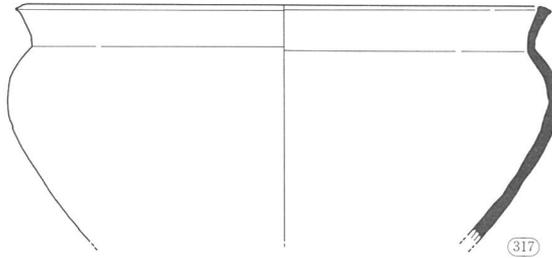
第77図 1-O S 出土遺物(15)



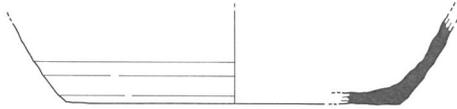
315



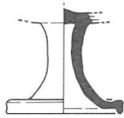
316



317



318

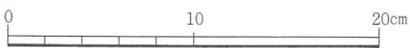


319



市

320



第78図 1-O S 出土遺物(16)

316は底部を欠損しているが平底と思われ、口縁部が長く、まっすぐ外上方にのびる。いわゆるバケツ形を呈するものと思われる。

317は大型の鉢である。体部は上位で肩が張り、平底と思われる。口縁部が短く、外反する。

318は底部のみの破片である。317のタイプの鉢の底部と思われる。

319は須恵器の高杯で、脚部の破片である。ラップ状に開く脚柱部で、縁部は短く屈曲する。杯部は欠損しているが、皿状の杯部が付くものと思われる。

320は須恵器で、杯の底部の破片と思われる。外面に「上中」の墨書がみられる。

321～339は土師器の杯である。そのうち321～330は小さな平底ないしは丸底の底部で、口縁の立ち上りが内湾しつつのびる。全体的に丸みを持つ形状を呈する。

331～333は平底の底部で、口縁の立ち上りが内湾しつつ外上方へのびる。端部を軽く外側へつまみ出す。

334～336は小さな平底で、全体的に丸みを持つ形状を呈する。口縁端部を外側へつまみ出した後内側へ曲げ込むものである。

337～339は広い平底で、口縁の立ち上りが外上方へ内湾しつつのびた後、短く外反して終る。端部を外側へ軽くつまみ出した後内側へ曲げ込む。内面に左下りの斜状暗文を施すもの(339)がみられる。

340は土師器の碗で、底部周縁付近のみの小片である。外面に貼付高台を付す。

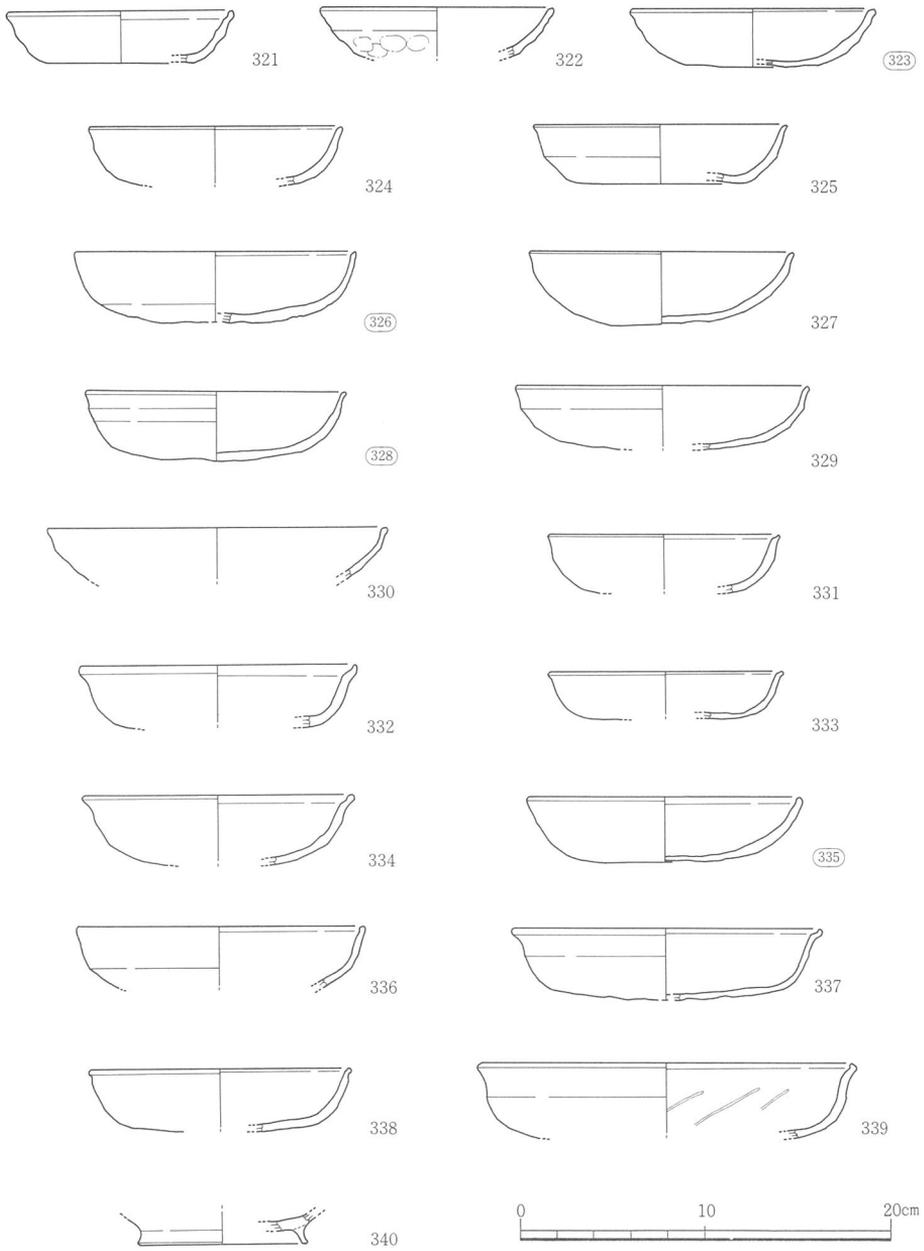
341～406は土師器の皿である。そのうち341～346は平底の底部で、口縁の立ち上りが内湾気味に外上方へのびる。端部を丸くおさめている。

347～354は平底の底部で、口縁の立ち上りが低く、外上方に内湾しつつのびる。端部を外側へ軽くつまみ出すものである。内面に斜状暗文を施すもの(349, 352)がある。

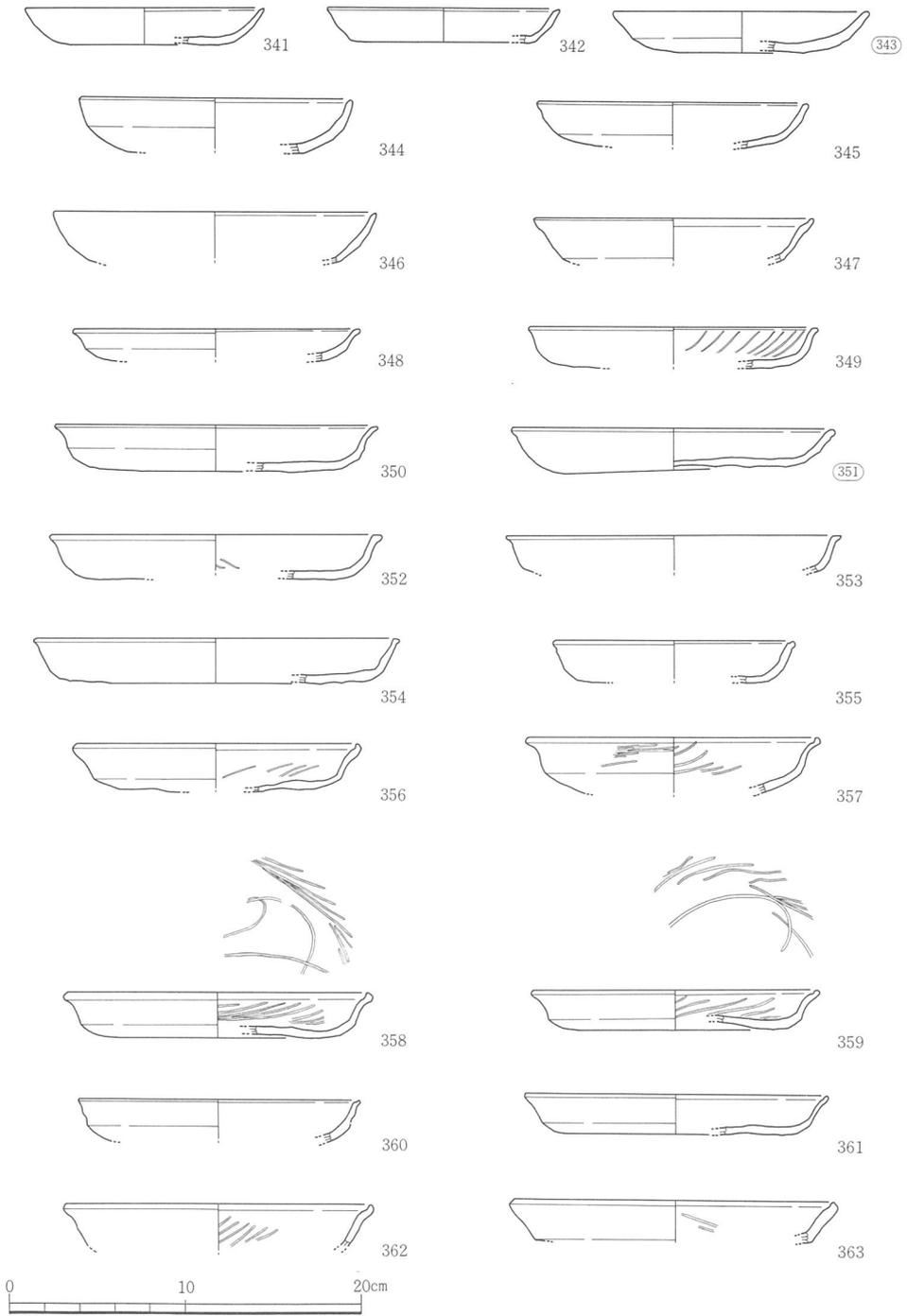
355～405は平底の底部で、口縁の立ち上りが内湾しつつ外上方へ低く立ち上り、その後外反して終る。端部を軽くつまみ出した後内側へ曲げ込んだものと、面を持つものがある。内面に斜状暗文および連結輪状暗文を施すものが多くみられる。

406は355～405とほぼ同じ形状を呈するもので、底部外面周縁付近に低い貼付高台を付す。内面に左下りの斜状暗文を二段にわたって施している。

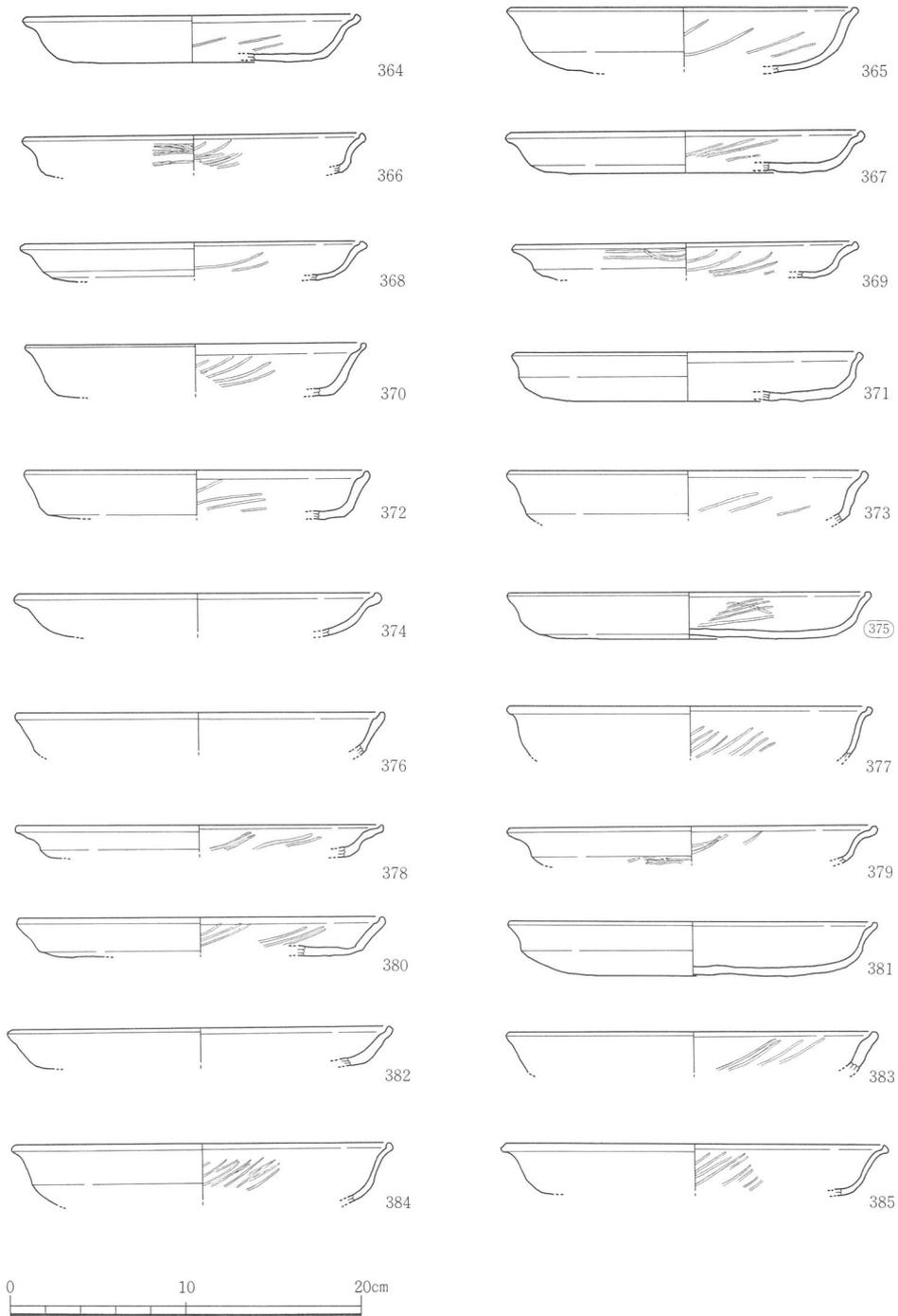
407～499は土師器の甕である。そのうち407～461は球形に近い体部で、口縁の立ち上りが低く、外反する。端部を外側へ軽くつまみ出した後内側へ曲げ込むものと、面を持つものがある。体部外面はハケ目調整、内面はヘラケズリあるいは指ナデによる調整を施す。



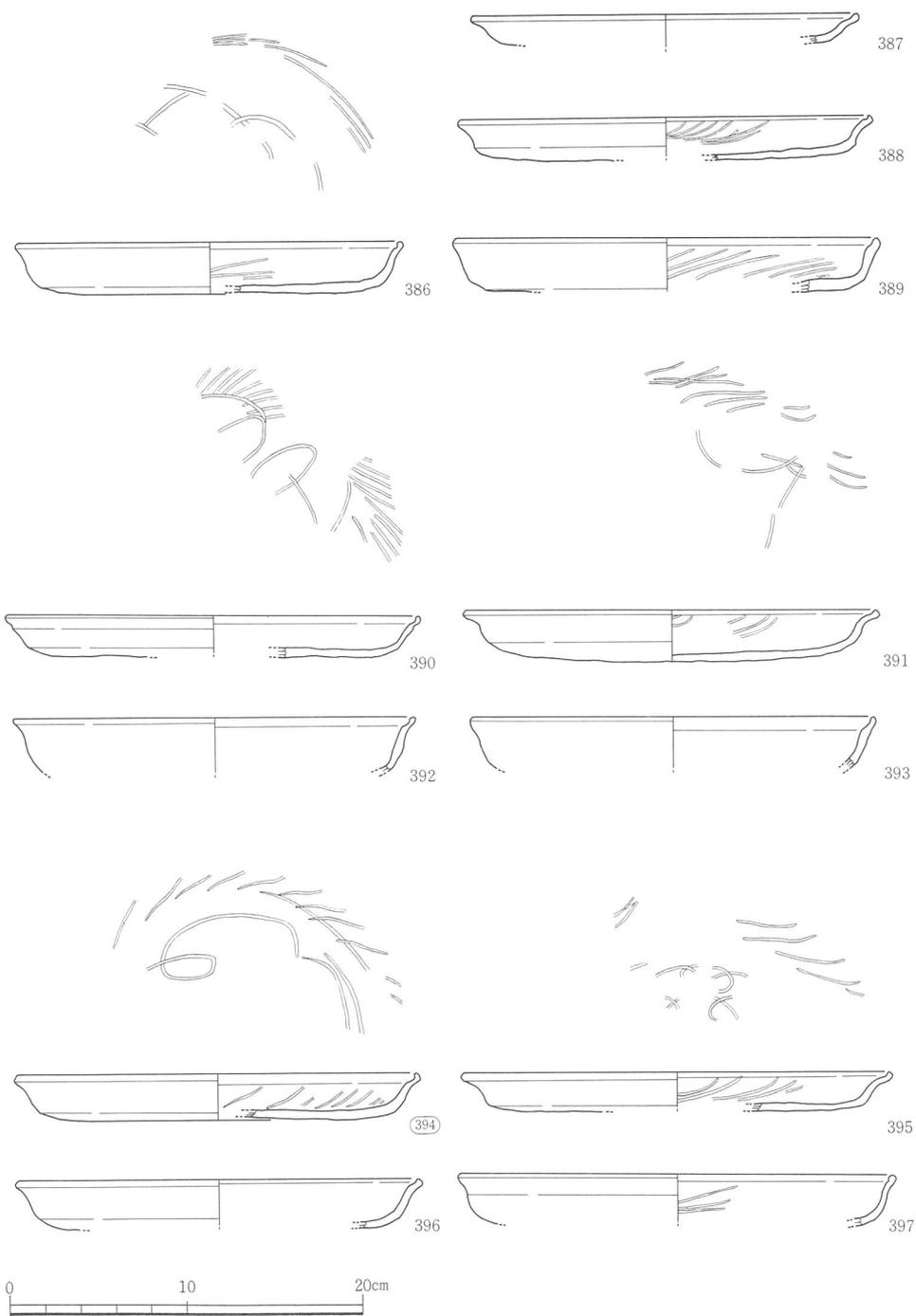
第79図 1-O S出土遺物(17)



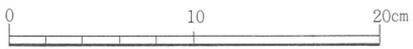
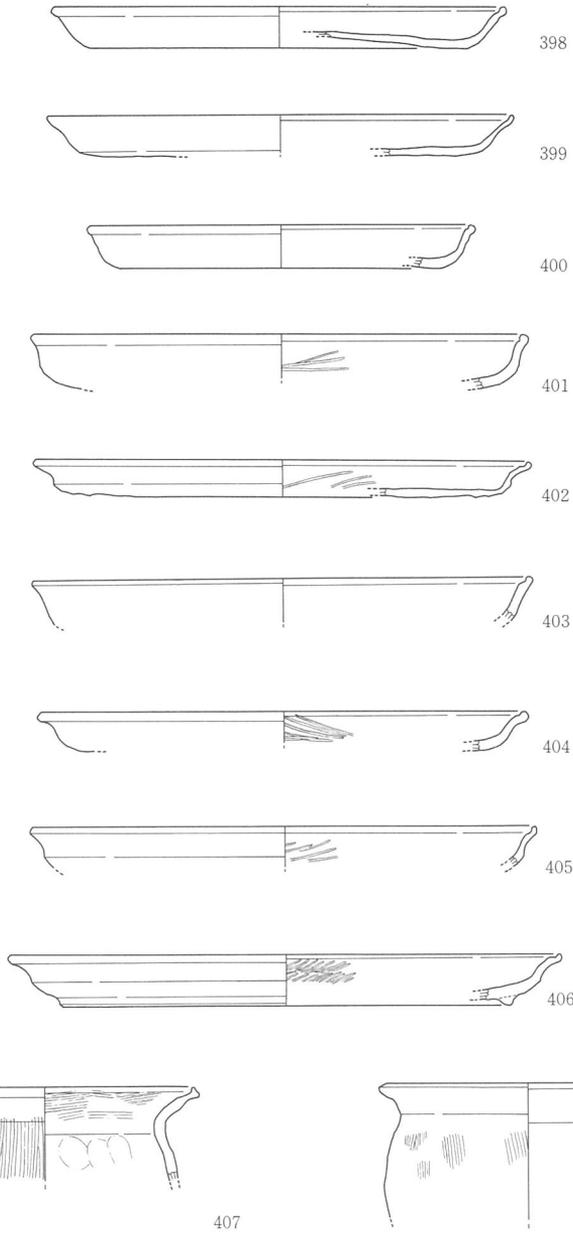
第80図 1-O S出土遺物(18)



第81図 1-O S出土遺物(19)



第82図 1-O S 出土遺物(20)



第83図 1-O S出土遺物(21)

462～499は頸部でややすぼまる長手丸底の体部で、口縁の立ち上りが低く外上方にのびる。体部外面の調整はハケ目で、内面はヘラケズリ、指ナデに加えてハケ目調整を施すものもある。484は体部外面中位に2ヵ所把手を付している。

500は土師器の蓋である。復元口径35.5cmと大型で、笠形状を呈するものと思われる。用途については定かでない。

501～505は土師器の鉢である。そのうち501～504は全体的に丸みを持つものである。丸底ないしは小さな平底の底部で、口縁の立ち上りが内弯しつつ外上方にのびる。端部を軽く外側へつまみ出した後内側へ曲げ込んでいる。

505は丸底の底部で、体部は外上方へまっすぐのびる。口縁の立ち上りが短く、内傾する。

506, 507は土師器の羽釜である。直立ないしはわずかに内傾する体部で、上端付近に鐙が付くものである。

508～511は土師器の鍋である。半球形に近い体部で、口縁の立ち上りが低く、短く外上方にのびる。復元口径35cm以上の大型のものである。

512, 513は土師器の高杯である。そのうち512は杯部の口縁部のみの破片である。大きく外上方に開く浅い杯部で、内面に暗文が施されている。脚部は欠損しているが、多面体に面取りした脚部と思われる。

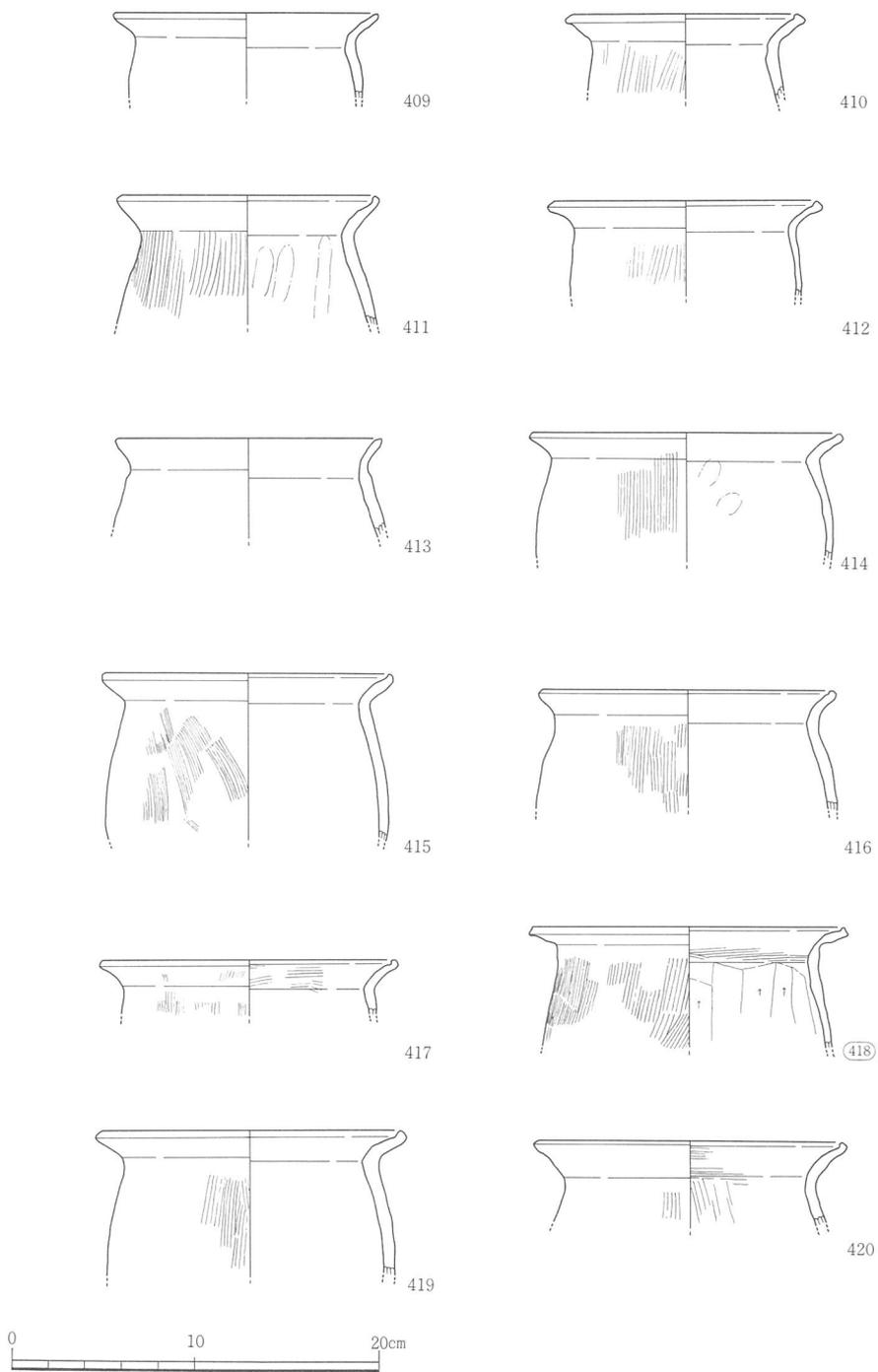
513は脚部のみの破片である。杯部は欠損しているが、口縁が内弯する杯部と思われる。脚部はラッパ状に開き、面取りはみられない。

514は土師器の壺である。底部は尖底に近い丸底で、体部下半が内弯しつつ外上方にのび、体部上半は直立して終る。

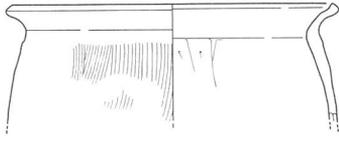
515～536は製塩土器である。いわゆる砲弾形を呈するもので、体部から口縁部にかけての立ち上りがほぼまっすぐ上方へのび、口縁部のふくらみが比較的小さいもの(515～519)と、体部がほぼまっすぐ上方へ立ち上り、口縁部は外反しつつラッパ状に開いて、口縁端部付近が肥厚するもの(520～534)がみられる。どちらも胎土に砂粒を多く含み、焼成も甘い。535, 536は底部の破片である。

537は砥石である。和泉砂岩製で、幅55.5cm、厚み24.5cm、残存長7.55cmを測った。

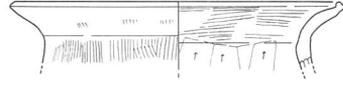
538は石製鏝の破片である。滑石製で、巡方の破片である。裏面に帯に取り付けるための2穴一対の孔がみられる。残存部では1ヶ所存在した。



第84図 1-O S 出土遺物(22)



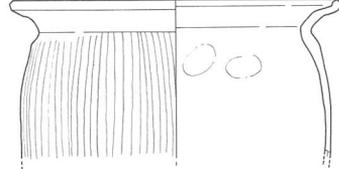
421



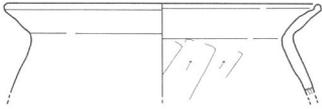
422



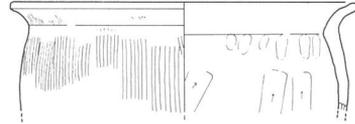
423



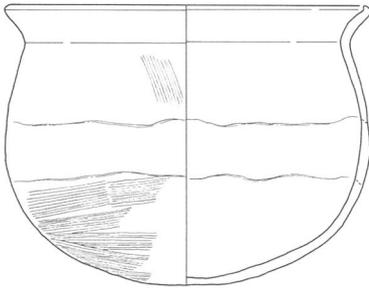
424



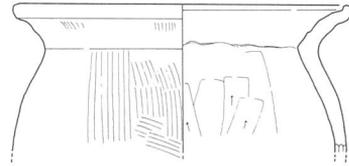
425



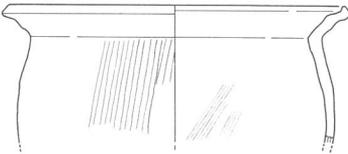
426



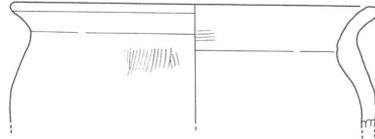
427



428



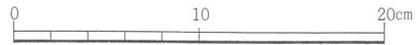
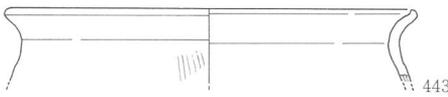
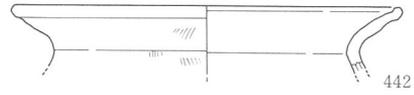
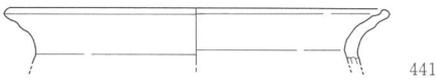
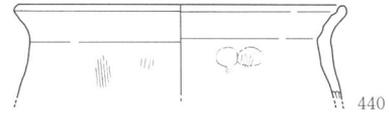
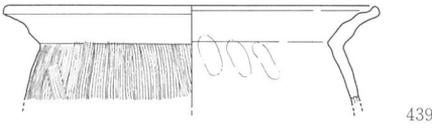
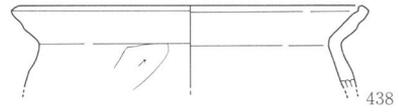
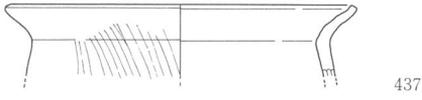
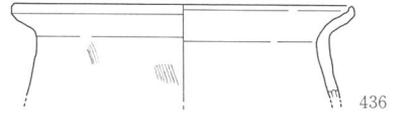
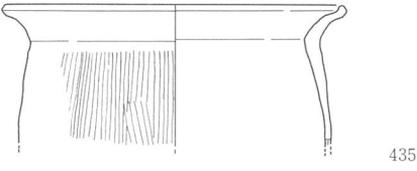
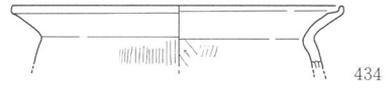
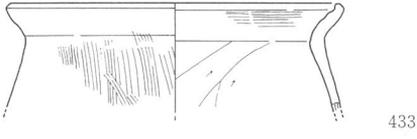
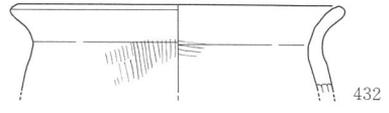
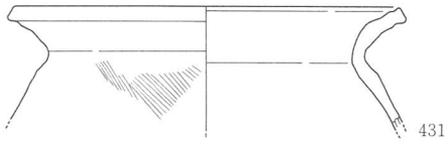
429



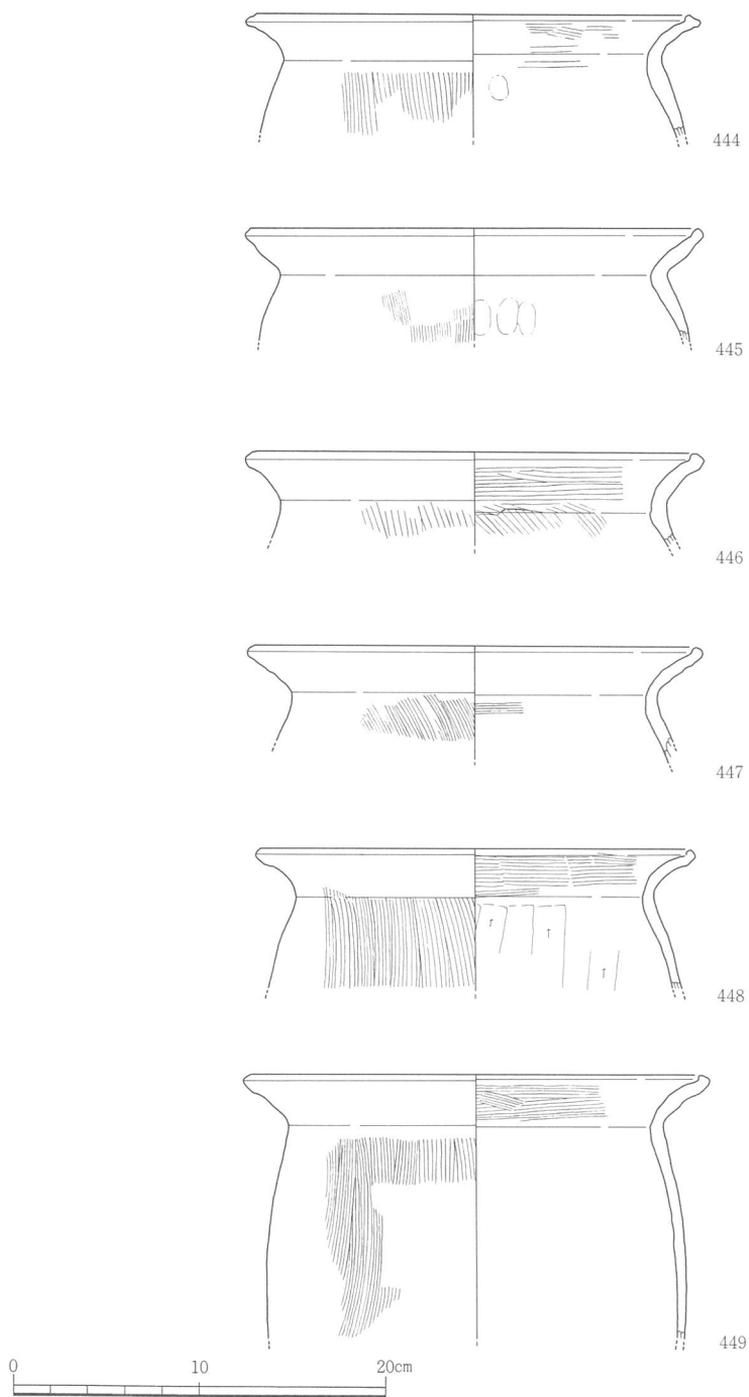
430



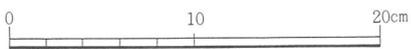
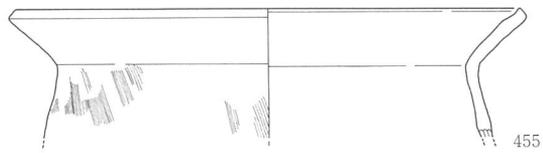
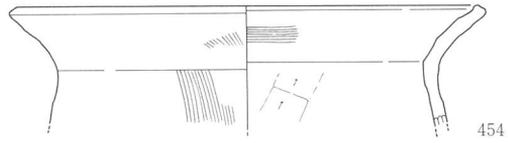
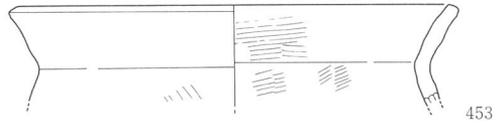
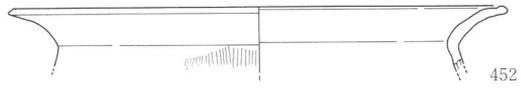
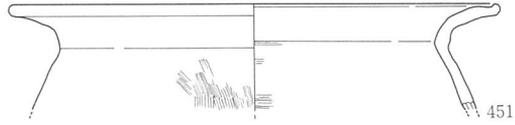
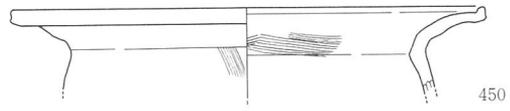
第85図 1-O S出土遺物(23)



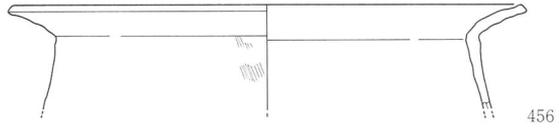
第86图 1-O S 出土遺物(24)



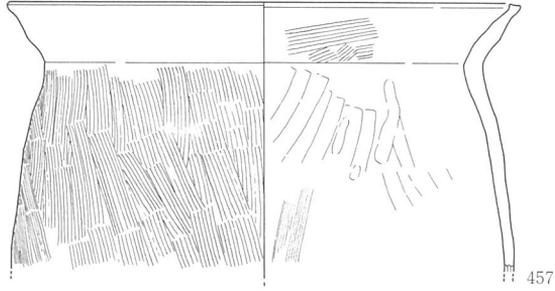
第87図 1-O S出土遺物(25)



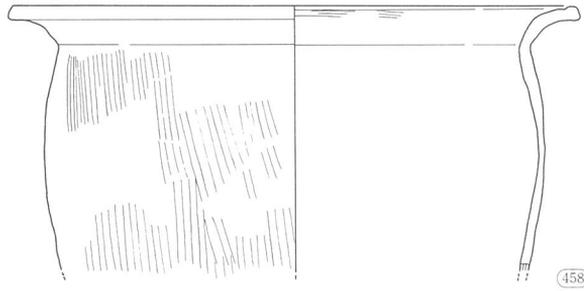
第88図 1-O S 出土遺物(26)



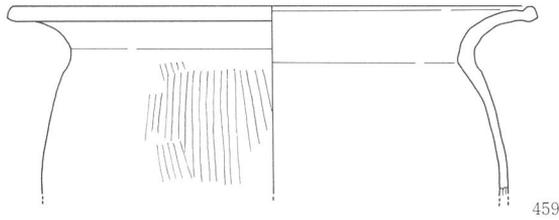
456



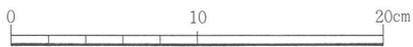
457



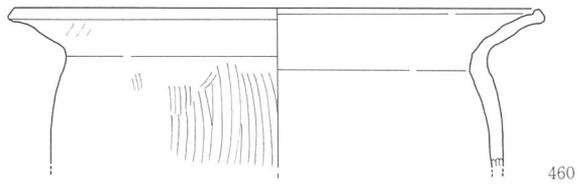
458



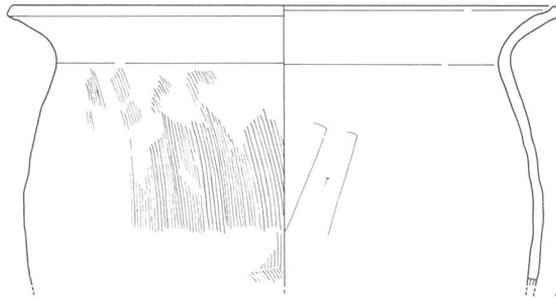
459



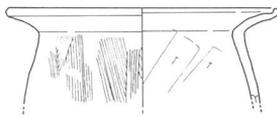
第89図 1-O S出土遺物(27)



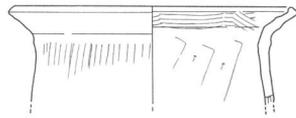
460



461



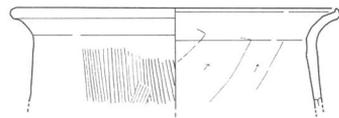
462



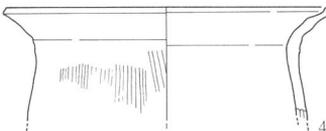
463



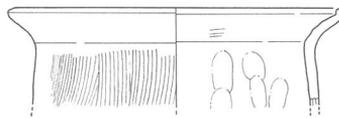
464



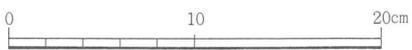
465



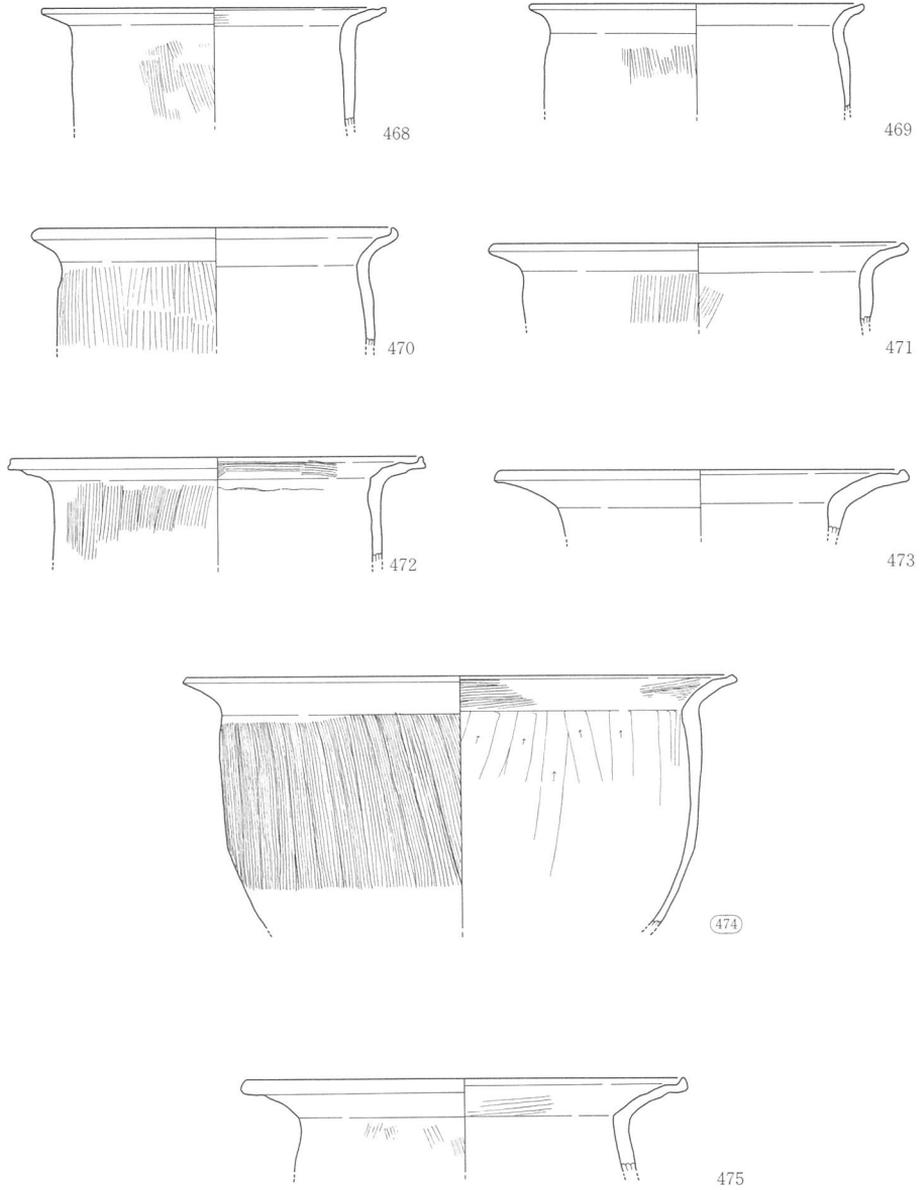
466



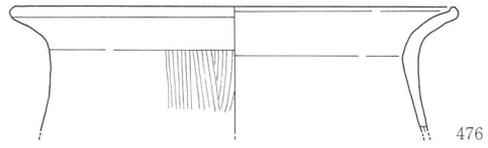
467



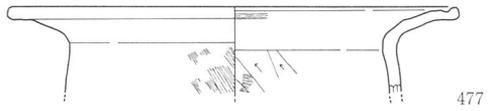
第90図 1-O S 出土遺物(28)



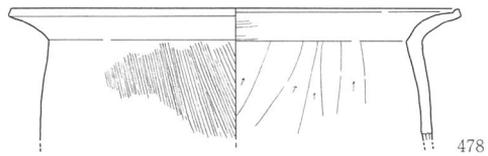
第91図 1-O S出土遺物(29)



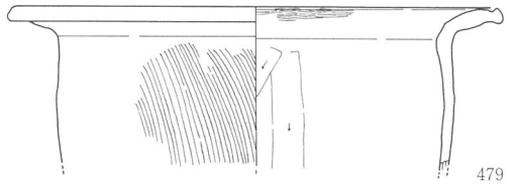
476



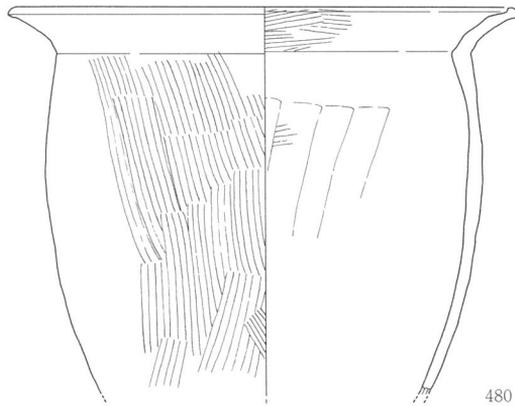
477



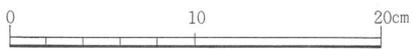
478



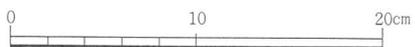
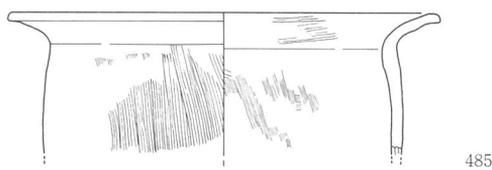
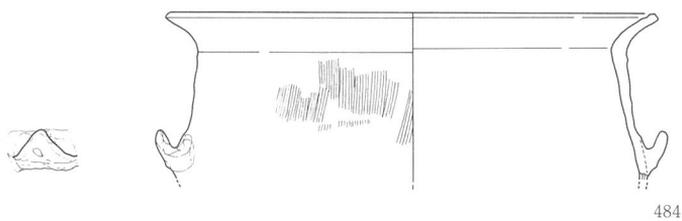
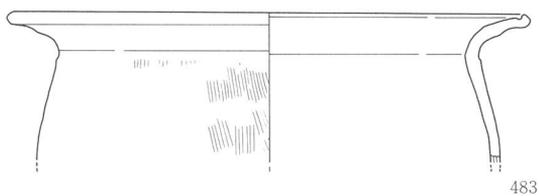
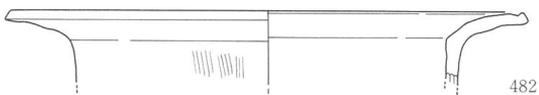
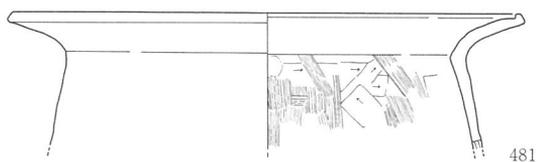
479



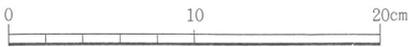
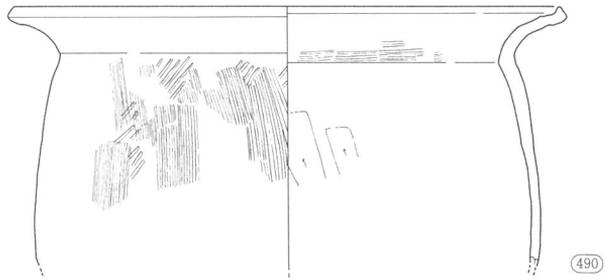
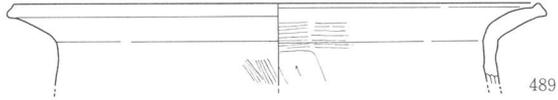
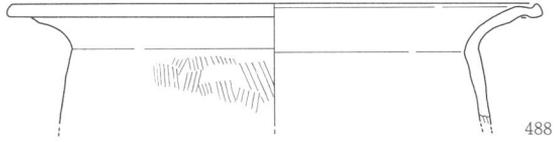
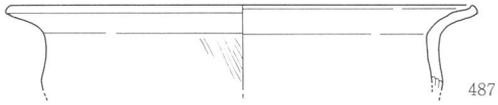
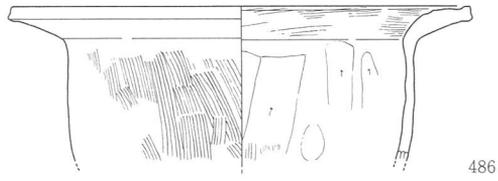
480



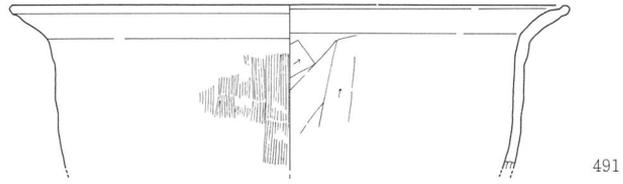
第92図 1-O S 出土遺物(30)



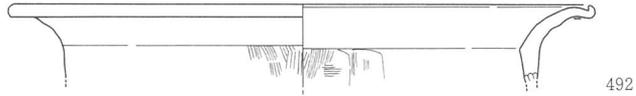
第93図 1-O S 出土遺物(31)



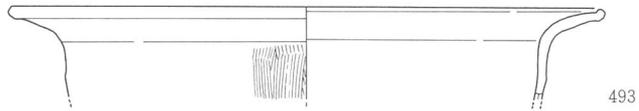
第94図 1-O S 出土遺物(32)



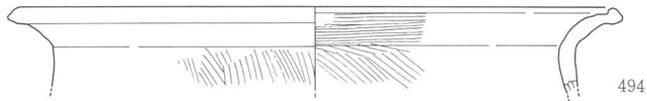
491



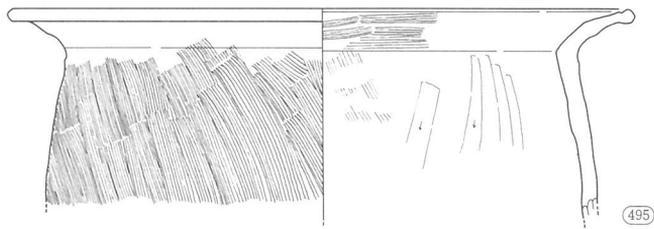
492



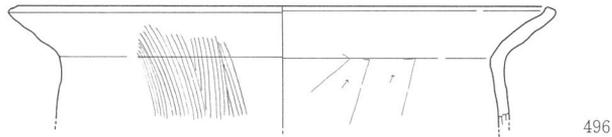
493



494



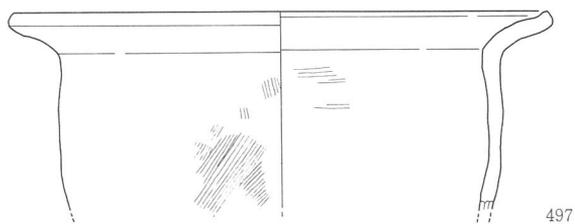
495



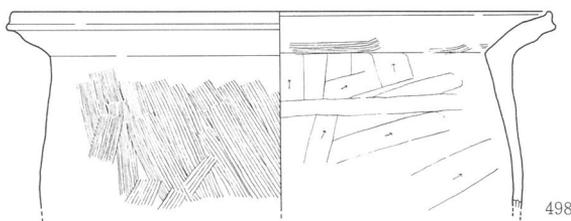
496



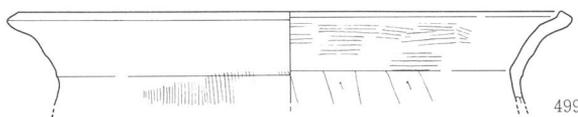
第95図 1-O S 出土遺物(33)



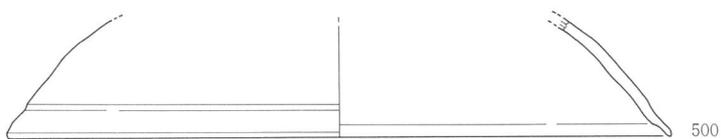
497



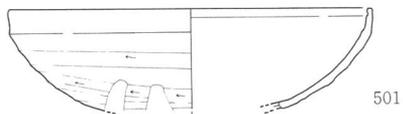
498



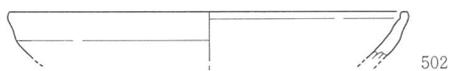
499



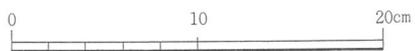
500



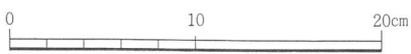
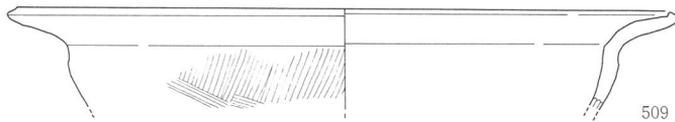
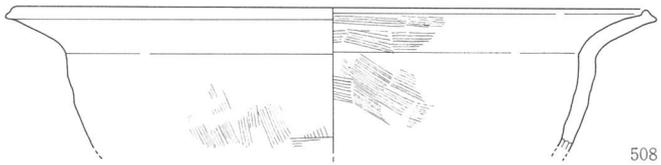
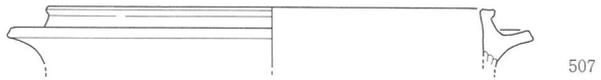
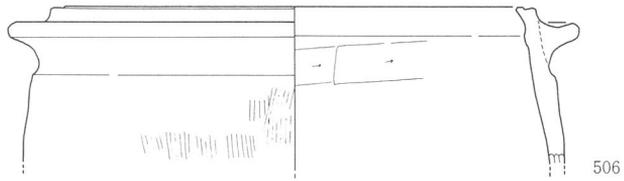
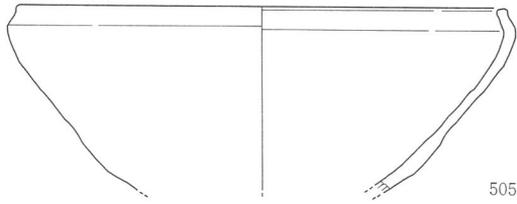
501



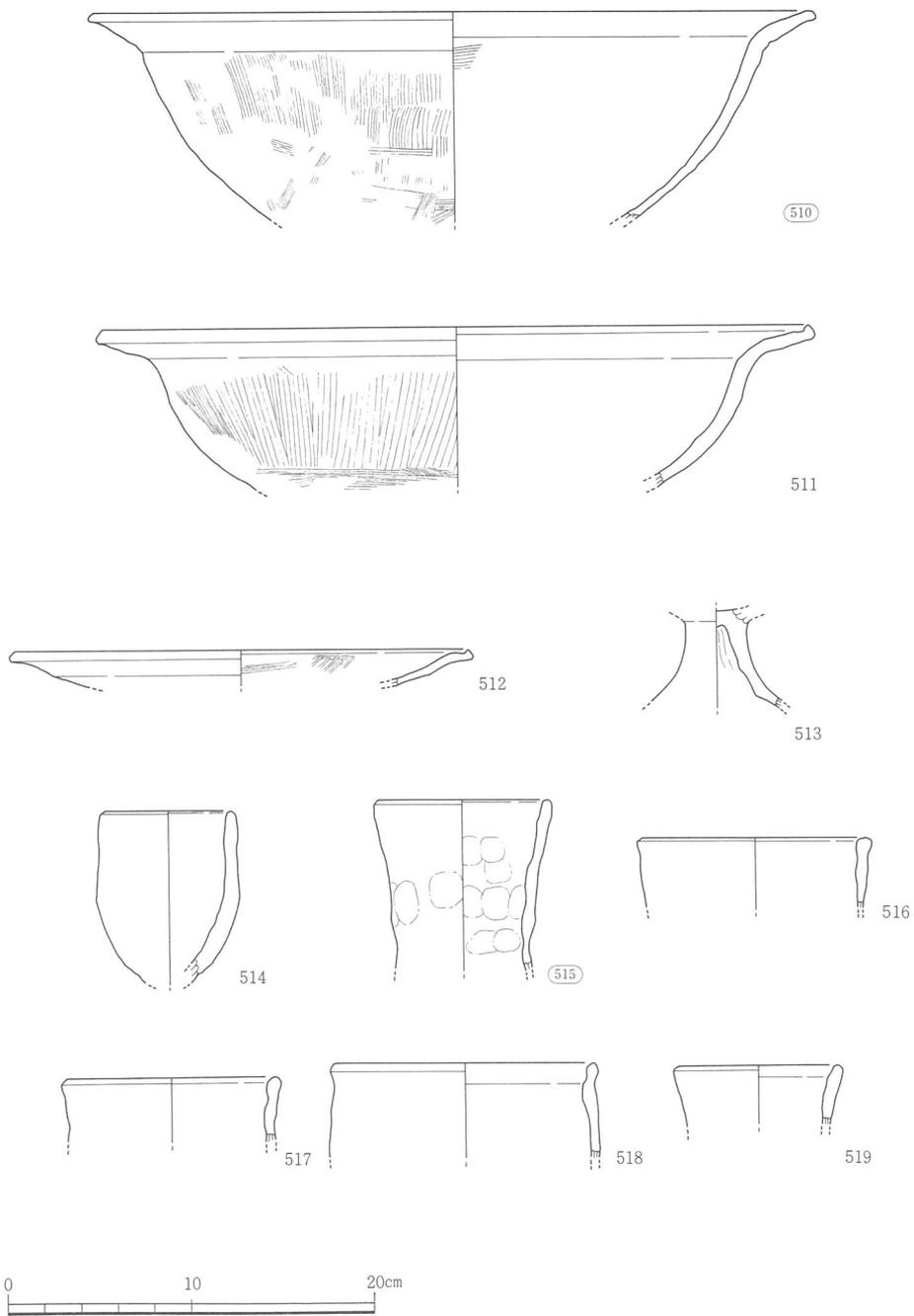
502



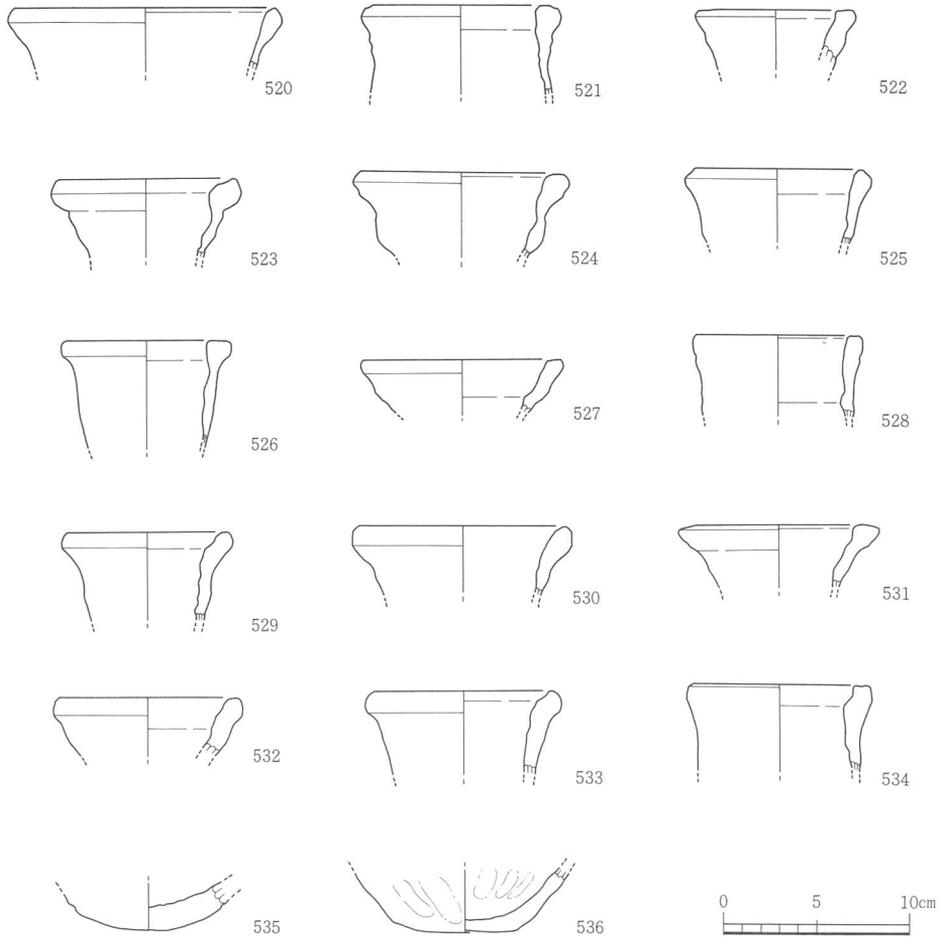
第96図 1-O S 出土遺物(34)



第97図 1-O S出土遺物(35)



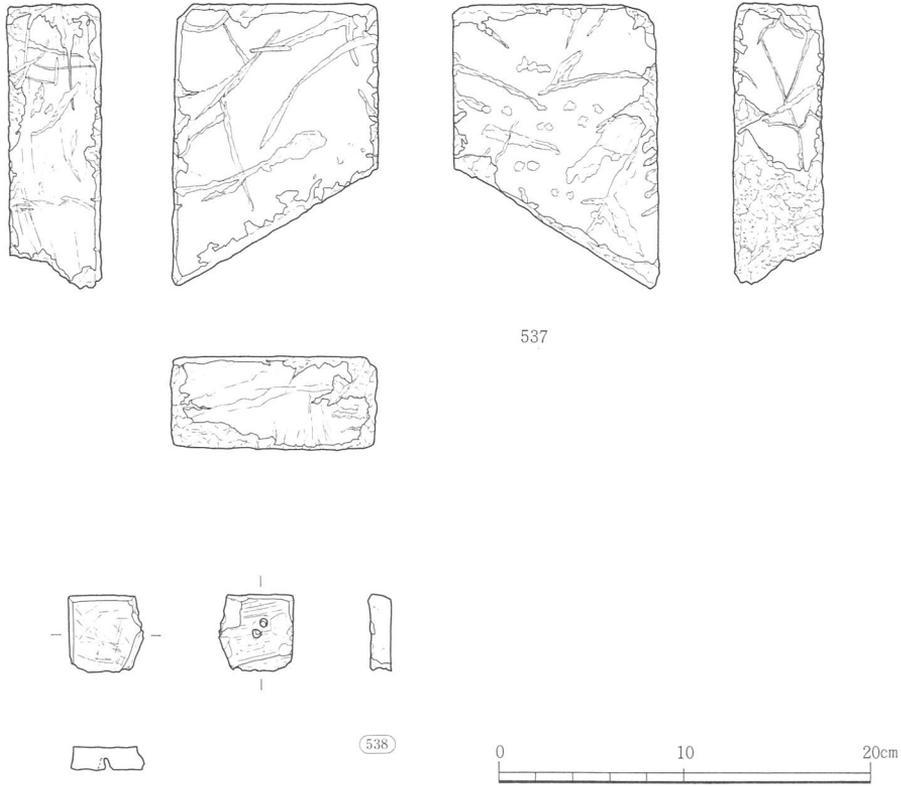
第98図 1-O S 出土遺物(36)



第99図 1-O S出土遺物(37)

3-O S (第101図)

第2地区の中央部やや北寄りの、J08BL・CL・BM・CM・BN・CN・BO・BPにまたがる地区で検出した溝である。東西方向に走り、西端部は他の溝と合流する形で切れているが、東側は調査区東壁外へのびている。検出長は約18mで、幅0.85m~2.4m、深さ0.1mを測った。逆台形状の断面を呈する。埋土は1層で、5YR3/1黒褐色土である。内部から須恵器・土師器・製塩土器が比較的まとまった量出土した。



第100図 1-O S 出土遺物(38)

3-O S 出土遺物 (第102図539~553)

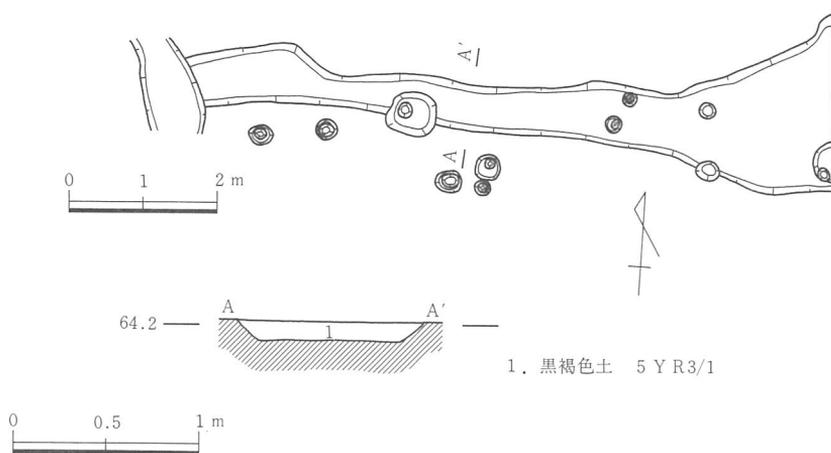
3-O Sからは須恵器・土師器・製塩土器などが比較的まとまった量出土した。そのうち図示し得たのは15点である。

539~542は須恵器の杯蓋である。そのうち539, 540は頂部中央付近のみの破片で、擬宝珠つまみを付すものである。

541, 542は頂部周縁及び縁部の破片である。平らな頂部と屈曲する縁部からなるものである。

543は須恵器で、杯の破片と思われる。口縁部だけの小片で、全体の形状などは不明である。端部を軽く外側につまみ出している。

544, 545は土師器の皿である。平底で、口縁の立ち上りが内弯気味に外上方へのびるもの(544)と、内弯しつつ外上方へのびた後わずかに外反して終るもの(545)とにわけら



第101図 3-O S平面図・断面図

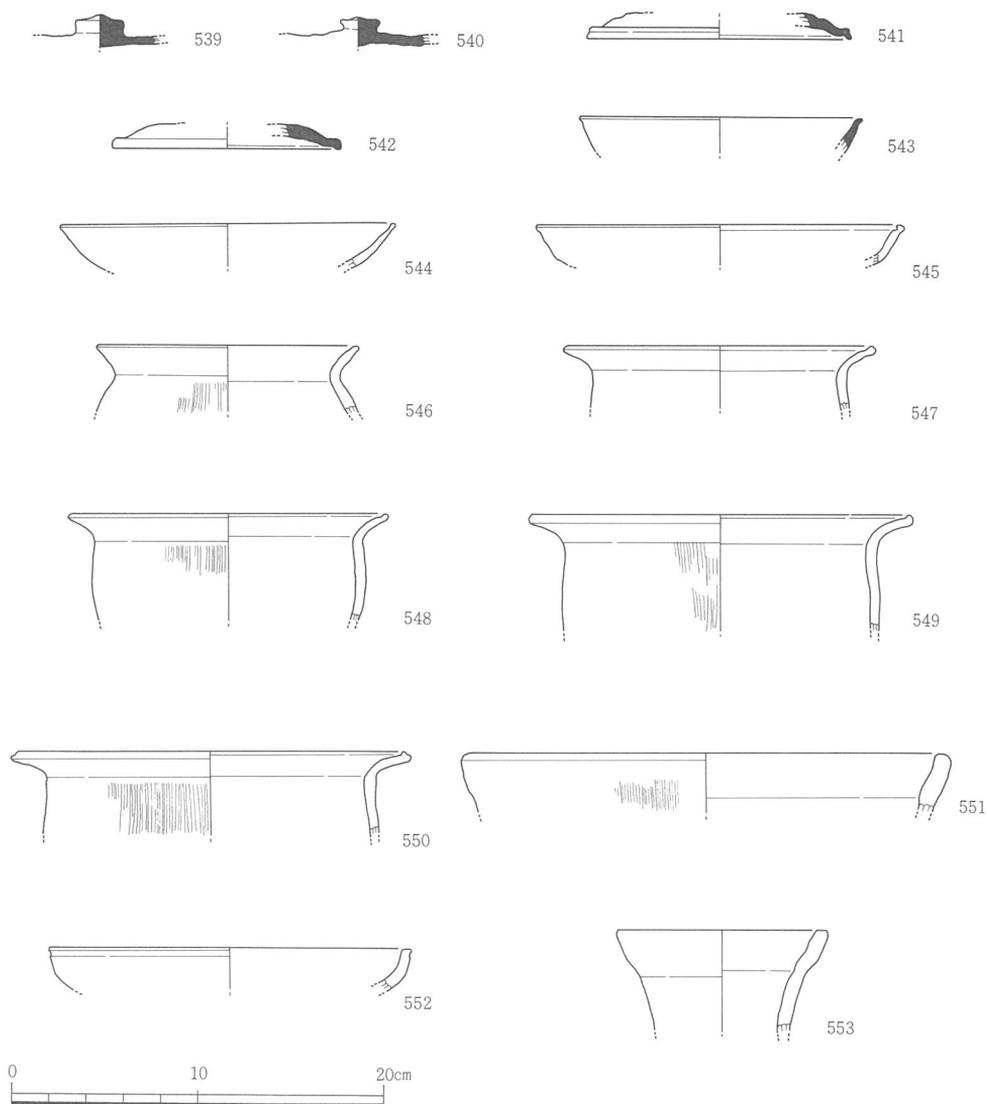
れる。

546～551は土師器の甕である。そのうち546～550は球形に近い体部で、口縁の立ち上りが低く、短く外反する。

551は外上方に短く立ち上る口縁部である。体部は欠損しており明確ではないが、ずんどうに近く、わずかに外に広がる体部と思われる。

552は土師器の鉢である。口縁部のみの小片のため、全体の形状などは明確でない。口縁の立ち上りが内弯しつつ上方へのび、端部は上側に面をなす。

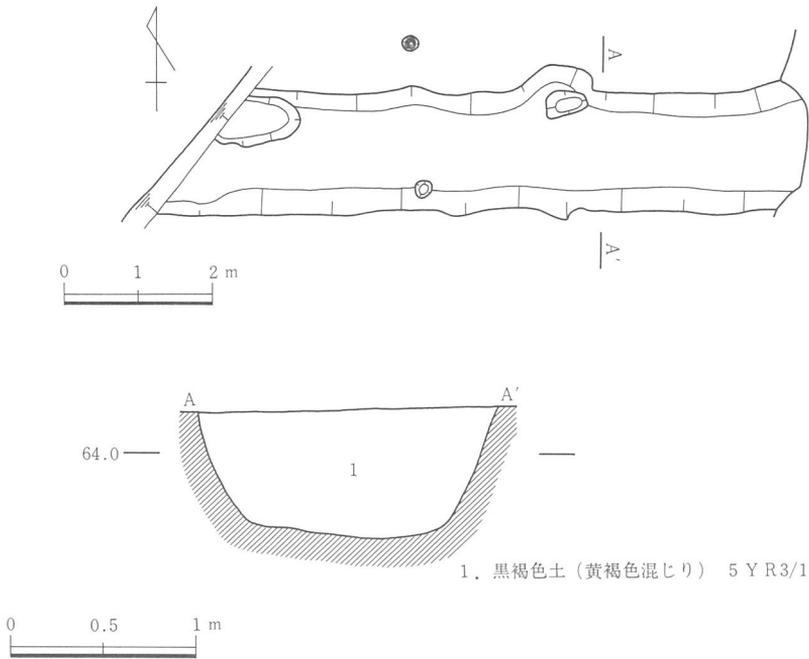
553は製塩土器である。体部上半と口縁部の破片である。体部はほぼまっすぐ上方へ立ち上り、口縁部が外反しつつラッパ状に開く。端部付近がやや肥厚する。



第102図 3-O S出土遺物

4-O S (第103図)

第2地区の南端部の、J 08MK・LL・ML・LN・MN・LOにまたがる地区で検出した溝である。東西方向に走る。東端部は中央付近で切れており、西側は調査区西壁外へのびている。検出長は14mで、幅1.6m、深さ0.65mを測った。埋土は1層で、5YR3/1黄褐色混じり黒褐色土である。1-O Sと交差しているが、埋土が似かよっており切り合いの有無は判別できなかった。内部から須恵器・土師器が少量出土したが、図示し得るも



第103図 4-OS平面図・断面図

のはなかった。

5-OS

第2地区の南東端部の、J08JO・JK・JP・KP・KQにまたがる地区で検出した溝である。東西方向に走り、その西端は調査区内で切れているが、東側は調査区東壁外へのびている。検出長は7mで、幅0.5m～2.4m、深さ0.1mを測った。埋土は1層で、5YR3/1黒褐色土である。内部から須恵器・土師器がごく少量出土したが、図示し得るものはなかった。

6-OS (第104図)

第2地区の中央部東端の、J08CP・DPにまたがる地区で検出した溝である。南北方向に走り、全長4mで、幅0.2m～0.7m、深さ0.08mを測った。埋土は1層で、5YR3/1黒褐色土である。5-OBの柱穴と切り合い関係にあり、6-OSが古い。内部から須恵器・土師器が少量出土したが、図示し得るものはなかった。

4. ピット

第2地区では、200を超えるピットが検出されているが、そのうち掘立柱建物を構成する柱穴以外で奈良時代に比定されるものが16ヵ所確認できた。

15-O P (第105図)

第2地区の中央部東端の、J 08C Pで検出したピットである。円形状を呈し、径0.16m、深さ0.16mを測った。柱痕は確認できなかった。内部から須恵器・土師器がごく少量出土した。

15-O P 出土遺物 (第106図563)

15-O Pからは須恵器・土師器がごく少量出土した。そのうち図示し得たのは1点である。

563は須恵器で、杯の破片である。

16-O P (第105図)

第2地区の南半部の、J 08HMで検出したピットである。楕円形状を呈し、長径0.7m、短径0.48m、深さ0.1mを測った。柱痕は円形で径0.2mを測った。内部から土師器がごく少量出土したが、図示し得るものはなかった。

17-O P (第105図)

第2地区の中央部西端の、J 08HLで検出したピットである。不整楕円形状を呈し、長径0.51m、短径0.42m、深さ0.24mを測った。柱痕は円形で径0.2mを測った。内部から土師器がごく少量出土した。

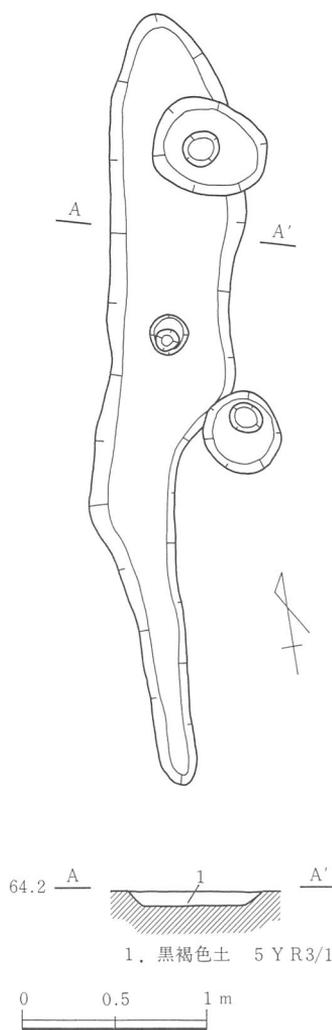
17-O P 出土遺物 (第106図568)

17-O Pからは土師器がごく少量出土した。そのうち図示し得たのは1点である。

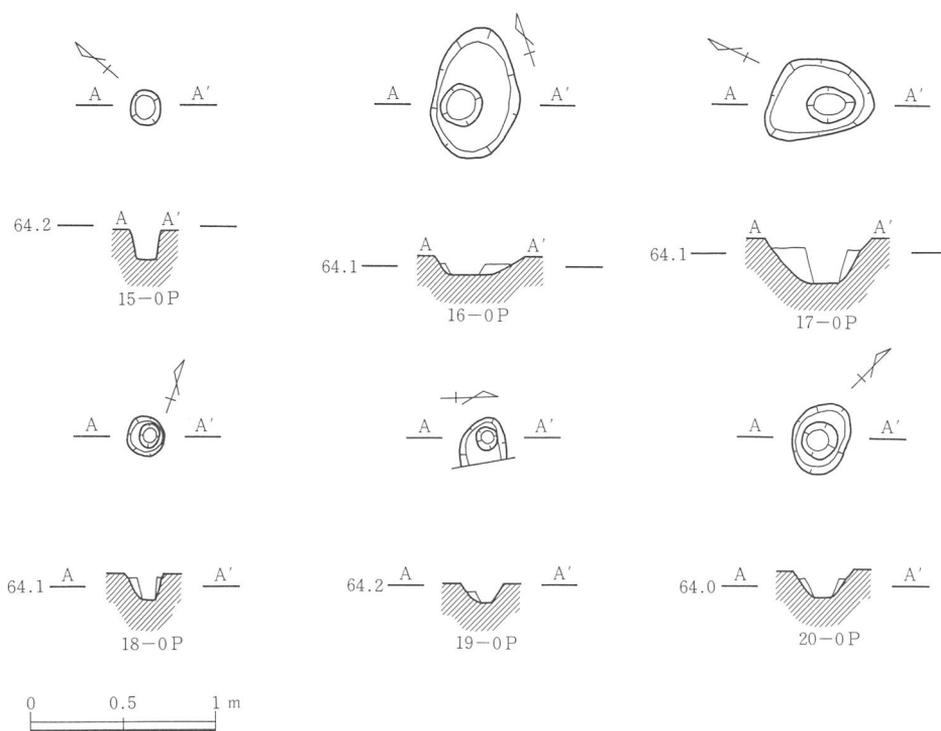
568は土師器の甕である。体部下半は欠損しているが、球形に近い体部と思われる。口縁の立ち上りが外反する。

18-O P (第105図)

第2地区の中央部西端の、J 08HLで検出したピットである。円形状を呈し、径0.21m、



第104図 6-O S平面図・断面図



第105図 第2地区奈良時代ピット平面図・断面図

深さ0.14mを測った。柱痕は円形で径0.1mを測った。内部から土師器がごく少量出土した。

18-0P 出土遺物 (第107図581)

18-0Pからは土師器がごく少量出土した。そのうち図示し得たのは1点である。

581は土師器の甕で、口縁部みの破片である。口縁端部に面をなす。

19-0P (第105図)

第2地区の南半部の、J 08 I Pで検出したピットである。楕円形状を呈するが、現代の水路によって遺構の東半を削られており、全体の規模は不明である。深さ0.14mを測った。柱痕は円形で径0.1mを測った。内部から土師器がごく少量出土した。

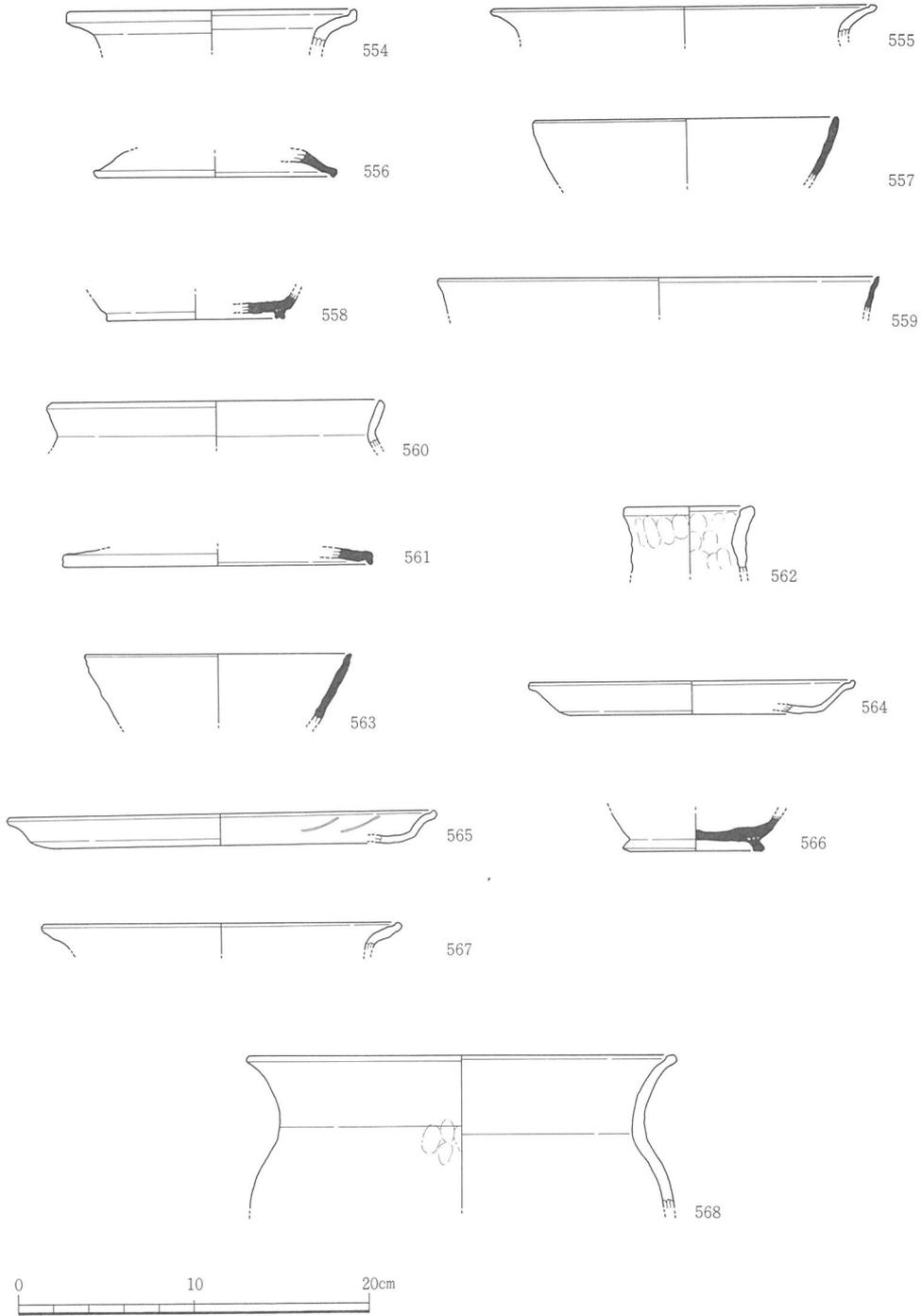
19-0P 出土遺物 (第107図579)

19-0Pからは土師器がごく少量出土した。そのうち図示し得たのは1点である。

579は土師器の甕で、口縁端部付近のみの小片である。外面に面をなす。

20-0P (第105図)

第2地区の南半部の、J 08 J Oで検出したピットである。円形状を呈し、径0.31m、深



第106図 第2地区奈良時代ピット出土遺物(1)

さ0.14mを測った。柱痕は円形で、径0.2mを測った。内部から須恵器・土師器がごく少量出土したが、図示し得るものはなかった。

21-OP

第2地区の東北端部の、J03UPで検出したピットである。円形状を呈し、径0.25m、深さ0.18mを測った。内部から土師器がごく少量出土した。

21-OP 出土遺物 (第106図554)

21-OPからは土師器がごく少量出土した。そのうち図示し得たのは1点である。

554は土師器の甕で、口縁部のみの破片である。端部外面に面をなす。

22-OP

第2地区の北端部の、J03VM・VNにまたがる地区で検出したピットである。円形状を呈し、径0.5m、深さ0.2mを測った。内部から土師器がごく少量出土した。

22-OP 出土遺物 (第106図555)

22-OPからは土師器がごく少量出土した。そのうち図示し得たのは1点である。

555は土師器の甕で、口縁部のみの破片である。低く短く外反する口縁部で、端部を内側に曲げ込んでいる。

23-OP

第2地区の中央部東端の、J08BPで検出したピットである。円形状を呈し、径0.36m、深さ0.14mを測った。内部から須恵器・土師器がごく少量出土した。

23-OP 出土遺物 (第106図556～558)

23-OPからは須恵器・土師器がごく少量出土した。そのうち図示し得たのは3点である。

556は須恵器の杯蓋である。縁部付近のみの破片で、屈曲する縁部である。

557～559は須恵器の杯である。そのうち557、559は口縁部のみの破片であり、高台の有無は不明である。

558は底部のみの破片である。外面周縁付近に貼付高台を付す。

560は土師器の甕で、口縁部のみの破片である。

24-OP

第2地区の中央東寄りの、J08COで検出したピットである。円形状を呈し、径0.67m、深さ0.25mを測った。内部から土師器が少量出土した。

24-O P 出土遺物 (第106図564, 565)

24-O Pからは土師器が少量出土した。そのうち図示し得たのは2点である。

564, 565は土師器の皿である。平底の底部で、口縁の立ち上りが内弯しつつ外上方へ低く立ち上り、その後外反する。端部は外側へつまみ出した後内側へ曲げ込んでいる。565には内面に斜状暗文がみられる。

26-O P

第2地区の中央部東端の、J 08DPで検出したピットである。円形状を呈し、径0.6m、深さ0.21mを測った。内部から須恵器・土師器・製塩土器がごく少量出土した。

26-O P 出土遺物 (第107図569~571)

26-O Pからは須恵器・土師器・製塩土器などがごく少量出土した。そのうち図示し得たのは3点である。

569は須恵器の杯蓋で、縁部付近のみの小片である。屈曲する縁部である。

570は須恵器の壺蓋である。小型で平らな形状を呈している。

571は製塩土器で、口縁部のみの破片である。外反しつつラップ状に開く口縁部で、端部が肥厚する。

27-O P

第2地区の中央部やや西寄りの、J 08CMで検出したピットである。円形状を呈し、径0.35m、深さ0.18mを測った。内部から土師器がごく少量出土した。

27-O P 出土遺物 (第107図572)

27-O Pからは土師器がごく少量出土した。そのうち図示し得たのは1点である。

572は土師器の甕で、口縁部のみの破片である。外反しつつ外上方へのびる口縁部で、端部を内側へ曲げ込んでいる。

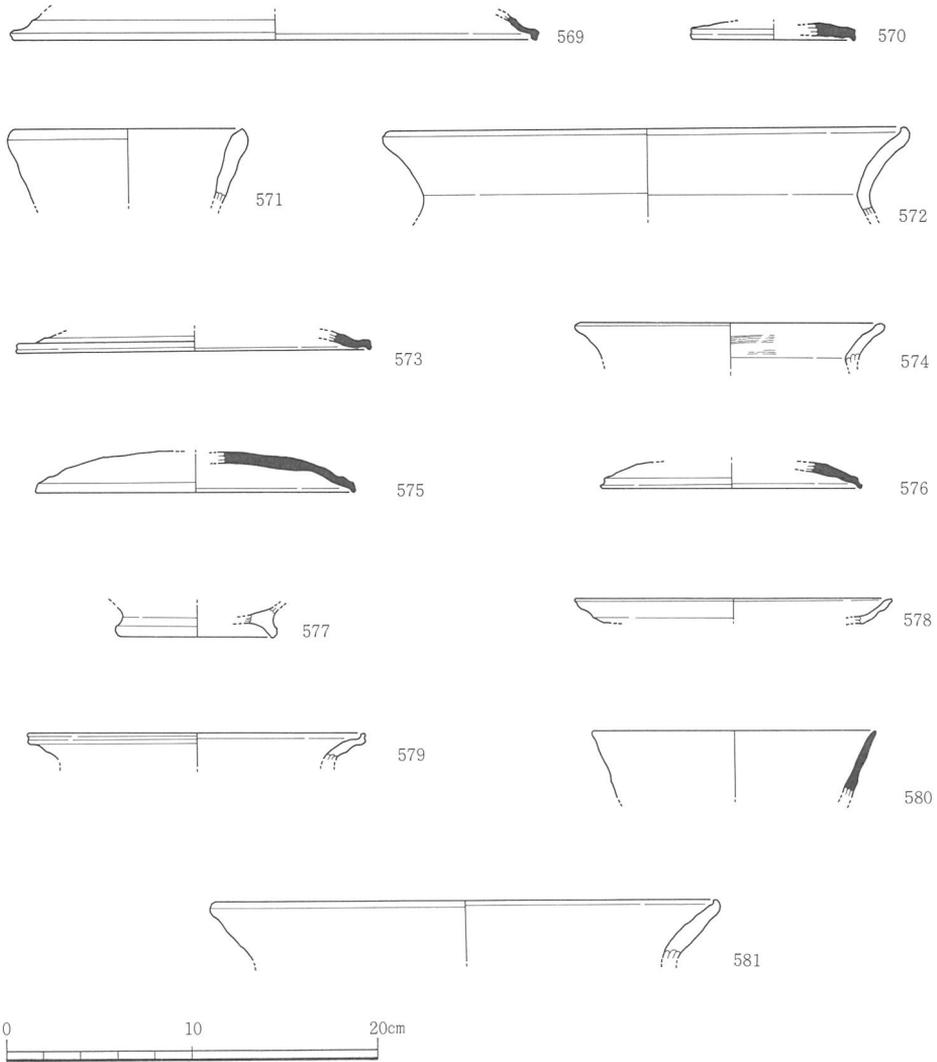
28-O P

第2地区の南半部東端の、J 08HQで検出したピットである。円形状を呈し、径0.29m、深さ0.24mを測った。内部から須恵器がごく少量出土した。

28-O P 出土遺物 (第107図573)

28-O Pからは須恵器がごく少量出土した。そのうち図示し得たのは1点である。

573は須恵器の杯蓋で、縁部付近の破片である。頂部は欠損しているが、平らな頂部と思われる。縁部は屈曲する。



第107図 第2地区奈良時代ピット出土遺物(2)

29-O P

第2地区の中央部やや西寄りの、J 08CLで検出したピットである。楕円形状を呈し、長径0.55m、短径0.45m、深さ0.2mを測った。内部から須恵器・土師器がごく少量出土した。

29-O P 出土遺物(第107図574)

29-O Pからは須恵器・土師器がごく少量出土した。そのうち図示し得たのは1点である。

574は土師器の甕で、口縁部のみの破片である。短く外反する口縁部で、端部を内側に曲げ込んでいる。

30-O P

第2地区の中央部の、J08DNで検出したピットである。円形状を呈し、径0.34m、深さ0.29mを測った。内部から須恵器・土師器がごく少量出土した。

30-O P 出土遺物 (第107図575~578)

30-O Pからは須恵器・土師器がごく少量出土した。そのうち図示し得たのは4点である。

575, 576は須恵器の杯蓋である。ともに頂部が丸く笠形状を呈し、縁部は屈曲せず、彎曲気味に端部に至るものである。

577は須恵器の壺で、底部周縁付近のみの小片である。外面に貼付高台を付す。

578は土師器の皿で、口縁部のみの小片である。口縁の立ち上りが低く、短く外上方へのびる。

31-O P

第2地区の南半部の、J08INで検出したピットである。円形状を呈し、径0.35m、深さ0.12mを測った。内部から須恵器がごく少量出土した。

31-O P 出土遺物 (第107図580)

31-O Pからは須恵器がごく少量出土した。そのうち図示し得たのは1点である。

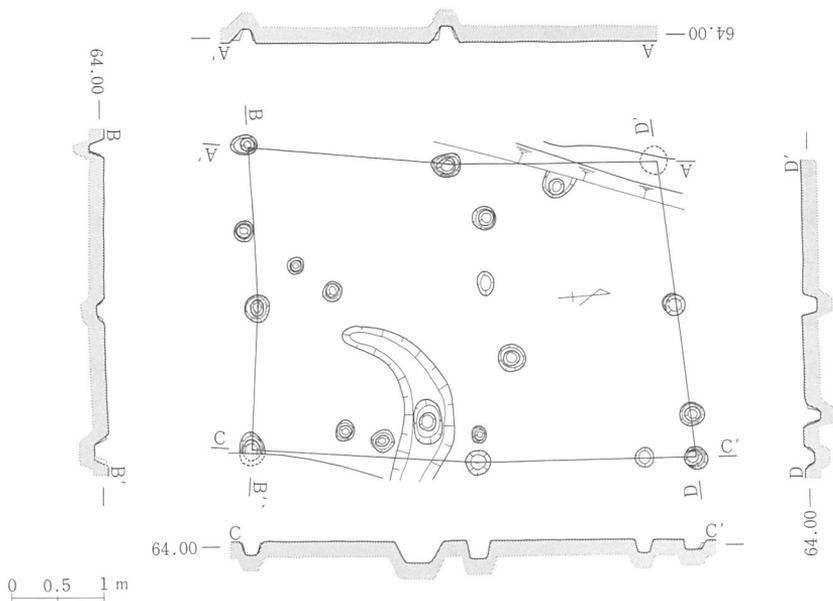
580は須恵器の杯で、口縁部のみの破片である。口縁の立ち上りがまっすぐ外上方へのびる。

第2項 平安時代

平安時代に比定される遺構としては掘立柱建物・柵列・井戸・土坑・溝・ピットなどがある。

1. 掘立柱建物

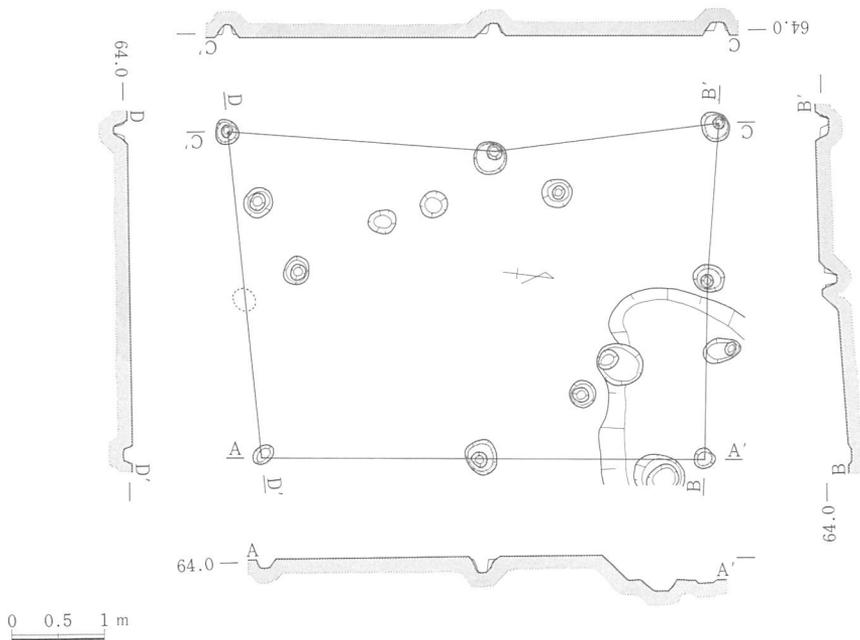
第2地区の平安時代の掘立柱建物は、すべて中央部より北側で検出されており、これらは第1地区南半部で検出された同時期の掘立柱建物と一連の遺構で、ひとつの集落を構成するものと考えられる。



第108図 9-OB平面図・断面図

9-OB (第108図)

第2地区の北東端部の、J03UO・UP・VO・VPにまたがる地区で検出された2間×2間の掘立柱建物である。主軸はN-8°-Wを示す。桁行間2間×梁間2間で、実数



第109図 10-OB平面図・断面図

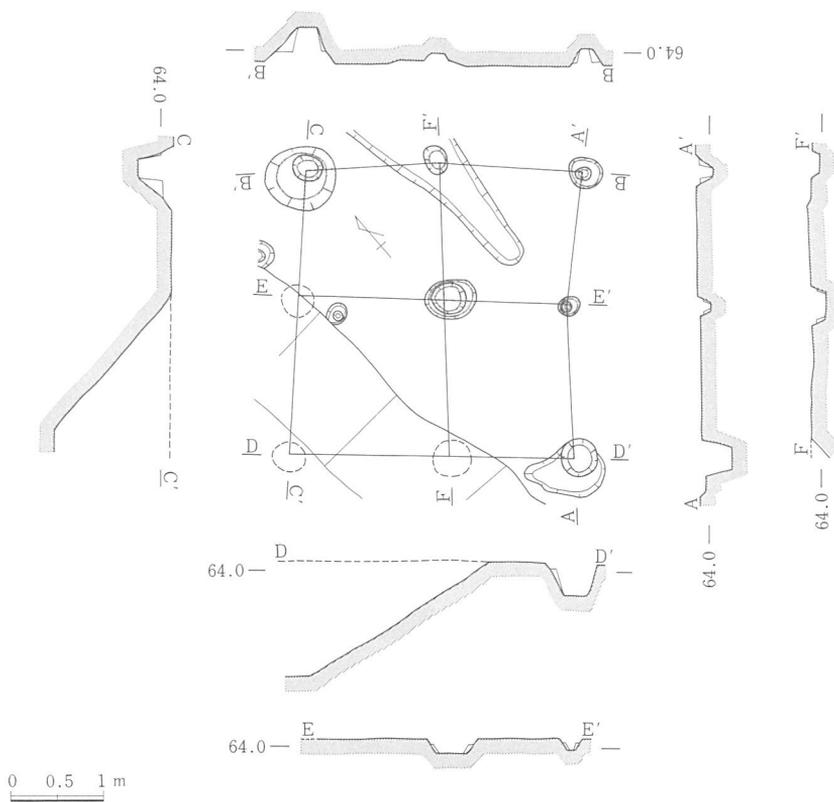
値は西桁行間4.5m（推定），東桁行間4.7m，北梁間3.1m（推定），南梁間3.3mを測った。柱穴は径0.2m～0.3mの円形ないしは楕円形状を呈する。柱穴内から須恵器・土師器・黒色土器などが少量出土したが，図示し得るものはなかった。

10-O B（第109図，図版14）

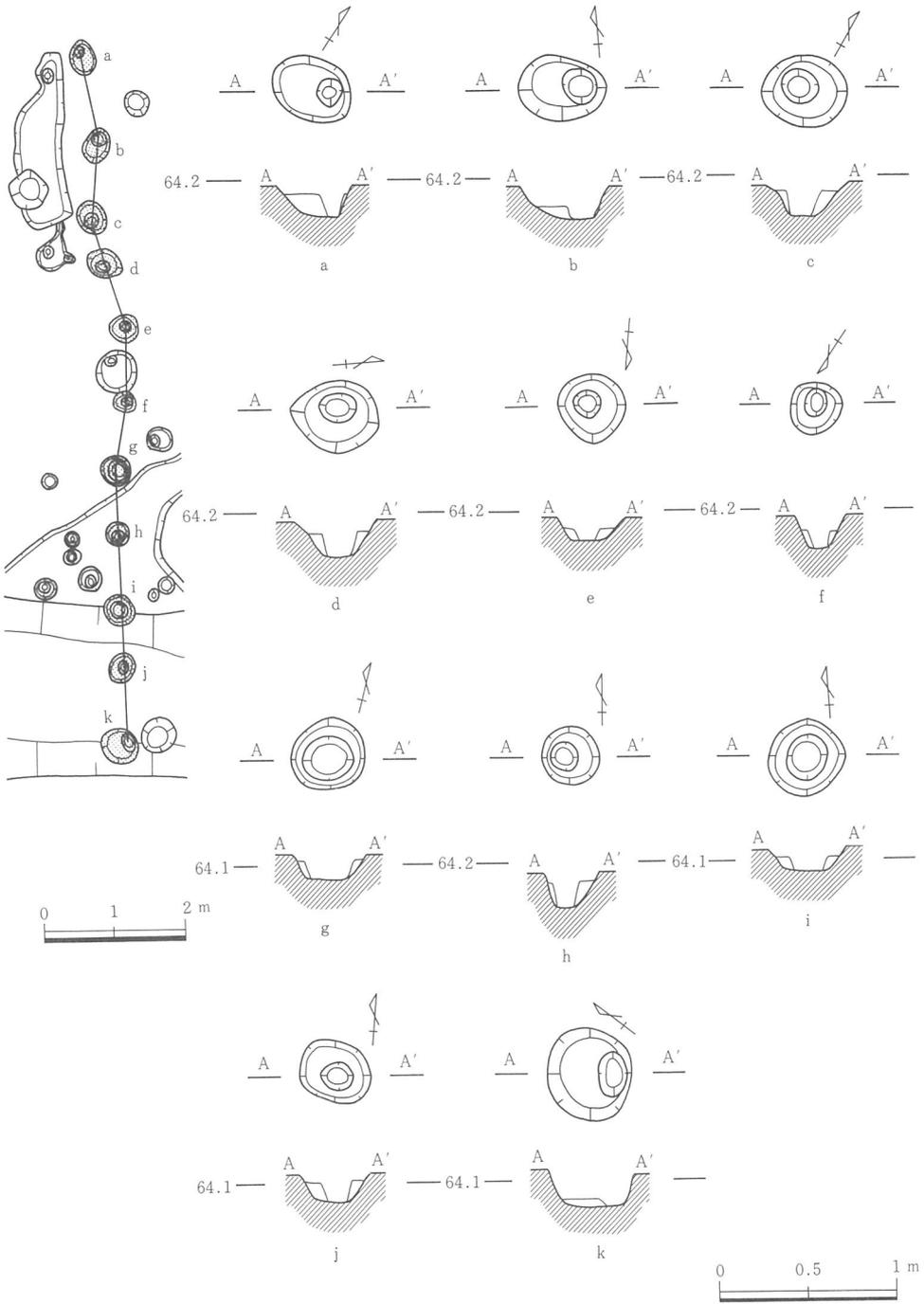
第2地区の北端部の，J 03VM・VN・WM・WNにまたがる地区で検出された2間×2間の掘立柱建物である。主軸はN-8°-Wを示す。桁行間2間×梁間2間で，実数値は西桁行間5.4m，東桁行間4.8m，北梁間3.6m，南梁間3.5mを測った。柱穴は径0.2m～0.3mの円形で，南梁部の中間の柱穴は確認できなかった。柱穴内から土師器・黒色土器などがごく少量出土したが，図示し得るものはなかった。

11-O B

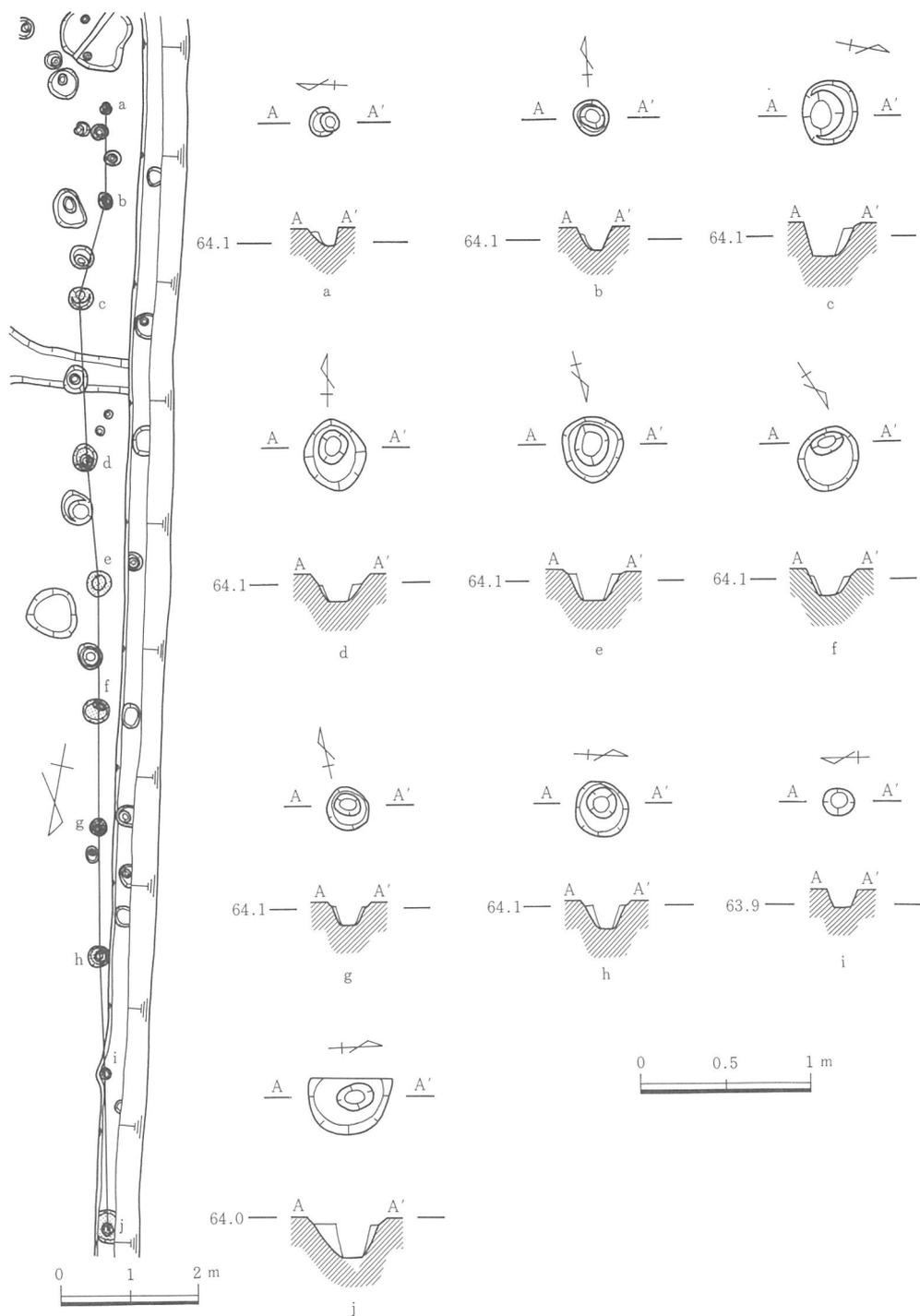
第2地区の北東半部の，J 03XN・XO・YN・YOにまたがる地区で検出した2間×3間の掘立柱建物である。主軸はほぼN-90°-Eを示す。桁行間3間×梁間2間で，実数値は北桁行間6.2m，南桁行間7m（推定），西梁間3.8m，東梁間3.6m（推定）を測っ



第110図 12-O B 平面図・断面図



第111图 1-O-F平面图·断面图



第112图 2-O F 平面图·断面图

た。後世の攪乱のために柱穴が4ヶ所欠損している。柱穴は径0.1m～0.4mの円形状を呈する。内部から土師器・黒色土器などがごく少量出土したが、図示し得るものはなかった。

12-OB (第110図, 図版14)

第2地区の中央部西端付近の, J08CK・CL・DLにまたがる地区で検出した2間×2間の掘立柱建物である。主軸はN-25°-Eを示す。桁行間2間×梁間2間で、平面プランの中央付近に東柱を持つ、いわゆる総柱の掘立柱建物である。棟持柱のうち3ヶ所は切り合って検出された1-OSと埋土が類似していたため確認できなかった。したがって、図上では12-OBが1-OSに切られているようになっているが、実際は1-OSが埋った後に12-OBが構築されている。四辺の柱間の実数値は、2.9m, 3.1m, 3.3m(推定), 3.2m(推定)となる。柱穴は径0.2m～0.6mの円形状を呈する。内部から土師器・黒色土器などがごく少量出土したが、図示し得るものはなかった。

2. 柵列

第2地区では、平安時代に比定される柵列が2ヶ所検出された。

1-OF (第111図, 図版15)

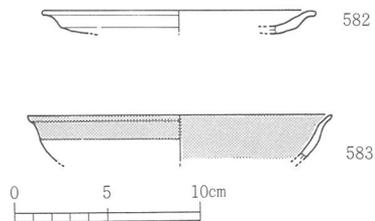
第2地区の北半部の, J08BK・BL・BMにまたがる地区で検出した柵列である。方位は概ねN-75°-Eを示す。柵列の東端は調査区の中央付近で途切れているが、西側は調査区西壁外へのびている。検出長は10間で約10mを測った。掘方は径0.3m～0.5mの円形状を呈する。0.8m～1.2m間隔で柵が立てられている。掘方内から土師器・黒色土器などが少量出土したが、図示し得るものはなかった。

2-OF (第112図)

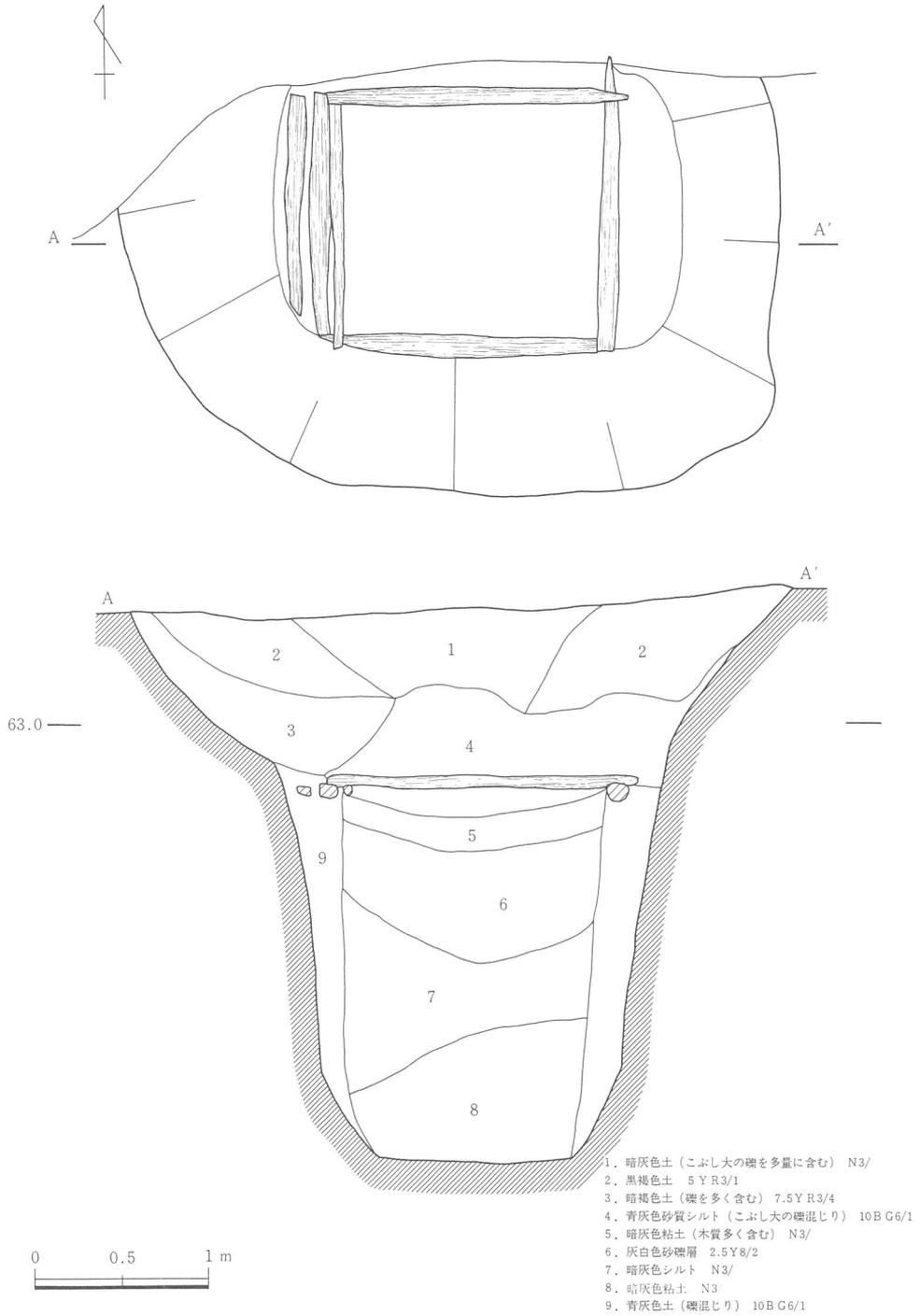
第2地区の南半部西端の, J08EK・FK・GK・GL・HLにまたがる地区で検出した柵列である。方位は概ねN-11°-Wを示す。柵列の南端は途切れているが、北側は調査区西壁外へのびている。検出長は10間で、約16.6mを測った。掘方は径0.2m～0.4mの円形状を呈する。1.2m～2m間隔で柵が立てられている。各掘方内から土師器・黒色土器などが少量出土した。

2-OF 出土遺物 (第113図582, 583)

柵列2-OFを構成するピットからは土師器・黒色土器などが少量出土した。そのうち図示し得たのは2点である。



第113図 2-OF 出土遺物



第114図 1-OW平面図・断面図

582は土師器の皿で、口縁部のみの破片である。口縁の立ち上りがごく低く、短く外反する。

583は黒色土器A類で、碗の破片と思われる。底部は欠損しているが、貼付高台を付すものと思われる。口縁の立ち上りが比較的低位に内湾しつつ上方にのび、その後短く外反して終る。

3. 井戸

第2地区では、平安時代に比定される井戸が1基検出された。

1-OW (第114図, 図版15, 16)

第2地区の北端部の、J03VLで検出した井戸である。平面プランのうち北端部は調査区外にのびており、全体の規模は明確でないが、東西3.8m、南北2.5m以上の隅丸形状の掘方で、深さは3.2mを測った。ベース面から約1mの地点で約2m四方の広さまで狭まり、そこから井戸底まではほぼ垂直に掘り込んでいる。いわゆるラッパ状の断面を呈する。丸太を四角に組んだ井戸枠があったと思われるが、井戸を埋めた際に破壊されたようで、最下段のみ残っていた。井戸内の埋土は9層に分層でき、上よりN3/暗灰色土（こぶしの礫を多量に含む）、5YR3/1黒褐色土、7.5YR3/4暗褐色土（礫を多く含む）、10BG6/1青灰色砂質シルト（こぶし大の礫を含む）、N3/暗灰色粘土、2.5Y8/2灰白色砂礫層、N3/暗灰色シルト、N3/暗灰色粘土、10BG6/1青灰色土（礫を含む）となっている。これらの埋土内からは、須恵器・土師器・黒色土器・木製品などが比較的まとまった量出土した。

1-OW出土遺物 (第115図584～第117図617)

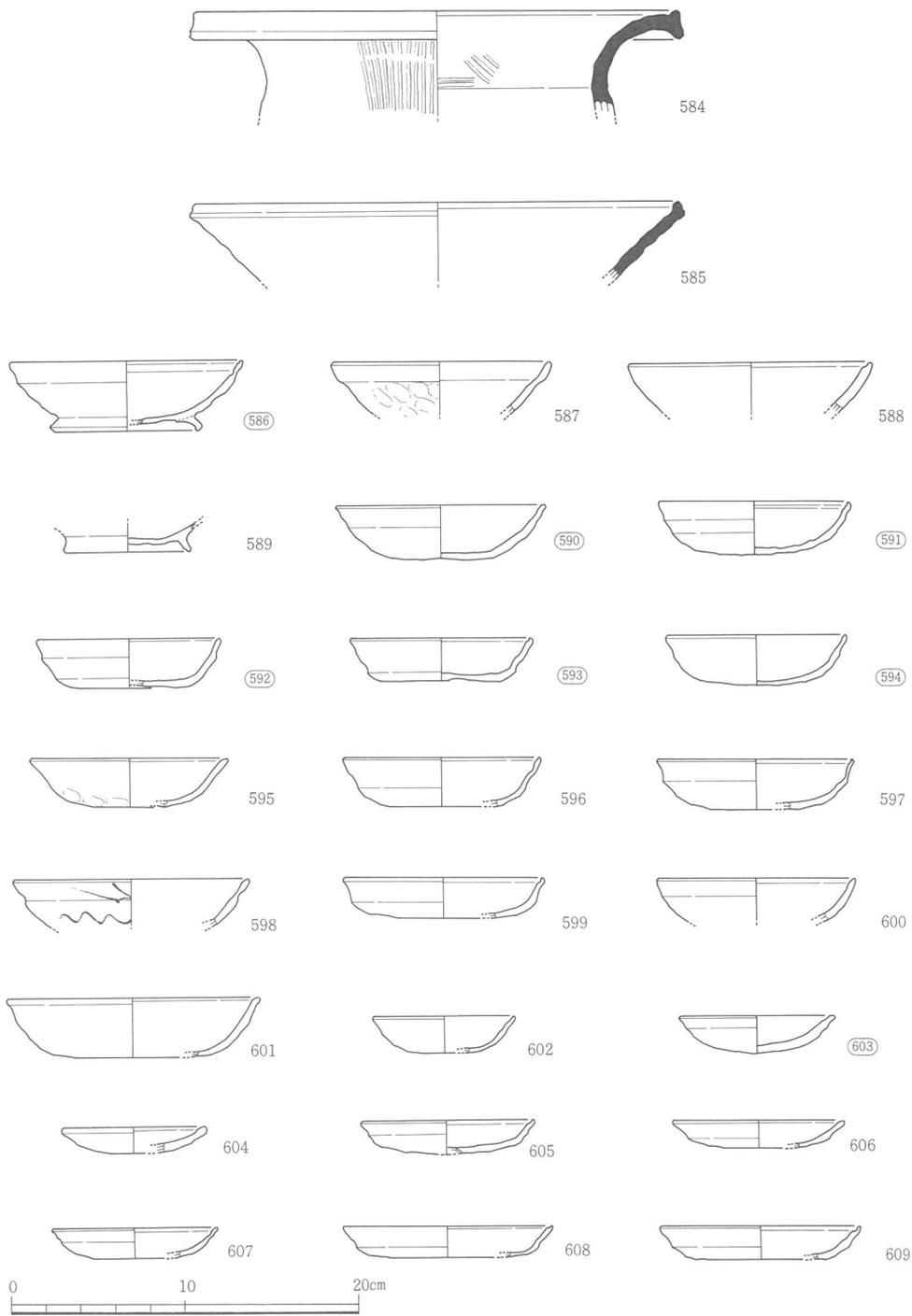
1-OWからは須恵器・土師器・黒色土器・木製品などが比較的まとまった量出土した。そのうち図示し得たのは34点である。

584は須恵器の甕である。口縁部のみの破片で、口縁の立ち上りが大きく外反する。端部が上下に肥厚する。

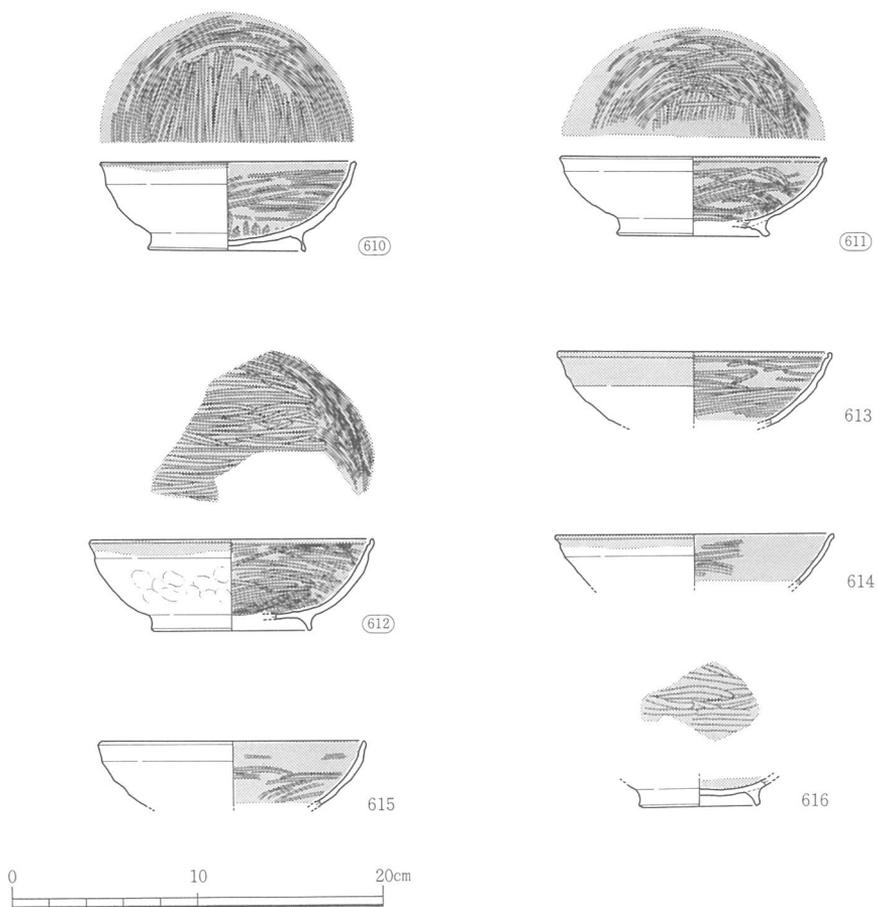
585は須恵器の鉢で、口縁部のみの破片である。口縁の立ち上りがまっすぐ外上方にのび、端部外面に面をなす。

586～589は土師器の碗である。そのうち全体の形状が確認できるのは586のみで、他は口縁部ないしは底部の破片である。

586は全体的に丸みを持つ形状を呈するもので、小さな底部から、口縁部が内湾しつつ外上方へ立ち上る。端部は丸くおさめている。底部外面周縁付近に比較的高い肉薄の貼付



第115図 1 - OW出土遺物(1)



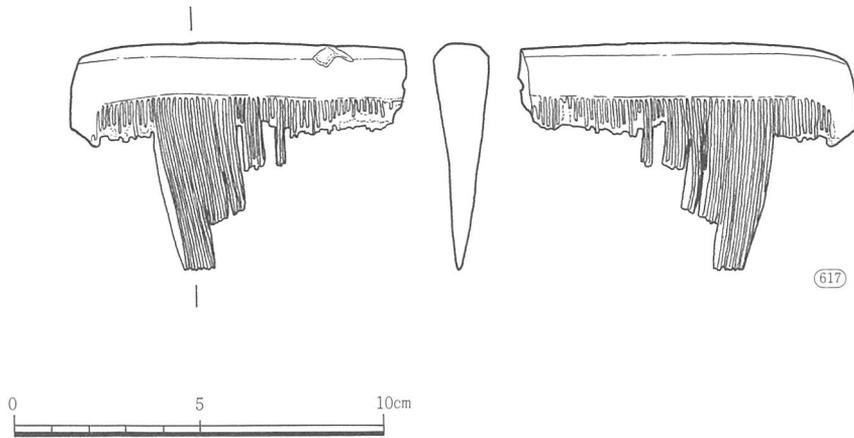
第116図 1 - OW出土遺物(2)

高台を付している。

590～602は土師器の杯である。小片が多いため、全体の形状を確認できるものは少ないが、全体に丸みを持つもの(590, 591, 594)と、平らな底部から口縁部がまっすぐ立ち上るもの(592, 593)に大別できる。598には外面に墨書がみられる。小片のため墨書の内容は不明である。

603, 604は土師器の小皿である。ともに比較的丸みを持つ底部から、口縁部が低く短く外上方に立ち上るもので、端部は丸くおさめている。

605～609は土師器の皿である。比較的平らな広い底部から、口縁部が低く短く外上方へ立ち上るもので、端部を丸くおさめるもの(605～607)、尖らせ気味のもの(608)、内



第117図 1-OW出土遺物(3)

側に段を持つもの(609)などがある。

610~616は黒色土器A類の椀である。全体的に丸みを持つ形状を呈しており、底部外面周縁に高い貼付高台を付す。口縁端部内側に沈線を施すもの(611~613)と、沈線を施さないもの(610, 614, 615)がある。器面の調整は、内面全体に密なヘラミガキ調整を施しており、外面は指押さえおよびナデによる。

617は木製の櫛である。いわゆる挽歯式の横櫛で、残存長6.4cm、器高4.25cmを測った。歯は1cmあたり9本付けられている。

4. 土坑

第2地区では、平安時代に比定される土坑が3基検出された。

13-OO (第118図, 図版17)

第2地区の南西端部の、J 08HKで検出した土坑である。遺構の西端部は調査区西壁外にのびている。楕円形状を呈し、長径(検出長)1.2m、短径0.6m、深さ0.22mを測った。埋土は1層で、5 Y R3/1黒褐色土である。内部から土師器の杯・小皿が多量に出土した。これらの土器は意識的に納められた状態で検出されており、13-OOはいわゆる祭祀的意味合いを持つ土器埋納土坑であると思われる。

13-OO出土遺物(第120図618~第121図675)

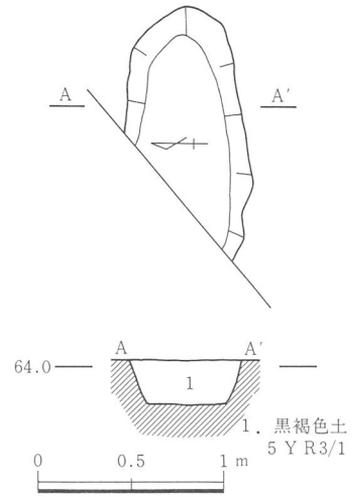
13-OOからは土師器が多量に出土した。そのうち図示し得たのは58点である。

618~632は土師器の杯である。比較的平らな底部で、口縁の立ち上りが低く外上方への

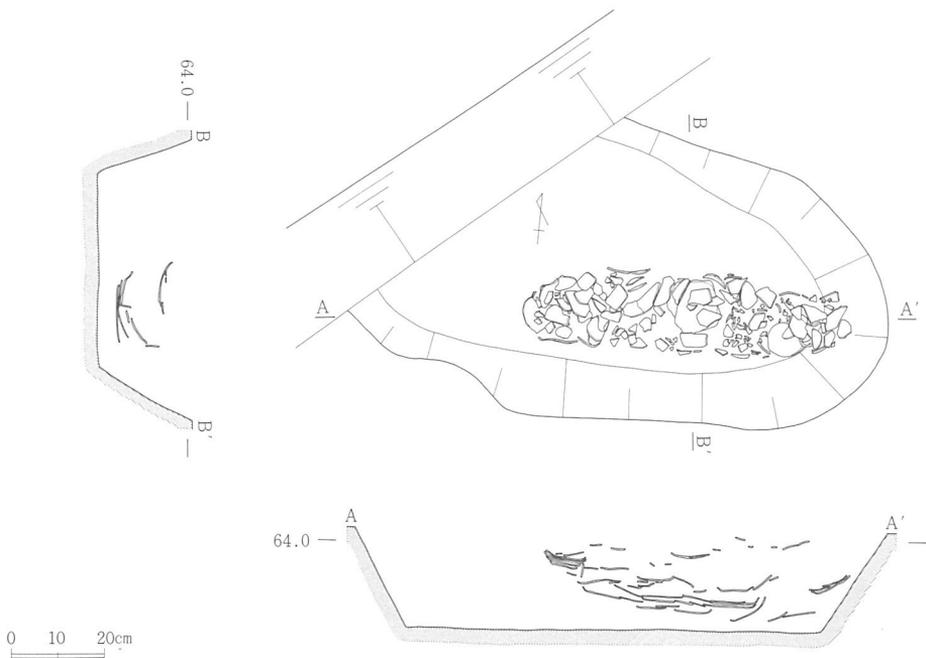
びるもの（618～627，629～631）と，小型で器高が高く，
全体的に丸みを持つもの（628，632）がある。

633，634は土師器の皿である。平らな底部で，口縁の
立ち上りが低く，内弯しつつ外上方へのびた後短く外反
する。

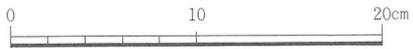
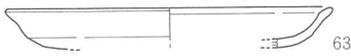
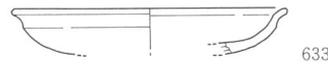
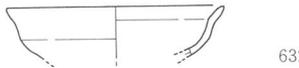
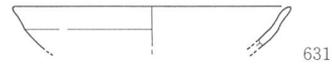
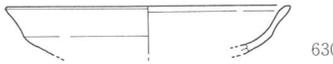
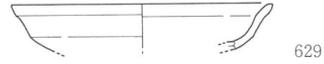
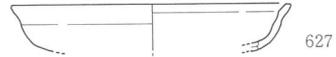
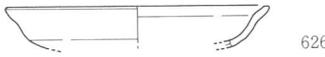
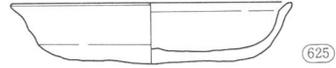
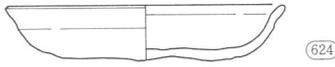
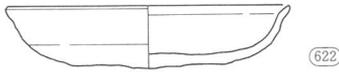
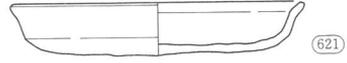
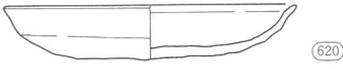
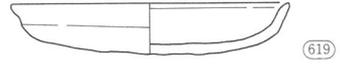
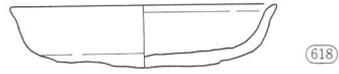
636～675は土師器の小皿である。これらはほぼ同一の
形状を呈しており，平らな底部で，口縁の立ち上りが低
く，短く外上方へのびるものである。口縁部を横ナデ調
整しているが，ナデが強いため口縁部と底部の境に段が
生じているものがある。



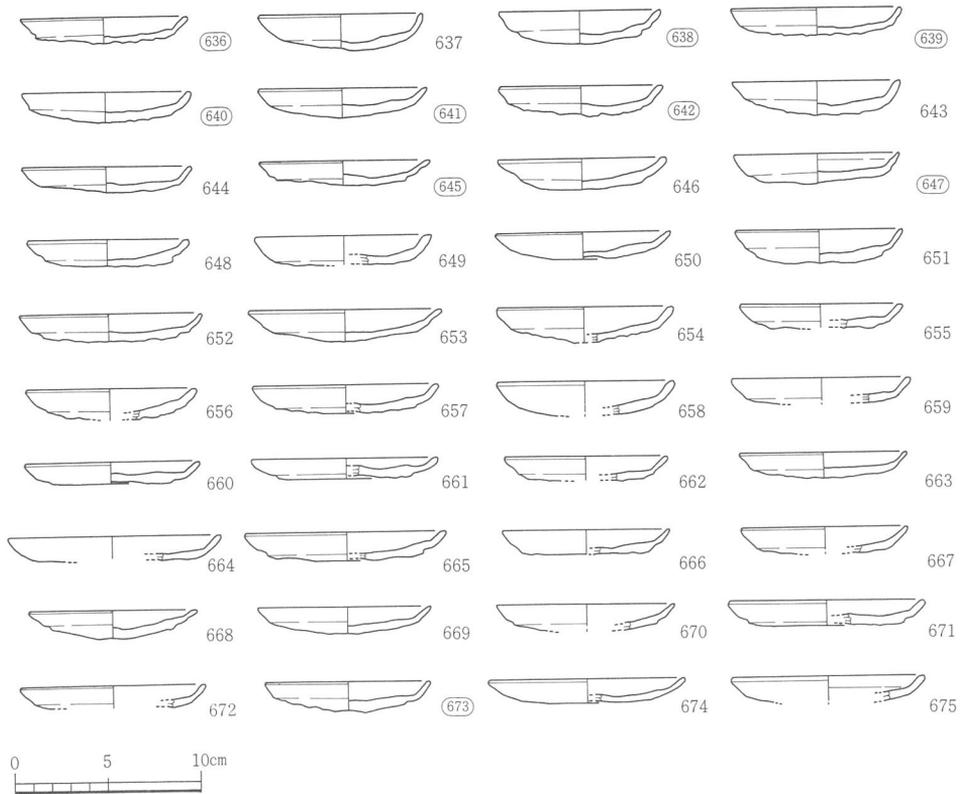
第118図 13-〇〇平面図・断面図



第119図 13-〇〇遺物出土状況



第120図 13-OO出土遺物(1)



第121図 13-〇〇出土遺物(2)

14-〇〇 (第122図, 図版18)

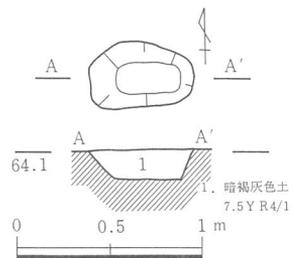
第2地区の南端部の, J08MLで検出した土坑である。楕円形状を呈し, 長径0.56m, 短径0.28m, 深さ0.17mを測った。埋土は1層で, 7.5Y R4/1暗褐灰色土である。内部から土師器の杯・小皿が多量に出土した。これらの土器は意識的にならべて納めた状態で出土しており, 13-〇〇と同様に祭祀の意味合いを持つ土器埋納土坑であると思われる。

13-〇〇と14-〇〇は極めて近い地点で見つかっており, 他には同種の土坑がみられない事, 第2地区の中でも, 同時期の遺構とは比較的離れた地点で検出された事などから, これらの土坑は特殊な性格を持つものと考えられる。

14-〇〇出土遺物 (第124図676~第125図757)

14-〇〇からは土師器が多量に出土した。そのうち図示し得たのは82点である。

676~691は土師器の杯である。そのうち676~680は比較的

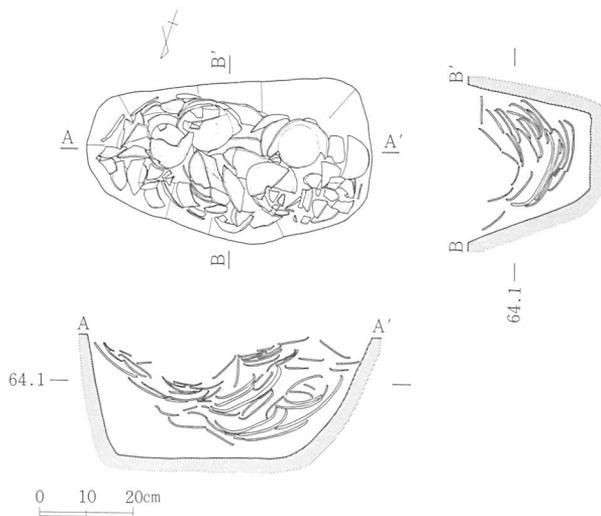


第122図 14-〇〇平面図・断面図

丸みを持つ底部から、口縁部が内湾しつつ外上方に立ち上る。全体的に丸みを持つ形状を呈し、器高も高い。

681は同タイプで小型のものである。

682～691は平底の底部で、口縁の立ち上りが低く、内湾しつつ外上方へのびる。端部付近で軽く外反して終る。



第123図 14-〇〇遺物出土状況

692～757は土師器の小皿であ

る。多少の個体差はあるものの基本的には同じ形態のもので、平底の底部から口縁部が低く短く外上方へ立ち上る。口縁部外面を横ナデしており、底部と口縁部の境に段が生じるものが多い。

15-〇〇 (第126図)

第2地区の南東端部の、J08LPで検出した土坑である。楕円形状を呈し、長径1.13m、短径0.5m、深さ0.45mを測った。埋土は1層で、5BG4/1暗青灰色土である。内部から土師器が少量出土した。

15-〇〇出土遺物 (第127図758, 759)

15-〇〇からは土師器が少量出土した。そのうち図示し得たのは2点である。

758は土師器の碗と思われる。口縁部のみの破片である。口縁の立ち上りが内湾しつつ外上方へのびており、全体的に丸みを持つ形状を呈する。

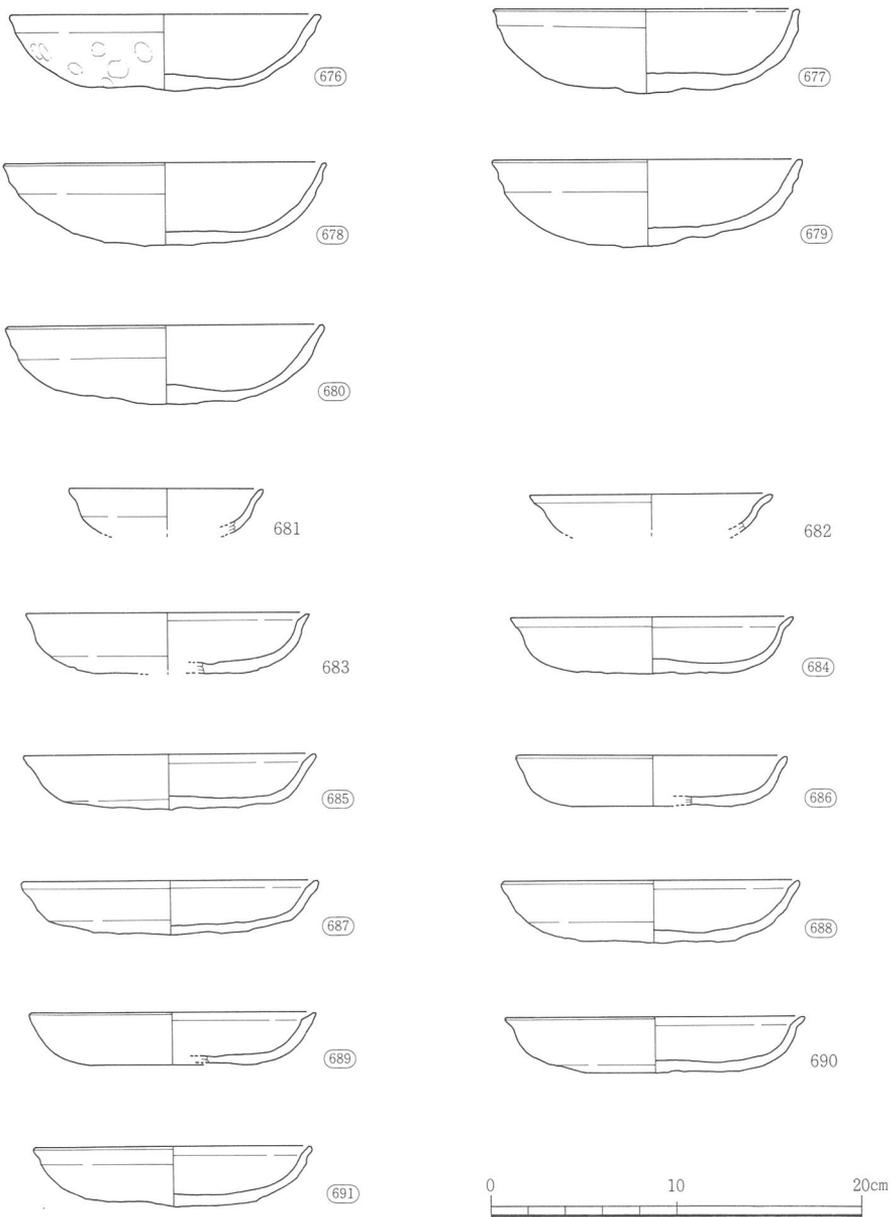
759は土師器の甕で、口縁部のみの破片である。口縁の立ち上りが短く、外上方へのびる。端部外面に面をなす。

5. ピット

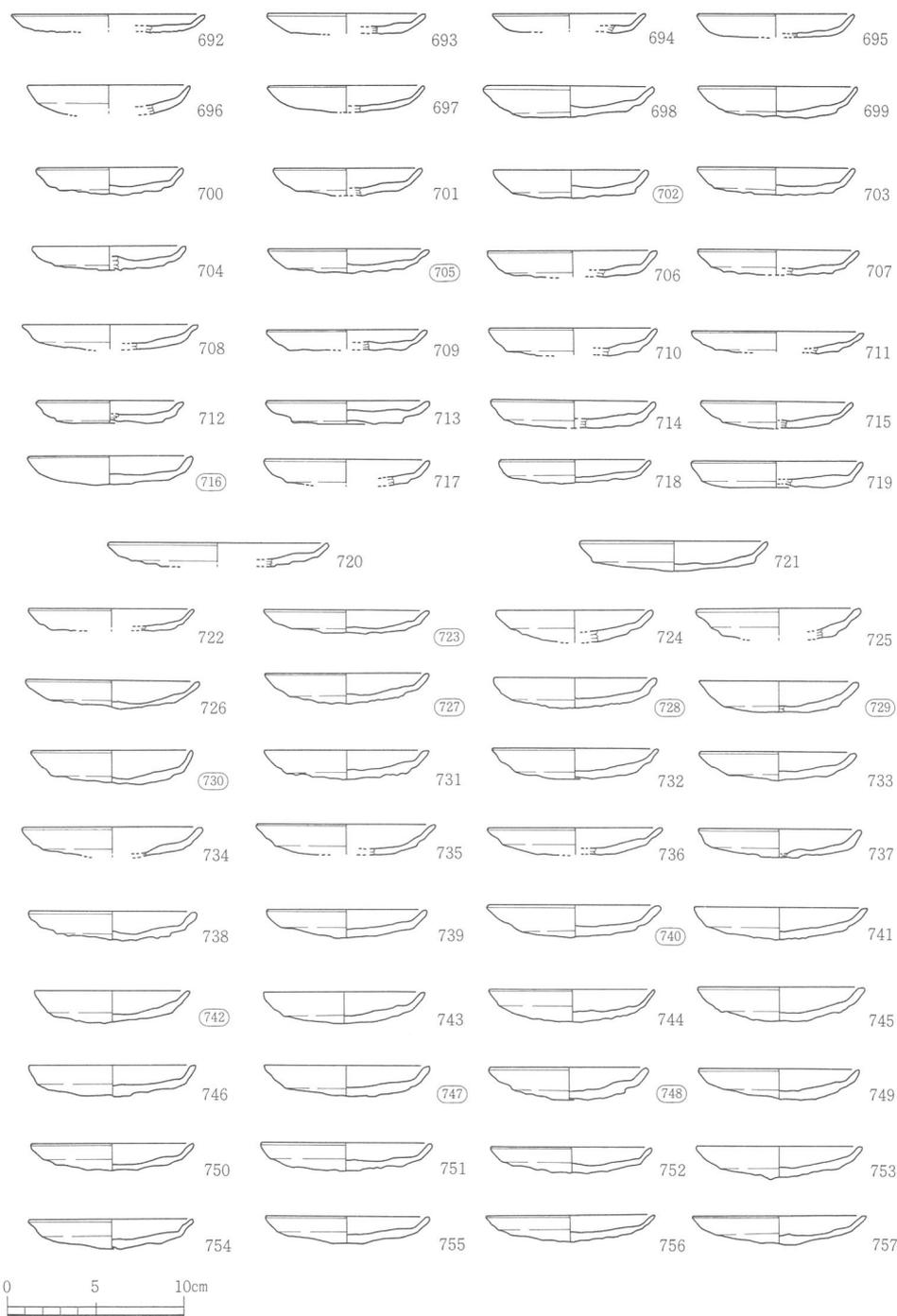
第2地区では、200を超えるピットが検出されているが、そのうち掘立柱建物を構成する柱穴以外で、平安時代に比定されるものが10ヶ所確認できた。

32-〇P (第128図)

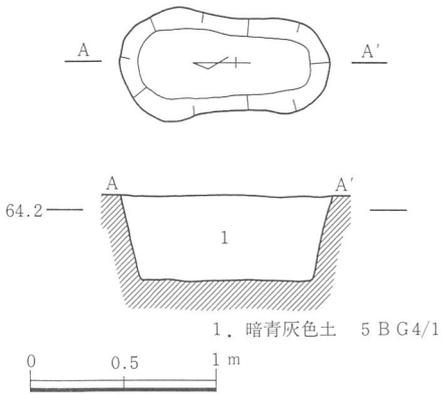
第2地区の中央部の、J08DMで検出したピットである。円形状を呈し、径0.2m、深さ0.17mを測った。床面付近に黒色土器A類の碗が1個体納められており (第128図)、3



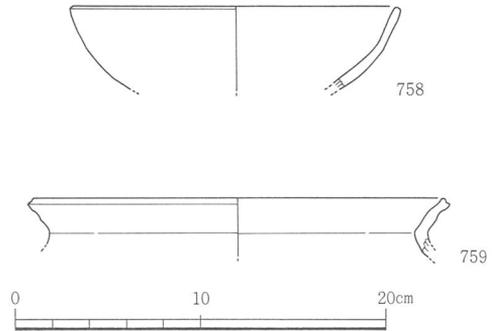
第124図 14-〇〇出土遺物(1)



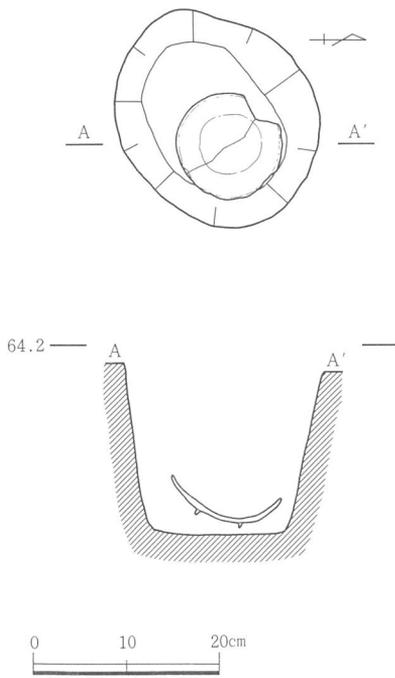
第125図 14-O O出土遺物(2)



第126図 15-00平面図・断面図



第127図 15-00出土遺物

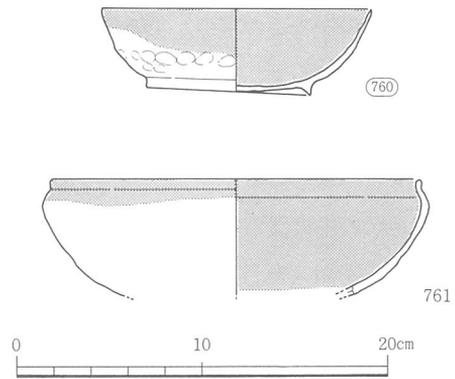


第128図 32-OP遺物出土状況

2-OPは地鎮の目的を持った土器埋納ピットと思われる。内部からはこの他に黒色土器がごく少量出土した。

32-OP出土遺物（第129図760, 761）

32-OPからは黒色土器A類がごく少量出土した。そのうち図示し得たのは2点であっ



第129図 32-OP出土遺物

た。

760は黒色土器A類の碗である。平底に近い底部で、口縁の立ち上りが内弯しつつ外上方へのびる。底部外面周縁付近に断面三角形の貼付高台を付す。

761は黒色土器A類の鉢である。底部を欠損しているが、比較的丸みを持つ底部と思われる。口縁の立ち上りが内弯しつつ外上方へのび、上端で短く内傾する。口縁部はごく短く直立して終る。

33-O P (第130図)

第2地区の中央部西端付近の、J 08G Kで検出したピットである。円形状を呈し、径0.51m、深さ0.3mを測った。内部から土師器・黒色土器がごく少量出土したが、図示し得るものはなかった。

34-O P (第130図)

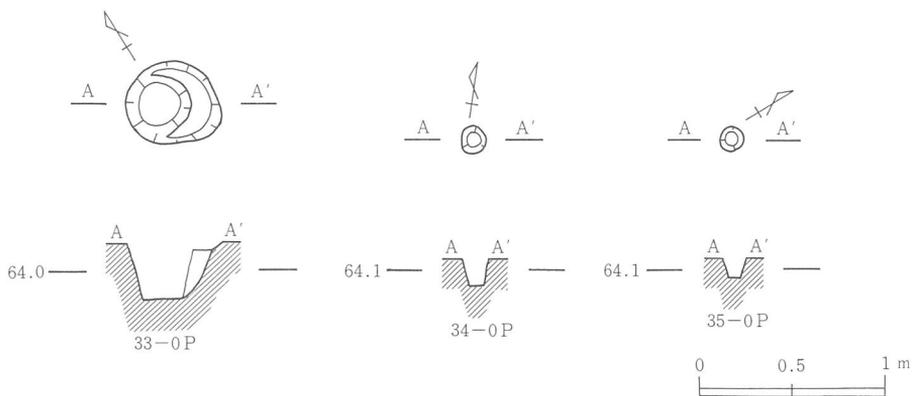
第2地区の中央部西端の、J 08G Kで検出したピットである。円形状を呈し、径0.13m、深さ0.14mを測った。内部から黒色土器がごく少量出土したが、図示し得るものはなかった。

35-O P (第130図)

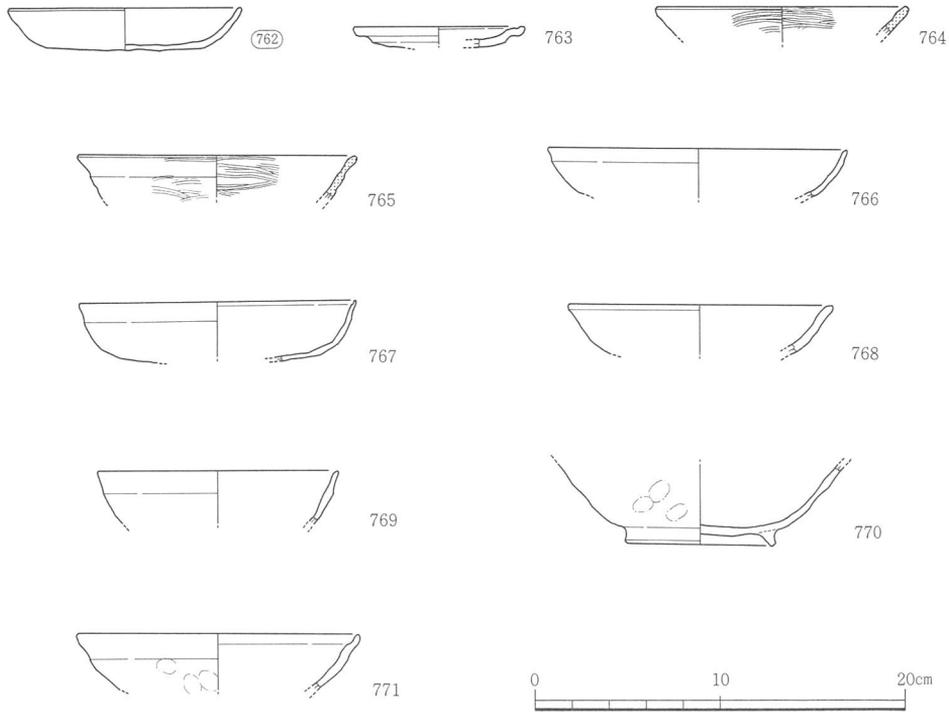
第2地区の中央部西端の、J 08G Kで検出したピットである。円形状を呈し、径0.12m、深さ0.11mを測った。内部から黒色土器がごく少量出土したが、図示し得るものはなかった。

36-O P

第2地区の北東端部の、J 03U Pで検出したピットである。円形状を呈し、径0.32m、



第130図 第2地区平安時代ピット平面図・断面図



第131図 第2地区平安時代ピット出土遺物

深さ0.26mを測った。内部から土師器が少量出土した。

36-OP出土遺物（第131図762）

36-OPからは土師器が少量出土した。そのうち図示し得たのは1点である。

762は土師器の杯である。平らな底部で、口縁部はわずかに内弯しつつ外上方へ立ち上る。

37-OP

第2地区の北端部の、J03VMで検出したピットである。円形状を呈し、径0.36m、深さ0.29mを測った。内部から土師器・瓦器などがごく少量出土した。

37-OP出土遺物（第131図763～765）

37-OPからは土師器・瓦器などがごく少量出土した。そのうち図示し得たのは3点である。

763は土師器の小皿である。平らな底部で、口縁の立ち上りが一度短く内弯した後すぐ

に外方へ屈曲して終る。端部を内側に曲げ込んでいる。

764, 765は瓦器で、碗の破片である。ともに口縁部のみの小片である。

38-OP

第2地区の南半部西端の、J08BK・CKにまたがる地区で検出したピットである。円形状を呈し、径0.5m、深さ0.21mを測った。内部から土師器がごく少量出土した。

38-OP 出土遺物 (第131図766)

38-OPからは土師器がごく少量出土した。そのうち図示し得たのは1点である。

766は土師器の杯で、口縁部のみの破片である。口縁の立ち上りが内弯しつつ外上方へのびる。端部は尖らせている。

39-OP

第2地区の中央部やや北寄りの、J08CMで検出したピットである。円形状を呈し、径0.34m、深さ0.15mを測った。内部から土師器がごく少量出土した。

39-OP 出土遺物 (第131図767)

39-OPからは土師器がごく少量出土した。そのうち図示し得たのは1点である。

767は土師器の杯である。平らな底部で、口縁の立ち上りが内弯しつつ外上方へのびる。端部は一度つまみ出した後内側へ曲げ込んでいる。

40-OP

第2地区の中央部西端の、J08CLで検出したピットである。円形状を呈し、径0.22m、深さ0.13mを測った。内部から土師器がごく少量出土した。

40-OP 出土遺物 (第131図768)

40-OPからは土師器がごく少量出土した。そのうち図示し得たのは1点である。

768は土師器の碗である。口縁部のみの破片で、口縁の立ち上りが内弯しつつ外上方へのびる。

41-OP

第2地区の南東部の、J08JNで検出したピットである。円形状を呈し、径0.45m、深さ0.11mを測った。内部から土師器がごく少量出土した。

41-OP 出土遺物 (第131図771)

41-OPからは土師器がごく少量出土した。そのうち図示し得たのは1点である。

771は土師器の碗で、口縁部のみの破片である。

第3項 鎌倉時代

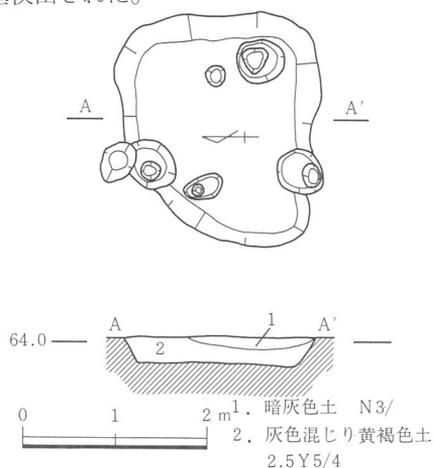
鎌倉時代に比定される遺構としては土坑、溝などがある。

1. 土坑

第2地区では、鎌倉時代に比定される土坑が2基検出された。

16-〇〇 (第132図, 図版19, 20)

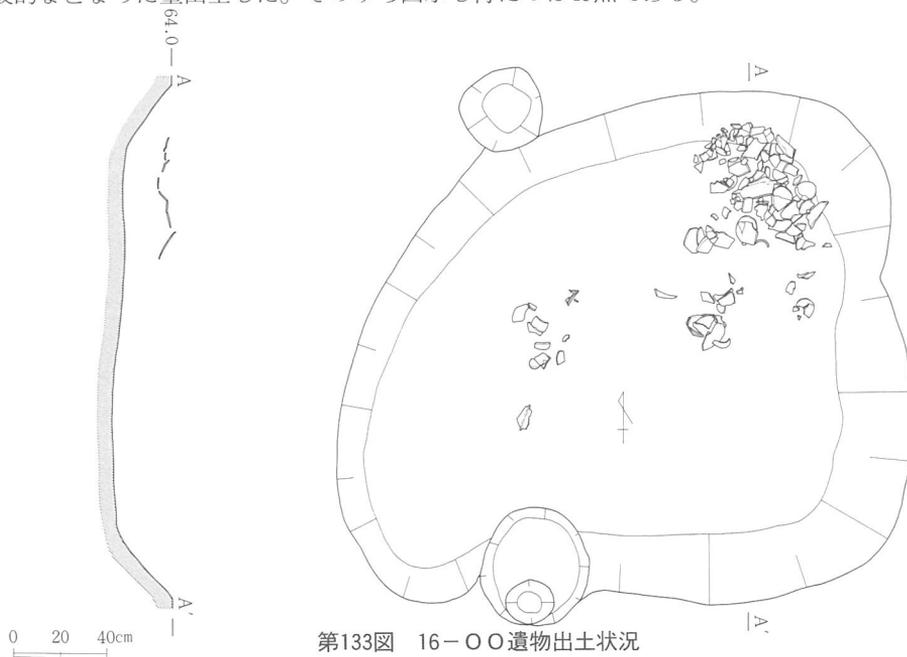
第2地区の北端部の、J 03VM・VNにまたがる地区で検出された土坑である。四角形状を呈し、長径3.2m、短径1m、深さ0.12mを測った。埋土は2層に分層でき、上よりN3/暗灰色土、2.5 Y5/4灰色混じり黄褐色土となっている。内部から須恵器・土師器・瓦器などが比較的まとまった量出土した。



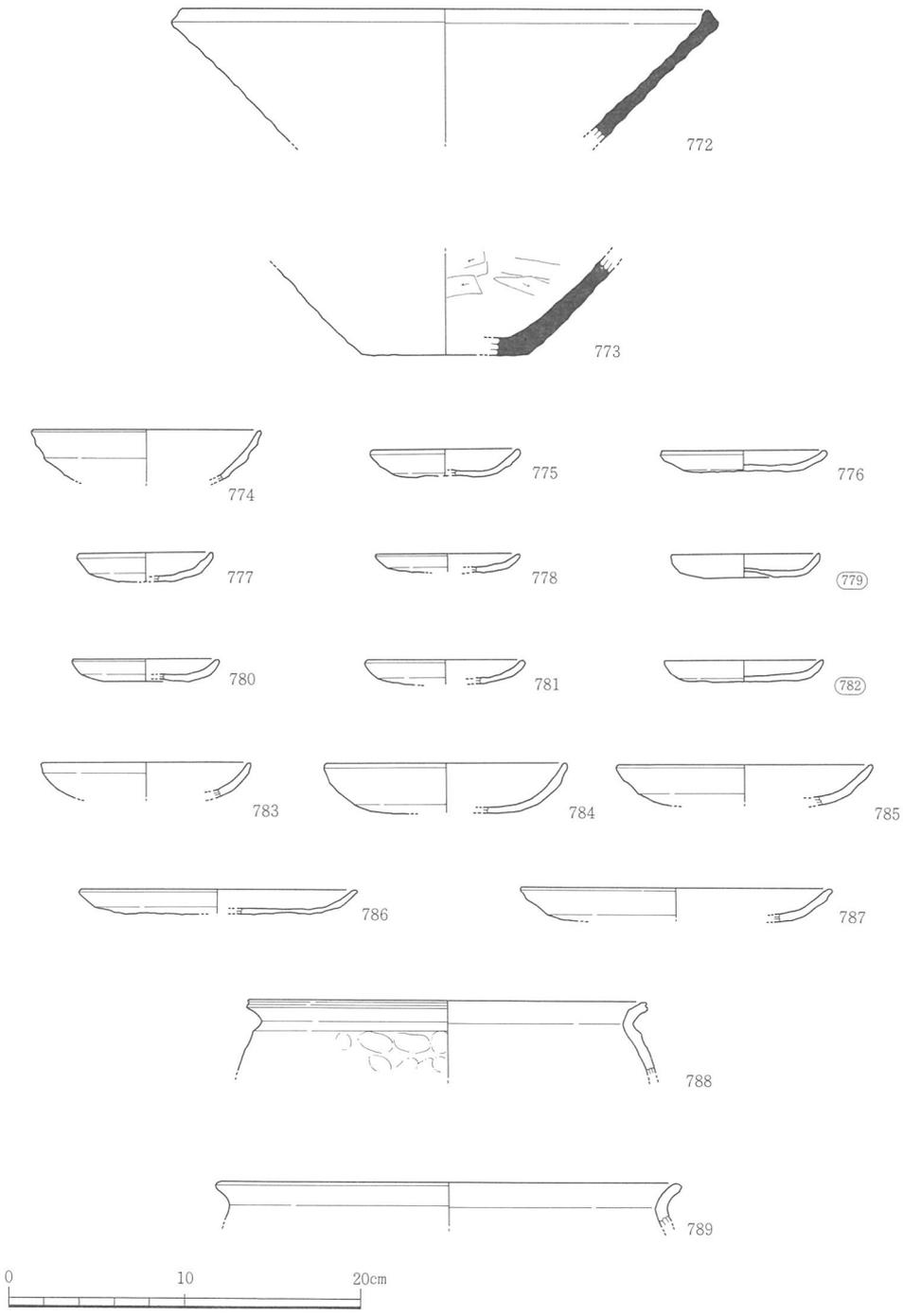
16-〇〇出土遺物 (第134図772~第138図820)

16-〇〇からは須恵器・土師器・瓦器などが比較的まとまった量出土した。そのうち図示し得たのは49点である。

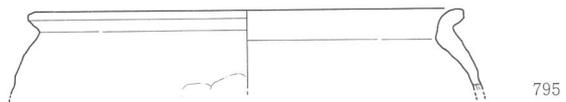
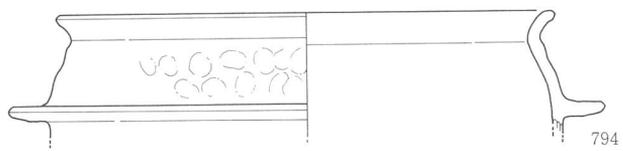
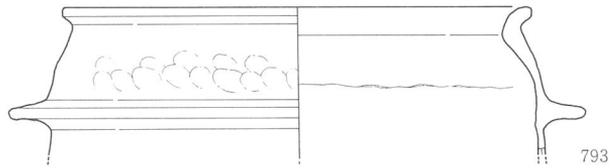
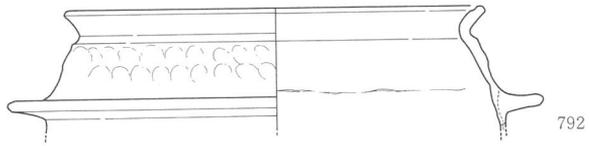
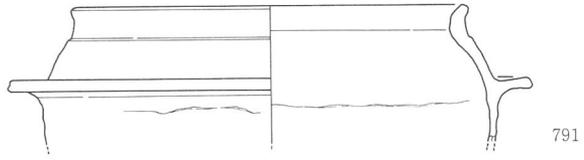
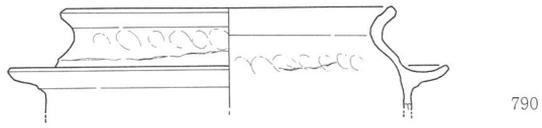
第132図 16-〇〇平面図・断面図



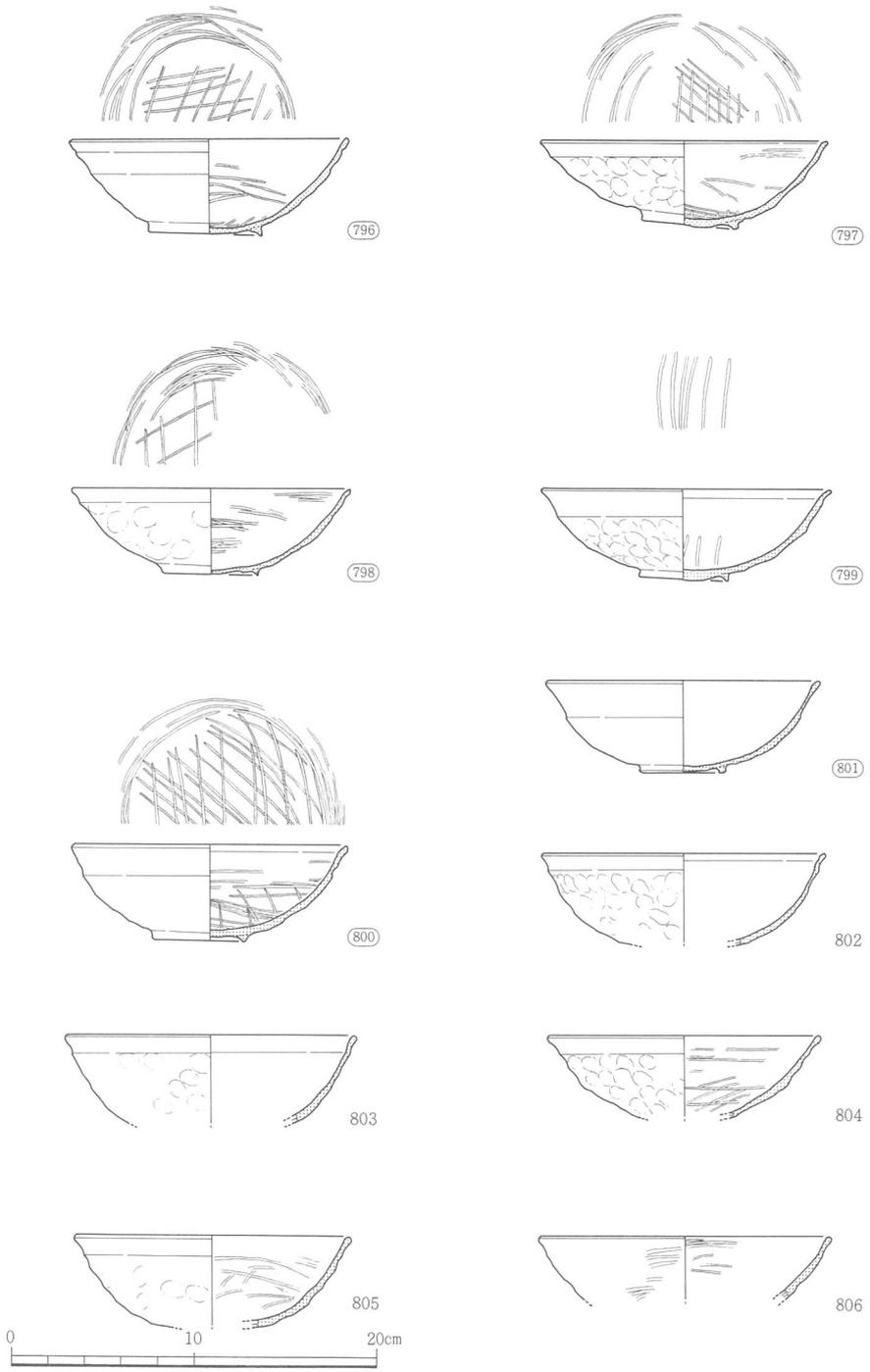
第133図 16-〇〇遺物出土状況



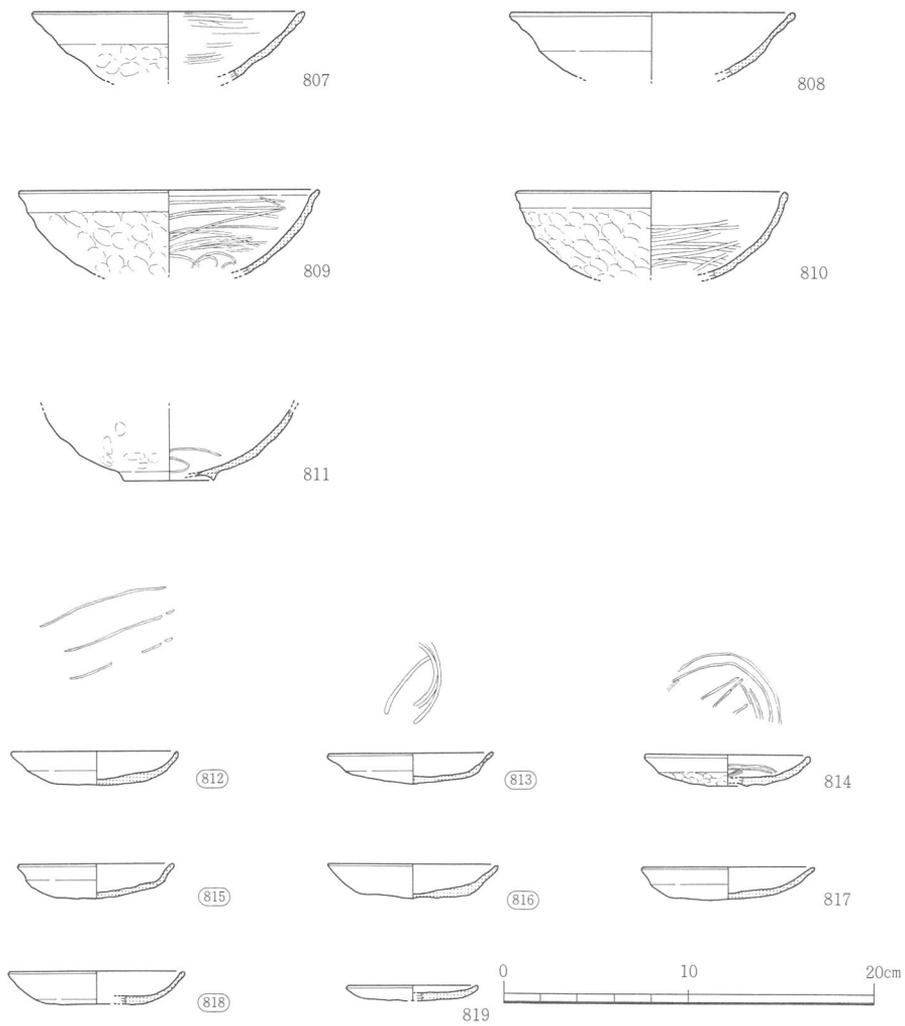
第134図 16-〇〇出土遺物(1)



第135图 16-〇〇出土遺物(2)



第136图 16-00出土遺物(3)

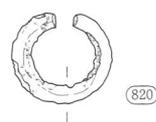


第137图 16-〇〇出土遺物(4)

772, 773は須恵器の鉢である。そのうち772は口縁部の破片である。口縁の立ち上りがまっすぐ外上方にのび、端部は上方にやや肥厚し、外側に面をなす。

773は底部付近のみの破片である。平らな底部で、口縁の立ち上りがまっすぐ外上方にのびる。

774は土師器の椀で、口縁部の破片である。全体的に丸みを持った形状を呈している。



820



第138図 16-〇〇出土遺物(5)

775~782は土師器の小皿である。小さな平底の底部で、口縁の立ち上りが内弯しつつ比較的高くのび、全体的に丸い感があるもの(775, 777)、平らな底部から口縁の立ち上りが低く、短くまっすぐ外上方にのびるもの(778, 780~782)、両者の中間的なもの(776, 779)などがある。

783~787は土師器の皿である。比較的小さな平底で、口縁の立ち上りが内弯しつつ外上方に比較的高くのび、杯に近い形状を呈するもの(783~785)と、広い平底で、口縁の立ち上りが低く、短く外上方にのびるもの(786, 787)とがある。

788, 789は土師器の甕である。ともに口縁部付近の小片である。口縁の立ち上りが短く外反する。

790~795は土師質の羽釜である。すべて体部上半より上位のみの破片であるが、体部は球形をなすものと思われる。体部上半に鏝が貼付けられている。790は比較的肉薄で上反りの鏝で、その他は肉厚でまっすぐな鏝である。口縁部はくの字状に外反するもの(790, 792, 794)、短く直立気味のもの(791)、ごく短く端部が外側へ屈曲するもの(793, 795)などがある。

796~811は瓦器の椀である。形状は大きく2つに分けられ、比較丸みを持つ底部から、口縁が内弯しつつ外上方に立ち上るもの(800, 801)と、平坦な底部で、口縁の立ち上りが比較まっすぐ外上方にのびるもの(796~799)などがある。器高からみれば、比較的深く安定感のあるもの(796, 800, 801)と、浅いもの(797, 799)とがみられる。見込みの暗文は、斜格子状暗文を施すものと、連結輪状暗文を施すものがある。

器面の調整は、内面を荒いヘラミガキし、外面には上部のみごく荒いヘラミガキがみられる。

812~819は瓦器の小皿である。全体的に丸みを持つもの(812, 814)、平底の底部で、口縁の立ち上りが低く短く外上方にのびるもの(813, 816)、両者の中間的な形状を呈す